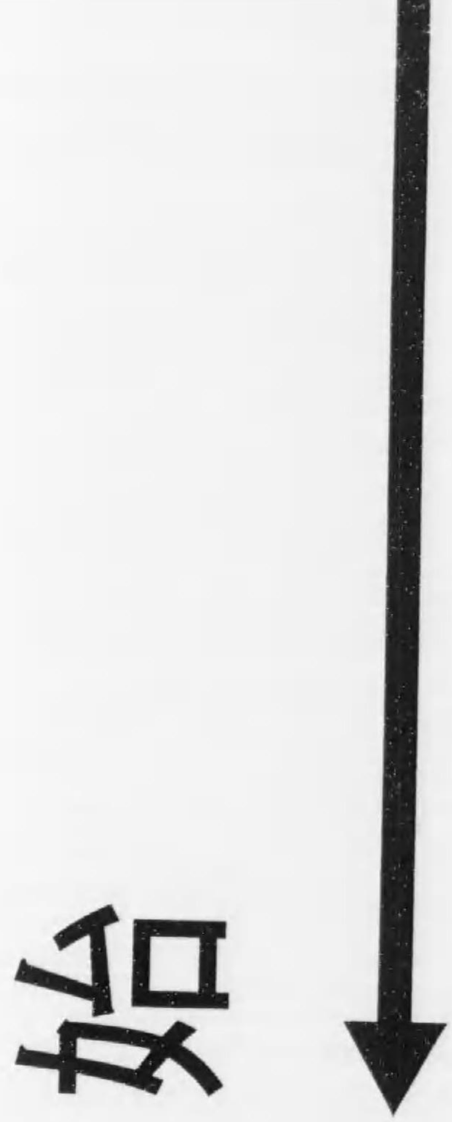

533
49

PAUL OF TARSUS

by

Robert Bird

パウロ傳

高垣勣次郎譯

大正
14.5.14
內交

533-49

序

此タルソのパウロの生涯は、新しい目的と新しい計畫とを以て書かれたものである。傳記としても面白く、歴史としても正確なやうに、思想、場面、并に事件を一つに織込んだのである。

少年諸君はイエスを愛するが、パウロは解つてをらぬ。イエスの樣子は、昔から寶玉に彫刻されたやうに鮮明に描かれてゐて、美術家が繪にするにも、著述家が描寫するにも容易である。ところがイエスの最大の使徒についてはさうはいかぬ。パウロの像は、白い霧や黑い影の中にぼうッとして見えない。彼の著いた物については澤山書かれてをるが、彼自身のことは餘り書かれてない。パウロを題にして大繪畫を描いた美術家が無い。造詣深き議論家神學者たる彼の形を描くことは六ヶ敷い。しかもパウロの旅行記と書簡とは、新約聖書の半分をなしてをるのである。パウロほど基督教に深い刻印をきざみつけ、基督教を廣く傳派した者はない。彼の傳道は他の模範である。イエスは炬火をつけ、パウロは其を持つて暗い國々へ走つていつたのである。然るに多の人には、神學說を教へた者としての外、あまり知られてゐない。

余は先に「ナザレの大工イエス」を著して、イエスを子供等の友として描出したが、此書に於て、パウロの活ける像を描いて、青年諸君に與へんとするのである。パウロを從來の如く靈覺の教師とす

るよりも、初めパリサイ人であつて、三十歳まではイエスを恐しく猛烈に憎惡したが、忽ち變化し、前生涯の傷痕を持つて終まで其を悲んだ人として書いた。

その爲に余は、繪筆を以てするやうに色をつけ、型を隅どつて千變萬化する背景を畫き、その中に茶色の外套を纏ひ革鞋を穿いた。パウロをかいたのである。また彼の書簡を抄出意譯して、長い手紙を讀まずに通ることをさせないやう、物語の適宜の所に挿入したのである。是では、或は聖書學者や神學者の賞讃は得られないであらうが、然しこれによつて相當パウロの眞相を傳へ、青年子女の興味をそゝり、我々の平民宗教のために貢獻する處多かつたパウロの生涯と事業に對する欽慕の念を高めさせることが出來たならば、余は、もつと學術的な書物が觸れ得ない讀者諸君に達し得た者として滿足する。

千九百年五月

ロバート・バード

譯者序

本書の譯出を企てたのが大正八年夏、毎年多くは夏休を利用して、漸く譯了したのが大正十二年八月。未だ譯者の手を離れてゐなかつた爲に、幸に九月の災厄を免れ、福永氏の義俠的好意によりて、今日始めて世に出ることを得たのである。

原著者ロバート・バード氏は、スコットランドの牧師である。チャールス・ビ・テンネー氏を通じて、譯出を快諾せられたが、餘りに永き月日を費したことゝ、原著の終近き二三章を抄譯したことゝを詫びなければならぬ。

內容の價値は、書物自ら證明するであらう。我等は、愛する日本に、神の光を限無く照らすために、信仰と宣教の旅を、パウロと共にしたいものである。

大正十四年四月十五日

目次

一　キリキヤの山野……一
二　名都市タルソ……四
三　その名……八
四　お母さんのお話……一一
五　お父さんの教……一四
六　入學準備……一八
七　寺子屋……二〇
八　唯一の教科書……二三
九　異邦人嫌ひ……二七
一〇　モーセの五卷……三〇
一一　白眼船……三三
一二　クレオパトラの金の船……三六

一三 樂しき安息日……三九
一四 會堂の燈明……四一
一五 六ヶ敷い儀式……四六
一六 羅馬の兵隊……四八
一七 會堂の祭儀……五一
一八 競技場……五四
一九 口授傳說……五七
二〇 父……六〇
二一 姉の結婚……六三
二二 悅ばしき途越節……六五
二三 エルサレム巡禮……六八
二四 偶像、神社、妙な學問……七一
二五 河と白い瀧……七四
二六 律法の子……七七
二七 機織小屋……七九

二八 天幕製造と見學……八三
二九 タルソを後に……八七
三〇 エルサレムへ……九一
三一 シリヤの門を潛りて……九四
三二 初めてパレスチナへ……九六
三三 綠の谿、茂れる山……九九
三四 エルサレム見ゆ……一〇〇
三五 街上の群衆……一〇五
三六 神殿の庭にて……一〇九
三七 神殿の一日……一一一
三八 老敎法師ガマリエル……一一四
三九 白き羔を殺して……一一六
四〇 初穗一束……一一三
四一 朝の犧牲……一一三
四二 天幕を疊んで……一一七

四三　手を洗ふこと……一三一
四四　バリサイ人に成るには……一三四
四五　シオンの丘と市の諸門……一三七
四六　ケドロン橋とオリブ山……一四一
四七　白柳の籠……一四三
四八　新月と角笛……一四七
四九　紅の花、金の鈴……一五〇
五〇　赤い頸卷……一五三
五一　黄色い香櫞、青い桃金孃……一五五
五二　誓と結婚……一五七
五三　野花咲く頃……一六〇
五四　一年を經て……一六三
五五　イエス……一六七
五六　イエスとパウロ……一六九
五七　エルサレムの學生時代……一七一

五八　羅馬の軍旗……一七四
五九　金の楯……一七八
六〇　羅馬の歴制……一八〇
六一　救主を待ちて……一八三
六二　バプテスマのヨハネ……一八六
六三　イエスと教法師達……一八九
六四　來りて我に從へ……一九三
六五　パウロ、イエスのことを聞く……一九七
六六　ナザレ宗徒との爭論……一九九
六七　雄辯家ステパノ……二〇一
六八　囚人ステパノ……二〇七
六九　ステパノ石にて殺さる……二〇九
七〇　ナザレ宗徒迫害……二一四
七一　ナザレ宗徒の逃亡……二一八
七二　神に逆ふ戰……二二一

七三　イエスの國を過ぎて……二三六
七四　藍い湖水……二三九
七五　「何ぞ我を迫害するか」……二三一
七六　暗と悲の裡に……二三六
七七　大なる變化……二三九
七八　ナザレ宗徒バウロ……二四三
七九　初ての演説……二四八
八〇　老漁夫ペテロ……二五二
八一　イエスの弟……二五八
八二　海路タルソへ……二六一
八三　復たの天幕屋……二六六
八四　皇帝の眞鑑像……二六八
八五　レビ人バルナバ……二七一
八六　城砦の市……二七六
八七　クリスチャンと稱ばれて……二七八

八八　ヘロデの輝く衣……二八二
八九　貧しき教徒……二八五
九〇　おなじみの船路……二九〇
九一　死ねる偶像、活ける神……二九三
九二　クブロへの船路……二九七
九三　ヴィナス島を過ぎて……三〇〇
九四　總督セルギオ・バウロ……三〇四
九五　魔術者エルマ……三〇七
九六　舟を浮べて……三一〇
九七　暑い原、凉しい山……三一四
九八　會堂に起ちて……三一七
九九　不思議な光景……三二一
一〇〇　市を追はれて……三二六
一〇一　石で擊て……三二一
一〇二　ジュピターかマーキュリーか……三三五

一〇三　牛と花飾……三三八
一〇四　石で擊たれ追出されて……三四一
一〇五　雪と氷の裡に……三四五
一〇六　解くる氷、消ゆる雪……三四八
一〇七　花咲く野邊……三五一
一〇八　輝く波路……三五四
一〇九　廣く開かれた門……三五六
一一〇　誤られたるエルサレムの信徒……三五九
一一一　外國人も基督者と成り得るか……三六三
一一二　冬の遠乘……三六六
一一三　中間を行く……三七〇
一一四　重荷を下して……三七四
一一五　激　論……三七八
一一六　回章を携へて……三八二
一一七　軍隊の通路……三八六

一一八　小暗き山路……三八八
一一九　青年テモテ……三九一
一二〇　サルタン山脈……三九六
一二一　アジヤを横に……三九九
一二二　トロイの白き平野……四〇三
一二三　薄紅の葉、金色の山……四〇八
一二四　紫布の商人ルデヤ……四一一
一二五　葉蔭の谷間……四一四
一二六　樺棒に擲たれて……四一七
一二七　地　震……四二〇
一二八　謙遜な釋明……四二三
一二九　羅馬街道、大理石門……四二六
一三〇　小暗き會堂……四三〇
一三一　桃色の頭巾、刺繍の外套……四三三
一三二　戸を閉ぢて……四三六

一三三　優しき會堂のユダヤ人……四四〇
一三四　雲にかくるゝオリムパス……四四四
一三五　女神の冠……四四八
一三六　銅像と白い宮……四五一
一三七　獨りアテネに……四五五
一三八　アンドロニカスの日時計……四六一
一三九　廊上の説教者……四六一
一四〇　マーの赤岩山……四六七
一四一　また後程……四六七
一四二　海　路……四七四
一四三　海の橋……四七七
一四四　醉へる水夫、偶像の宮……四七九
一四五　衣を拂ひて……四八四
一四六　夕餉を共に……四八七
一四七　最初の書簡……四九一

一四八　青葉の飾……四九五
一四九　働かぬ者は食ふな……四九九
一五〇　優しい總督ガリオ……五〇三
一五一　白い帆、青い海……五〇八
一五二　織職アクラ……五一二
一五三　僞クリスチャンの活動……五一七
一五四　自由か束縛か……五二三
一五五　愚なるガラテヤ人……五二六
一五六　最初の綱を絶ちて……五三〇
一五七　黑い山を越えて……五三三
一五八　我は驚かされた……五三六
一五九　イエスの言……五三九
一六〇　危き途……五四三
一六一　世界の驚異……五四七
一六二　エジプトのユダヤ人アポロ……五四九

一六三　自活傳道……五五三
一六四　黑いダイアナ……五五六
一六五　ツラノの學舍……五五八
一六六　偶像の誕生日……五六一
一六七　市から町へ……五六五
一六八　短い船路……五六九
一六九　呪文師の書物を火中して……五七二
一七〇　クロエの奴隷達……五七七
一七一　銀細工屋の演說……五八二
一七二　ダイアナ萬歲……五八六
一七三　島と岬の間を……五九一
一七四　「我が眞實の子テモテ」……五九四
一七五　冬の航海……五九五
一七六　黑い敷石道……五九九
一七七　ギリシヤの稚峯……六〇三

一七八　愚な誇……六〇六
一七九　救濟寄附金……六〇九
一八〇　コリントへ……六一五
一八一　惡弊を摘出して……六一四
一八二　日光の頂に立ちて……六一九
一八三　エルサレム、ローマ、スペイン……六二三
一八四　心後るゝエルサレムへの旅……六二六
一八五　窓の少年……六三〇
一八六　悲しき別れ……六三三
一八七　「何ぞ歎きて我が心を挫くか」……六三五
一八八　熱心黨と短刀組……六三八
一八九　集めた寄附金……六四〇
一九〇　「イスラエルの人々助けよ」……六四三
一九一　ルシヤの手中に……六四八
一九二　羅馬の自由民……六五二

一九三　「我はパリサイ人」……六五六
一九四　甥の盡力……六六〇
一九五　一夜の騎旅……六六一
一九六　辯護士テルトロ……六六四
一九七　ルシヤの來るまで……六六八
一九八　美しきユダヤ王女……六七〇
一九九　奴隷オネシモ……六七一
二〇〇　新總督フエスト……六七五
二〇一　ユダヤ最後の小王……六八〇
二〇二　「パウロよ、汝狂氣せり」……六八三
二〇三　海路ローマへ……六八六
二〇四　怒る海、破るゝ船……六八八
二〇五　マルタ島及シシリイ島……六九一
二〇六　アピオ街道に沿うて……六九六
二〇七　ローマ人の出迎……七〇〇

二〇八　道の女王……七〇二
二〇九　金の標柱……七〇四
二一〇　古　橋……七〇八
二一一　魚の暗號……七一一
二一二　怪物ネロ……七一五
二一三　祭禮、傳道者、馬鹿競走……七一八
二一四　朧な影繪……七二二
二一五　ローマ炎上……七二五
二一六　「基督教徒を獅子に喰はせ」……七二八
二一七　イエスとパウロ……七三二
二一八　奮鬪、信仰、冠冕……七三六

上　目

パウロ傳

一　キリキヤの山野

バウロの生れたタルソ市は、羅馬帝國に屬する小國キリキヤの古い首府であつた。市の在る廣々とした美しい平野は、藍(あを)い地中海の海岸から、闇いタウラス山脈の麓まで擴り、曲折(まがりくね)つた河が其間を流れてゐた。タルソは今も在るが、衰微して小さな町になり、河も町の外に出てしまつた。嘗てパウロの見た市の厚い石垣は、風雨に曝され壞れて所々殘り、頂には黃色い叢、裂罅(われめ)には赤い花、綠葉の蔓が一面にはびこつて居る。少年パウロが驅けて渡つた橋が、町の外に、孤然(ぽつねん)と架つて居る。後には偉い人物になつて種々書かれた子供のパウロが、洗足で、弓狀(アーチ)門の下に立つて、大聲あげて反響(やまびこ)に興がつた頃、どの樣な子供であつたか、崩れゆく石が話してくれることが出來たら、さぞ面白いであらう。

人の生涯は色々に變る。けれども性格の造られてゆく幼少時代の印象は、決して消えぬものである。或は市壁の內に、或は郊外に、少年の心に播かれた種子は、やがて花を開き、果實を結ぶのである。父母の手本、學校の課業、大學の研究、石の敷かれた市街の囂囂、百花咲き亂るゝ野の平穩と美、是

れ皆な、杯の型をきめる十指である。

バウロは市の子供、市の少年、市の青年であつた。神學宗教の學生、それから其道に精しい教師となつた。さう型が出來た上に、基督教徒となつたのである。既に出來た杯の中に、歳三十にして、生命の水、イエスの靈が注込まれたのである。

キリキヤの海岸は、地中海の一端にあつて、近にクプロ島あり、パレスチナの北僅に二百哩許の距離である。タルソは、エルサレムほど舊い市ではないが、ローマやアテンスよりは古く、大小の學校が有つて、教育にかけては、ローマ、アテンス以上で、エジプトの有名な市アレキサンドリヤの次だと云はれてゐた。バウロの生れる前、羅馬の皇子達の教師は、タルソの教育家の中から選ばれた。バウロがタルソに居た頃、名高いローマの著述家ストラボは、タルソ大學に在學してゐた。彼はタルソの事を自分の書物の中に書いてをる。哲學者アポロニアスもタルソに遊學した。タルソの詩人アレタスも有名で、シセロが彼の書物をラテン語に飜譯したのが今日迄遺つてをる。バウロもアレタスの書物を知つてゐて、ある句を引用してをる。

タルソ市は、偶然、山を越えて豐饒な平地を奪る爲にやつてくる軍隊の唯一通路に當つてゐたのでバウロの出生前、屢、外敵に征服せられ、ギリシヤ、羅馬兩國は此市を爭奪しあつたものである。遂にローマ領となつたが、市民は矢張、ギリシヤ語を用ひてゐた。バウロの三百余年前、アレキサンダ

ー大王が此市を訪うて、氷になつてゐる河に溺れて死ぬところであつた。バウロの生れる五十年許前には、かの名高い羅馬の大將マーク・アントニーがタルソに住み、非常に氣に入つたものと見えて、之を自由市にした。市民は其を誇として、銅貨に其事を鑄込んだが、バウロも屢それを讀んだであらう。アウグスト帝もタルソに好意を有ち、奉行廳を置き市會を開設くことを許可した。アウグスト帝の皇子の師傅であつたネスターは、バウロの少年時代に、タルソの市長であつた。

バウロの父はユダヤ人であつた。そして何か羅馬のために盡したと見えて羅馬市民權を與へられてゐた。征略者たる羅馬政府から市民權を與へられると云ふことは、大なる名譽であつたのである。バウロが天幕製造業を教へられたところを見ると、父自身その商賣をやつてゐたらしい。キリキアムと言ふ天幕用の强い毛織布が有つたが、其はキリキヤの山に飼はるゝ山羊の長い毛で織つたものであつた。

羅馬人は、キリキヤを二つに分けて、山陵起伏せる部を荒いキリキヤ、平坦な野原の部分を滑かなキリキヤと呼んでゐた。タルソはその滑かなキリキヤに在つて、近傍の平原は、約廿四哩許陸地に喰入つた美しい灣の曲線に沿うて四十哩の間に擴つてをる。山と言へば、小亞細亞中での一等高い、暗い、荒い山である。年中大低は、太陽の暑い時でも、山々の嶺は雪を戴いてゐて、それが碧空に輝いてをるのがタルソから見える。然し低い山腹は、深綠の松林を衣とし、樅の林は帶の加く、大平原に

頭を突出してをる丘陵には、樫、秦皮、枝葉廣がれるプレーン樹、無花果樹、さては胡桃などが繁茂してをる。

深い山峡から奔出するシドナス河は、瀧から瀧に落下して、低地を指して流れてゆく。パウロの住んだ頃には其が、ゆく〳〵多の支流を集めて延長廿哩、肥えた赤い土壌の野邊を貫いて、海へと注いだものである。牧場、五穀結實る農園、籬めぐらせる葡萄園、土か石の垣、又は刺ある籬に圍める果樹園相隣れる平野には、小さな村々、白い百姓屋、鼠色の土藏小屋が散在してゐた。尖細の白楊、黑い糸杉、桑樹、安石榴、林檎、櫻、銀色の橄欖など、河の邊に生え、家々の戸口にはその陰を投げてゐた。高い灌木林は、女萎、香しい忍冬、野生の葡萄などの星の如く咲き揃うた花を載せて、小川小溝の岸を塞いでゐた。

こんな風で、ユダヤ人の子と生れながら、パウロは自分の國から遠く離れて、山と海との間に横る豐饒な平原の、今から云へば往古の大學市とも稱ふべき市に住み、羅馬國法の下に、ギリシヤの風俗習慣の中に育てられたのである。

二　名都市タルソ

パウロの住んだ頃、シドナス河は、大洋通ひの船舶が十二哩溯つて來て、市の阜頭に荷物を下すこ

との出來たくらゐ大きかつた。タルソ市は其河の兩岸に建てられてゐて、周圍は高い石垣と兵營に當てた樓臺とで築上げてあつた。市中には、花園に圍れた富豪の宏壯な邸宅、狹い敷石街に軒を列ねた煉瓦造や木造の貧民の家々、田舍人の集る廣い市場、さては浴場、競走場、遊技場、戸外劇場が有つた。然し一等大いのは諸大學であつた。ストイク學派、プラトー學派、アリストートルの學派、エピキユラス學派、皆此處に敎へた。彼等の敎育は、百科學課と稱つて、數學、修辭學、倫理、辯證法、音樂、文法、競走拳闘から詩作演說法に至るまで、あらゆる學課を網羅してゐた。詩人、歷史家、醫學者、哲學者、法律家、雄辯家、軍人がこゝに生れて、パウロが其街上を歩く遙か前から、諸方に出て、タルソの名聲を擧げてゐたのである。就中此市の爲に最良い事をしたのは、シーザーアウグストを敎へたアテノドラスであつた。彼は帝を敎へた學校長であつた自分に對する好意として、タルソ市が羅馬帝國中最上の都市と同等であると云ふ勅許を受けた。だから後にパウロが、自分は卑しい市の市民ではないと言つたのは、むしろ控目に言つたのである。彼は、今こそ土耳其の小さな眠い町になつてをれ、其當時は、羅馬帝國の最名高い市に數へられるタルソの市民であると言つて可かつたのである。

パウロは果して何年に生れたか分らぬ。けれども兎に角、其時シーザーアウグストが羅馬皇帝でヘロデ大王がユダヤを治めてゐた事、また彼が、イエスよりは弱年であつた事も分つてをる。パウロ

がタルソで、嬰兒であつた時、イエスは既に少年で、ガリラヤの靜な谷に住んでゐたのである。此兩人は、遠く離れては居たが、同時代に生長したのである。然して一方が他方に及した感化が非常に深いから、パウロの生涯を書くには是非共、始終イエスの方も見てゆかなければならぬ。

讀者は、パウロは、世界歴史の朧げな昔に生活した人であると思つてはならぬ。彼よりも以前幾百年も昔に、興亡した國々の事さへよく知られてをる。たゞ彼の人物は、彼の書いたり言つたりした事の雲の中に、殆ど隱れてをるのである。然し我々の學校の教科書の中にも、パウロよりずつと前に住んだ人々の傳記や著述した物が載つてゐるのであつて、パウロも、さう云ふ人達の著書を學んだのかも知れない。

歴代のパロに治められたエジプトの歴史は、數千年の往古に溯ることが出來る。カルタゴには大將軍ハンニバルが有つた。アツスリヤにはニネベ市が有つた。ペルシヤ人の歴史も古い。マケドニヤはアレキサンダー大王を以て名高かつた。最後にギリシヤは、羅馬が世界を掌握するに至るまで、數世紀に亘る隆替の歴史を持つてゐた。而して羅馬は、ずつと新しく、現在我々の法律や風習は彼等に負ふところ多いのである。

我々の讀む有名な書物の著者等は、パウロより以前に住んだ者が多い。ギリシヤの大詩人ホーマーや、大哲學者ソクラテス、プラトー、アリストートル等は、遠の昔に死んでゐた。今日も讀まれてを

るギリシヤの悲劇詩人アシラス、ソホクレス、今猶ほ演說の模範であるデモスセネス、シセロ、數學の大家ユクリツド、アルキメデス、其手になる彫像の今日見ることの出來るヒデアス等は、パウロの生れるずつと前に生活した。都市生活について巧い詩を作つたホレース、その美しい詩が歐米の教科書にも載つてをる話上手のヴァージルでさへ、つい數年前に死んだばかりで、オヴイツドは未だ生きてゐた。かう考へて見ればパウロの時代は、ずつと近く感はれて、彼の人物が有々と昔の人々の間に浮出て來る。千八百年と言つても、世界の歴史から云へば短いものである。

パウロの父は、ベニヤミン族に屬し、其を誇つてゐた。ユダヤ人の最初の王サウルは、同族から出たのである。パウロの兩親はタルソに住んではゐたが、矢張りパレスチナを自分達の故郷と思ひ、ユダヤ人が世界中から來て神を拜む金の神殿の立つてゐるエルサレムの市を、全世界第一等の美しい市だと思つて居た。毎年、神殿の修繕費や經常費の爲に、エルサレムに獻金を送つてゐた。ユダヤ人は皆出來る丈け、樂しい祭例のために毎年エルサレムに集つたのである。

ヘロデ大王は、慘忍な怪物ではあつたが、ユダヤ人の爲には隨分盡した。是迄にエルサレムの神殿は三度建てられたが、次々に破壞されたのであつた。ヘロデは羅馬皇帝に受けが良かつたので、第四の而も、最立派な神殿造營の許可を得た。是が、イエスが其内にて教へパウロが禮拜した神殿で、また最後の神殿となつた。卽ちパウロの死後間もなく、タイタスに燒却てられたのである。

三　その名

タルソ・一歳から五歳

嬰兒が生れて八日目に、兩親は、今も同じやうに、嚴に、行末を祝つて、二個の名前を其子につけた。命名式が終つてから悅しい祝賀の席が開かれた。第一の名のサウロと云ふのは、昔の王の名で、ベニヤミン族には、なつかしい名であつた。又の名のパウロは、ローマ流の名で、此方が良く知られてゐるから、彼の母親は多分ヘブル名の方を呼んだらうと思ふけれども、本書では是を用ひることにする。

パウロは今日の基督信徒のやうにバプテスマを受けたのではない。大切にユダヤ人の會堂に連れて行かれ、そこで「割禮」と言つて、體に鋭い小刀で切傷をつけるユダヤ人の印をつけて貰つた。

兩親は非常に信仰の篤い人で、嬰兒につけられた此印を、今日の子供バプテスマよりもずつと大切に思つた。此印はモーセが命じたのである、此印が無い子供は天國に行くことは出來ぬと信じてゐた。此信仰では、成人して後、パウロは隨分困らされた。然し彼の父は嚴格なパリサイ人で、モーセの命令は一から十まで、祭司や教法師の教へる通りに正確に守らねばならぬものと信じてゐた。其は勿論容易なことでは無かつた。

そんな風であつたから、此息子が大人に成つて、父の嚴格なのに似て來たのも無理は無い。彼は生れると直ぐ神の爲に聖別せられた。卽ち母親は、パウロを最上のユダヤ人に育上げやうと決心をしたのである。このやうな美しい決心は、ユダヤ人の母親に限つたことは無い。基督教徒の母親ならば誰でも心の中に、神の爲に己の子供を捧げて、その小さな足が、イエスの踏んだ道を歩いて行くやうに導いてやらうと固く決心しない者が有らうか。

タルソ市にも、賣買の行はれる大なギリシヤの市なら何處でも有つたやうに、市の最貧しい片隅に道の狹いユダヤ人町が有つた。幼いパウロは、今日でも市場、野邊、井戸などに行くときやる通り、母親の背に負はれて其處等を歩いた。また、母親の裾につかまりながら、日の照りつけてゐる熱い石の上を、バタ〳〵やつて行つた。歩行が大部自由になると、埃で素足を眞黑にしながら母親について會堂まで歩いた。會堂に着くと母親は叮寧に足を洗つて遣つて、それから他からば見られないで、此方から丈け見える石の格子戸の陰に一緒に座つた。白い面布を被た母親の黑い眼には、格子の外の石床に、眞面目な顏をして男子連と座つてゐる父親の影が映つてゐた。パウロは、教師が聖書を讀み、祈禱をして其から話をするのを聽いた。勿論小さな子供の彼には其意味は解らなかつた。けれども母親は、パウロに早くから會堂に行くことを教へて置かなければならぬと思つて居た。心密に彼が成人した曉には、誰よりも偉い教師になるであらうと信じて居た。其手を曳き、其足を自分と同じ聖い生

涯の道に導いて行く母親が、子供の頭上に畫く黄金の夢に制限が有らうか。

此頃は、お母さんが唯一の先生であつた。草花ならは二葉のバウロの小さな手は、慈愛の手に導かれ、人なつつこい眼は、聖い母の眼に見入りながら、幼い心は、いつとなく母の模範に似てゆくのであつた。お母さんは、ユダヤ人の母たる者の義務として、バウロに聖書を敎へユダヤ民族の昔物語を聞かせ、神がユダヤ人の爲に惠を下し給うたこと、昔の偉い人達のことを話して聞かせた。モーセの律法と宗敎上の敎は、殊に力を入れて敎へた。彼女は會堂の婦人席で、眞面目に頭を垂れて、ユダヤ人ならば誰でも暗誦してゐた律法の聖句を、嚴かな音調で讀上げるのを幾度も聽いた。——

イスラヘルよ聽け、我らの神は唯一人の神なり。
汝心を盡し精神を盡し力を盡して神を愛すべし。
今日わが汝に命ずる是らの言は汝これを心にあらしめ、勸めて汝の子等に敎へ、
家に座する時も路を歩む時も、
寢る時も興る時も、これを語るべし。
汝また是を手に結びて號となし、
汝の目の間におきて誌となし、
また汝の家の柱と汝の門に書記すべし。

是等の語はバウロの母親の心に浸み、特別に强く彼女の心を動かした。また、次の語が、高聲に讀まれるのも屢聽いた。——

後の日にいたりて汝の子なんぢに問ふて、
この神が命じ給ひし誡命と法度と律法とは、
何のためなるやと言はば
汝その子に告げて言ふべし、
我らは昔エジプトにありてパロの奴隷たりしが、
エホバ强き手をもて我らをエジプトより導き出したまへり。

黑い眼の母親が、子供を連れ、會堂から出て、婦人の定規として、裏通を歸途につく。其途すがら、彼女は聖書の句や、子供でも心一杯に神樣を愛さねばならぬことなどをバウロに敎へるのであつた。つい今、聖書を讀む人が、路を歩む時もこれを語るべしと讀んだのである。

四　お母さんのお話

タルソ・一歳から五歳

無益な哲學を敎へたり、木や石の偶像を拜む異邦人の市の眞中で、母親が赤い頰をしたバウロに話

して聞かせたのは神や十誡について許りではなかつた。子供は、やがて大人になる。彼女は、先祖が虐待に會つた話、救出された話、サウロ王其他おなじみの英雄達の話をして、子供の心に燃きつけた。バウロは他の子供と同じやうに冒險談、戰爭記、武俠物語、不可思議物語が一等好きであつた。

夕映がいつしか山々を紫に染め、暮色蒼然として迫る夏の夕、蒼色の空に、チラ〳〵現れてくる銀色の星を戴いて、平坦い家根の上に涼みながら、バウロは、母が、牧羊者ダビデが、父の羊を喰ひに來る熊や獅子を殺したり、サウロ王の後を襲うて王となつたりした話をするのを、熱心に聞いた。ユダヤの王等中での賢人ソロモン王が、王位に即いたとき、自分の右に、母君の位を置た話しもして貰つた。王の話ばかりではない。人民の罪を悲んで洞穴に隱れ、野の烏に養はれた昔の預言者エリヤの話も有つた、貧しいユダヤ人の娘と生れながらベルシヤの女王となり、ベルシヤに連れられて來たユダヤ人等を助けた美しい女王エステルの話も聽いた。バウロのやうに、幼くして神に捧げられ、子供の時から祭司達と一緒に神の幕屋に住み、後には大預言者となつて、サウロをユダヤ人の王としたサムエルの委しい話もして貰つた。

冬の夜が來ると、入口の戸を閉ぢ、小窓の戸締をして寒い風を防いだ家の中で、小さな燈火の下に子供の衣物を織る青い毛糸を紡いでをる母親は、また色々な話をしてきかせた。子供の可愛らしい上衣を縫つて、青や赤の糸で襟に刺繍をしてをるうち、不圖、ヨセフの五色の衣のことを思ひ起して、

ヨセフが兄弟達の手で奴隷に賣られたこと、遂に大王パロの首相にまで榮達したことを話してきかせた。一番長いのはモーセの話であつた。美しいヘブルの嬰兒モーセが箱舟に入れられて、ナイル河の葦の中に浮んでゐるのをパロの王女が見付けて、自分の子として育てたこと、彼が大人となつてパロの前に立ちエジプトの奴隷となつてをるユダヤ人の自由を要求したこと、或夜死の使がエジプト全地を通つたこと等を話した。バウロは更に眼を瞠つて、其夜死の使がユダヤ人の家丈けは通り過して往つたので、其日を逾越節と云ふこと、翌日パロ王が、ユダヤ人にエジプトから出て行くことを命じたこと、モーセが民を引卒してエジプトを脱出し、シナイに往つて、雲と火の山上に立籠り、神の律法と稱ばれるに至つた十誡の彫付けてある二枚の石板を持つて降りて來た話に耳を傾けた。母親は、感心して聽いてをるバウロに、成人したら是等の律法を暗記しなければならぬことを親切に言ひ聞かせるのであつた。時には此長い話を聽きながら、子供らしく、バウロの眠つてしまふこともあつたであらう。

バウロはまた、母の見たエルサレムの金の神殿のことも聞いた。子供も澤山神殿に集つてをる、バウロも何時か往く時があると教へられた。お母さんは、また、歎息をつき、涙さへ流して、愛するユダヤの國を征略した憎い羅馬人のことも話した。マカビー家の勇士達が國を自由にせんと羅馬軍と戰ひ、悲しいかな一度は國民の士氣を喚起したが遂に羅馬の大軍のために再び壓倒せられた話をしては

眼輝き、聲震ふのであつた。さうして、彼女は聲を密めて、今に、ユダヤの救主メシヤが現れて、羅馬人をユダヤ國外に驅逐し、その口から出る火を以て、羅馬人を燒盡すのである、けれども其大なる救の日は、ユダヤ人が聖き民とならなければ、來ないと云ふことを言ひ聞かせるのであつた。

子供が母親の口から聞く話ほど本統の話は無い、母親の賞める英雄が一等偉いのである。母の顏が天使の顏の如く見え、その聲が神の聲のごとく聞える幼少の子供の心に植付けられる思想、大望、情熱ほど、純潔、崇高、深遠なるものは無い。されば少年パウロは、驚異と崇拜の心を以て、ユダヤ民族の歷史を學んだ。母親の話は、どれもこれも歷史と宗教の織合はされたものであつた。

五　お父さんの教

タルソ・一歳から五歳

パウロの家の入口の柱には、二三寸角の金屬の箱が結着けて有つた。其處を出入する人は皆、其箱に手を觸け其指に接吻して、口の內でお唱をした。其箱の中には、「イスラエルよ聽け、我らの神は唯一の神なり」と言ふ語を冒頭に、聖書の幾節の書付けられた羊皮紙が入つてゐるのであつた。

幼いパウロは未だ口も利けぬ頃から、母に負はれて其光つてをる箱の處を過ぎる時、さし上げて貰つて圓い手を伸ばし漸く其に觸つて、他人のするやうに、其小さな手を接吻した。

物が言へるやうになると、母親は、子供をエルサレムの方に向つて座らせ、擧げた手を合掌させ、自分が子供の時に母から習つた通の、朝夕の祈を唱へさせるのであつた。パウロが、どうしてエルサレムの方に向くのだと訊くことでもあると、彼女は、金の神殿がエルサレムに在るのである。其大きな紫の緞帳の後の暗い部屋に、神が在し給ふのであると敎へた。ダニエルが、バビロンに居た時、每朝夕、エルサレムの方角の窓を開いて祈禱した。其を止めない爲に獅子の洞穴に投込まれたが、獅子はダニエルを喰はなかつたと言ふやうな話をして聞かせた。

少年パウロが四歳になる迄は、お母さんが先生で、聖書の話をしたり、お母さんの通りに善い穩かな生涯を送れば必つと良い人になれると言ふことを敎へたりした。然し勿論、其迄でもお父さんは些とも構はなかつたと言ふわけでは無い。お父さんもお母さんと同樣、パウロの良い子供になるやう心配もし、聖書から色々の話もしてやつたのである。けれども、主として責任は母親に在つた。

昔の敎法師達は、子供が五歳になれば、家庭では日課を習はさねばならぬ。而して父親が、子供の主なる敎師とならねばならぬと敎へた。そこで小パウロも、僅五歳で既に、數千百のユダヤの歌詩文章を先づモーセの律法から初めて、舊約聖書の各書に亘り、更にモーセの日以來歷代の敎法師等が聖書に就て敎へた無數の傳說敎訓迄一々暗記して行くと言ふ長い面倒な修學に取掛つたのである。彼は此生涯の仕事を五歳の時初めて、三十歳の壯年に達するまで續けた。三十歳の時、彼は忽然、此大部

な律法教訓を極しない無用の勞役として、放擲してしまつたのである。彼は今の子供達のやうに、給入の教科書で習ひ初めたのではなかつた。文字や語學を教へられることも無かつた。聖書の物語が、彼の御伽噺であつた。聖書の歴史聖書の豫言が、彼が稍成長して後の樂であつた。ユダヤ人は、何も彼も聖書から教へた。教師達は、聖書以外の書物を讀んだり其中から學んだりすることを、あまり爲せなかつた。

パウロの最初の日課は、申命記中の一節で、母親か父親かゞ其をギリシヤ語で言ふと、パウロは其に從いて反覆又反覆、遂に暗誦して仕舞はなければならぬ。次にまた新しい節を、同じやうにして習ふのである。彼も他の子供と同じく、意味も解らない六ヶ敷い言葉を習ふのが、如何にも面倒だと思つたであらう。彼の母が、少しづゝ、毎日、朝に夕に、自分に從いて反覆させ、間違無く覺込むまで教へた聖句の例を示せば、次の樣なものである。

イスラエルよ今汝の神エホバの汝に要め給ふ事は何ぞや、惟是のみ即ち
汝がその神エホバを畏れその一切の道に歩み、
之を愛し心を盡し精神を盡して汝の神エホバに事へ又我が今日汝らに命ずるエホバの誡命と法度
とを守りて、身に福祉を得るの事のみ。

而して父親は、モーセが、神の律法として其民に初めて此等の誡命を與へた時に次の如き言を加へ

たと言つてパウロに暗記させた。——

汝らもし我今日なんぢらに命ずる吾命令を善守りて、汝らの神エホバを愛し心を盡し精神を盡して之に事へなば、我なんぢらの地の雨を秋の雨春の雨ともに時に隨ひて降し、汝らをして穀物を收入れしめ、且酒と油を獲せしめまた汝の家畜のために野に草を生ぜしむべし汝は食ひて飽かん。

是は神を拜する者にモーセの與へた約束であるが、然し命ぜられた通に爲ない者には罰の降るべき事をも宣告した。其事に就ても父親はパウロに教へる事を怠らず次の如き句をも聖書から取つて反覆修得させた。——

汝ら自ら愼むべし、心迷ひ翻へりて他の神々に事へこれを拜む勿れ。
恐くはエホバ汝らにむかひて怒を發して
天を閉ぢ給ひ雨降らず物を生ぜずして、
汝らそのエホバに賜れる美地より、
速かに滅亡するに至らん。汝等是等の我言を
汝らの心と魂との中に藏めよ。

即ちモーセは、若しユダヤ人が善人で、神を拜すれば神はユダヤ人の家庭と田畑とに祝ひし、若し神を愛せず敬はざる時は、神は必ずユダヤ人の家と畑とに罰を降し給ふのであるとユダヤ人等に教へ

た。バウロの兩親は篤く之を信じ、而してバウロにも斯く信ずることを敎へたのである。

六　入學準備

タルソ・一歲から五歲

黃金色に輝く朝、眞紅に染まる夕、母は、子供が父の前に暗誦すべき聖句を復習させながら、雲と火の山の陰の、黑い天幕の陣中に立つて、幸福か不幸か、イスラエル民は其孰れかを選ばねばならぬとモーセが警告した時、用ひた言は斯うである。お前もやがて暗記せねばならぬのだと言つて、バウロに敎へたのは次の句であつた。

視よ我今日汝らの前に祝福と呪詛とを置く。
汝らもし我が今日なんぢらに命ずる
汝らの神エホバの誡命に遵はば祝福を得ん。
汝らもし汝らの神エホバの誡命に遵はず
翻へりて我が今日なんぢに命ずる道を離れ
素知らざりし他の神々に從がひなば呪詛を蒙らん。

詩篇を學ぶ頃になると、母親はバウロに、詩篇は、白い衣を着たレビ人や子供の唱歌隊が、金の神

殿の白い階段に立つて、銀の喇叭の響に合せて歌つたもので、人々は下の廣い庭で其を聽くのであると敎へた。次の一節はユダヤ人が、慘忍なパロ王の手を脫れてエジプトを出た時のことを歌つたものである。

イスラエルの民エジプトをいで
ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき、
ユダはエホバの聖所となり
イスラエルはエホバの所領となれり。
海はこれを見てにげ
ヨルダンは後にしりぞき、
山は牡羊のごとくをどり、
小山はこひつじのごとく躍れり。

少年バウロは、もつと幼い時して貰つたやうに、お母さんの口から出るお母さんの言葉で、此等の物語をして貰ひ度かつた。けれども其はもう出來ぬのである。彼が善い悧巧な者にならうと望むならば、否でもお母さんの反覆するまゝに學ばなければならぬ。バウロは譯が解つても解らなくても、一生懸命やつたに相違ない。安息日が來ると、お父さんは、彼を膝に載せて、前週中彼の習つた聖句を充

分廻らぬ口で暗誦するのを、眞面目な顏をして聽いてくれる。お母さんは其側に居て、巧く日課を覺えてをるのを聞いて滿足さうに、微笑を以て奬勵して呉れる。其顏を見るとパウロの黑い眼は輝き、赤い頰は喜悅の血潮に染まる。物が良く習へるには二つの原因が有る、先生に對する愛と學ぶ學課に對する愛とである。此兩つの中でも、少年パウロの如き幼い者には、先生に對する愛の方が一層强く働くものである。お父さんは飽迄も嚴格、眞面目であつた。昔自分が親から敎はつたやうに、此子も充分敎へるのが自分の神聖な義務であると考へてゐた。パウロは種々な質問を發したに違ひ無いが、父は、餘り長い說明は與へ無かつた。聖書に、さう書いてあれば、其で充分なのだと敎へた。

かぐパウロは幼少の時から、聖書に言つて有ることを何でも其儘聽從ふやうに敎へられた。而して更に進むと此度は敎法師達の言ふ事も一から十まで受納れなければならぬと敎へられるのである。

七　寺子屋

タルソ・五歲から十歲

僅六歲の子供が學校に行つて、にこやかな母親の敎育を離れ、髭の生えた見知らぬ先生の冷い嚴しい敎育を受けるのは早い。然し敎法師の命令である。少年パウロも其歲から學校通を始めたのである。但し學校とは云ふものゝ、今日のやうな日當の良い氣持の可い校舍に椅子も備へられ、壁には繪が掛

つてをると云ふのではない。ユダヤ人の會堂の小さな汚い部屋で、机も椅子も繪も無い。パウロは敎科書を持運ばなくともよかつた。彼の學校には敎科書は無かつた。先生だつて持つて居なかつた。皆な暗記、暗記、暗記であつた。暗誦、暗誦、暗誦であつた。東洋諸國の子供の學校では今でも未だ生徒が床の上に座つて、校長の言ふ通りを暗誦する處が在る。

其頃は今のやうな聖書は無かつた。新約聖書は未だ書かれて無かつた。ユダヤ人の宗敎と歷史とを一緒にした記錄である舊約聖書は、各種の書物を集めた物で、紙草製の紙に黑インキで文字を書付けた卷物であつた。其寫本が今日迄殘つて、我々の用ひて居る聖書の原本になつたのである。然し中には失はれた書もあり、また或物は、今日の聖書に編入されなかつたのである。パウロが學校で習つた最初の學課は、ペンタテューク卽ちモーセの五卷と呼ばれる創世記、出埃及記、利未記、民數記略、申命記の中から選ばれた。各書は、黃色い壁紙のやうな廣い卷紙に記され、兩端を二本の棒に張付けて卷いてあつた。そして讀上げる箇所丈け、少しづつ開くのであつた。然し偉い先生になると、五卷全體、暗で憶えて居て、何處でも必要な聖句を言ふことが出來た。此五卷の事を、律法の書とも呼んだ。卽ちモーセの律法や法度が記してあるからである。パウロは入學第一に是を修めなければならぬのであつた、

さて或朝のこと、少年パウロは、兩親に伴れられて、市の狹い街を拔け、小さな暗い會堂の學校に

往き、校長に託けられる。母親が戸口に立つて見てをると、パウロは可愛らしい新調の短衣を着、組脚をかいて、二三十人の子供連の中に座つてをる。彼の黒い鋭い眼は、頭巾を被て、生徒の頭と並ぶ位な高座に組脚をかいた先生の顔を凝視めて居る。尙も聽いて居ると、先生は、言ふ通りを眞似ろ、と言つて、徹りの可い聲で短い文章を誦へ、手招して一緒に生徒に反覆させる。先生の言ふ通り高聲に反覆する生徒達の甲走つた叫聲の大きいと言つたらない。とてもパウロの聲が孰れだか分りはしない。然しよく見ると、その熱心な顏付、赤く燃えた頰、始めから他の子供に負けないと言ふパウロの樣子が讀める。母親は遂に街に出て考へながら家に歸り、さて子供の歸る足音のするのを待つて居る。始めて學校に行つた時は、子供等も六ヶ敷いかも知れぬが、然し自分の手から離して學校に遣つた子供の事を思つて、矢張り宅に置きたいと、寂しがつてゐる母親達の心もつらい。

少年パウロの日課は、學校ばかりではなかつた。お母さんは、ずつと以前に、祈の肩掛を拵らへてくれた。其はお父さんのに似た小さなので、四隅に藍い房が着いてゐて、衣服の下につけるものであつた。母に敎へられた短い祈を言つてからでなければ、其を着られないのが毎朝の規則であつた。また父母の爲る宗敎上の行事について解らぬことは何でも訊くやうに敎へられた。勿論何でも尋ね度い子供の事であるから、パウロは色々な問を發するのであつた。兩親は、何故して、碧空に新月の出るのが眞先に見やうとするのであらうか。どうしてお母さんは、或夜が來ると家ぢうの蠟燭に火をつけ

て、八夜の間毎晩蠟燭の數を殖し、遂には家の隅から隈まで燈火で晝のやうになると云ふやうな事をするのであらうか。何故或時にはパンに酵母を入れぬのだらうか。何故だつて、お母さんが部屋を奇麗に掃除して、其上また手燭をつけて、お父さんが隅々までパン屑を拾つて歩いたりするのであらうか。兩親は長い說明をして聞かせたが、パウロには良くは解らなかつた。成人になれば漸次解つて來ると敎へられた。

斯樣にしてパウロは學校の先生からばかりでなく、先生以上の先生、卽ち彼の善いユダヤ人の摸範たる兩親の言行に導かれて行つたのである。

八　唯一の敎科書

タルソ・五歲から十歲

家でも學校でも、赤い頰した少年パウロは、世界最大の事は、全心、全靈、全魂を以て神を拜し、モーセの律法を導つて、善良の生涯を送ることであると敎へられた。子供等の爲には、其律法を頭の中に入れて仕舞ふのが一番善い。さう爲なければ何も善い事は無く、さう爲れば何でも彼でも善い事ばかりになる。然しパウロは其以上に澤山舊約聖書から學んだ。ユダヤ人等は自分達の歷史を非常に誇つて、ユダヤ人は神に寵でられ愛されたる唯一の民であると信じたから、自然パウロもユダヤの昔

の歴史を澤山憶えねばならなかつた。

バウロは、モーセがエジプトの奴隷生活からユダヤ人を救出して、岩や砂や、山や谷の、不毛の土地に天幕を張りながら、四十年の間漂浪したこと、遂に人民をモアブの山まで連れて來て、如何にも美しい地、熱い曠野を旅して來た彼等が「乳と蜜の流るゝ地」と喜んで稱つた程の美しい綠の谷、閃めく流れのカナンを見せ、やがて是がユダヤ人の物になるのだと敎へたことを學んだ。モーセがネボ山で死んで、闘將ヨシュアは是に代り、モーセが大いに戰つて、カナンの人を、婦人子供に至るまで一人殘らず殺すやう命じたまゝに、其土地を征略すべく、人民を導いてエリコに近いヨルダン河を涉つた話も習つた。其時カナンには、アマレク、ヘテ、エブス、アモリ、カナン等の民族が住んでゐたが、モーセが、次のやうな語を以て、イスラエル人は決して彼等と交つてはならぬ。彼等の拜む偶像を拜してはならぬと敎へた各章をもバウロは敎へられた。——

汝の神エホバ汝が往きて獲べき處の地に
汝を導きいり多の國々の民……を
汝に付して汝にこれを擊せたまはん時は、
汝彼等を悉く滅すべし。
彼等と何の契約をもなすべからず。

彼等を憫むべからず。
また彼等と婚姻をなすべからず汝の女子を
彼の男子に與ふべからず彼の女子を、
汝の男子に娶るべからず。
其は彼等汝の男子を惑はして我を離れしめ、
之をして他の神々に事へしむるありて
エホバ是が爲に汝等に向ひて怒を發し、
俄然に汝を滅し給ふに至るべければなり。
汝等は反つて斯く彼等に行ふべし、卽ち
かれらの壇を毀ち其偶像を打摧き、
其アシラ像を切倒し、火をもて其雕像を焚べし。
其は汝は汝の神エホバの聖民なればなり。
汝の神エホバは地の面の諸の民の中より
汝を擇びて己の寶の民となし給へり。

小バウロが、そんなにカナンの人々を殺して可いのか其では慘酷で不正ではないかと訊ねると、神

の命令であるから構はぬのだと教へられた。勿論今日イエスの教を受けてをる基督教徒の子供達は、そのやうな説明では満足せず、婦人や子供まで殺すのは間違つてをると思ふに相違ない。

兎に角パウロは、ユダヤ人は、唯一の神エホバの寵兒であるから、ユダヤ人丈けで血統を禦り、他國人と關係してはならぬと教へ込まれた。其でパウロはユダヤ人の子供となら遊ぶが、ユダヤ人で無かつたら誰も嫌ひと思ふやうになつた。また外國人の拜してをる偶像は、憎むべきもの打毀して了ふべきものと習つた。例せば次の如き聖句を習つた。——

是は……汝等が世に生存ふる日の間
常に守り行ふべき法度と律法となり。
汝等が逐はらふ國々の民が其神に事へし處は、
山にある者も岡にある者も青樹の下にある者も、
みな之を盡く毀ち其壇を毀ち其柱を碎き、
其アシラ像を火にて燒きまた其神々の雕像を
切倒して之が名を其處より絶去るべし。

ユダヤ人が征服するカナンの土地で拜されてゐた偶像の宮は皆打毀さなければならぬと命ぜられたことをパウロは習つた。それからユダヤ人は神を拜する場所をどうするかと言ふことを教へられた。

汝らの神エホバが其名を置んとて汝らの支派の中より擇び給ふ處なるエホバの住居を汝等尋ね求めて其處にいたり、汝等の燔祭と犧牲……
汝等の牛羊の首出等を汝ら其處に携へ詣り、
其處にて汝らの神エホバの前に食をなし
又汝等と汝等の家族皆その手を勞して獲たる物をもて快樂を取るべし。

このやうに教へられて、小パウロは、神は唯一の神であること、ユダヤ人は神の民であること、故に凡の偶像が毀されねばならぬばかりでなく、偶像を拜して神を拜さぬ者も殺されねばならぬのだと熱心に信ずるに至つた。然し彼は成人して後、イエスの教へた美しい言を聞いてモーセよりも偉大なものが此世に現れたと思つた。イエスは、神は單にユダヤ人の神ではない、人類全體の神である。神は血を流すことを好まず正義と仁愛とを愛すると教へた。

九　異邦人嫌ひ

タルソ・五歳から十歳

毎木曜と安息日、小パウロは、母と一緒に會堂に行つた。其時は青、黄、綠の條のついた晴衣をきて

髪の濃い頭には何も被ず、たゞ四隅に房のついた小さな變な造の肩掛を羽織つて行つた。この祈肩掛が、ユダヤ人にとつて大切がられたのは我々には不思議であるが、兎に角ユダヤ人は其をかけなければ行かない方が可いと思つてゐた。其は一色の薄い布か、廣い棒縞のあるものであつた。拵へるには必ずユダヤ人の手を籍りた、ユダヤ人でなければ造り方を知つてゐなかつたのである。一番大切なのは其縫で、四角に、ヒヤシンス藍に染めた八本の毛絲で出來た總が付いてゐた。此色は神の御座の色としてゐたのである。此總は非常に神聖なものと考へられてゐた。かの癒を求めてイエスの後に來た婦が觸つたのは卽ち此總であつた。小年パウロは此祈の肩掛の用法や會堂で祈つてゐる時は正しく頭に被る方法などを學ばねばならなかつた。彼はまた大昔に、總のことについてモーセが規定した事を聖書に就て習はねばならなかつた。

モーセの敎に曰く「汝イスラエルの子孫に告げ、代々その衣服の裾に總をつけてその裾の總の上に青き紐をほどこすべしと之に命ぜよ。此總は汝らに、之を見てエホバの諸の誡命を記憶して其をおこなはしめ、汝らをしてその放縱にする自己の心と目の欲に從がふこと無らしむるための者なり。斯くして汝等吾がもろ〳〵の誡命を記憶して之を行ひ、汝らの神の前に聖くあるべし。」

パウロは、かゝる理由であるから此美しい奇麗な肩掛は大切にしなければならぬと敎へられた。母は、他の子供も爲て居る通り、パウロも、會堂で祈禱の唱へられてをる時、其青い總を取つて接吻し

なければならぬのだと敎へた。彼女は又、晴天の朝、小さな膚付きの祈の肩掛を着るときでも、會堂に行く爲に外に着る大きな方の祈の肩掛をはをる時も、必ず次の言を唱へるのを忘れてはならぬと敎へた。

世の王なる我等の神エホバは讃むべきかな
神はその律法を以て我等を完うし、總の律法を
我等に與へ給へり。

そして、小さな子供の考へることにしては餘り良いことではなかつたが、パウロは其美しい青い總のついた肩掛を着る度に、この肩掛を被ぬ異邦人の子供に比べたら、自分の方が、ずつと偉いのだと思つた。

パウロは、エルサレムや金の神殿が、世界ぢう一番立派な處であることを歌つた聖句を澤山學校で敎へられた。ユダヤ人たる者は、何處に住んで居ても祈る時には必ずエルサレムの神殿の方を向いて祈らねばならぬ、神殿の祭司達の爲に獻金を喜んで爲なければならぬとも敎はつた。先生は、再三再四、神は只一人である。その神はユダヤ人の神であつて、ユダヤ人は神の選民である。此神を信ぜずモーセの律法を持たず、たゞ木や石の偶像を拜してゐて、正義を敎えらるべき律法の書の無い異邦人は皆惡い人間だから、交際してはならぬと敎へた。元より少年パウロは、斯樣にして暗記させられる

ことが、一々解りはしなかつたが、直ぐに自分の民族を自慢して、他の國の人達を嫌ひ輕蔑するやうになつた。どうかして花園や、街や、市場などで、ギリシャ人、シリヤ人、キリキヤ人、クプロ人などの子供達と遊ぶやうな事が有つても、パウロはいつでも、この子供は、己よりは違つてゐる人だ、先生の言つた通り、皆な惡いのだと感つてゐた。然し其子供達も、パウロと變らず、愉快相に見え、同じやうに親切で愛らしかつた。自分と同し學校にも、會堂にも行かないけれども、ちつとも惡い子達だとは、先生さへ左樣敎へなかつたら、パウロは思はなかつたであらう。少年パウロが、惡い子供等だとは思はなかつた通り、後に此先生の知らない一人の人物が現れて、どこの子供でも、神の國の子供であるとパウロに敎へたのである。

然しパウロが少年の時には、毎日々々ユダヤ人は神の民である、外國人は皆惡いとばかり敎込まれた。恰度、今の土耳人が、基督敎徒さへ見れば、「耶蘇の犬」と言つて罵るやうなものであつた。我々は幸パウロよりは進んだ時代に生活してをる。各國民互に相尊敬し、神を拜む仕方は違つてゐても兎角云はない。若し偶像の前に頭を垂れる者が有つても、彼等を殺さうなどとは思はず、却て後年パウロが行つたやうに、彼等を導いて、全人類の父なる眞の唯一の神に向はせるやう努めるのである。

十　モーセの五卷

タルソ・五歲から十歲

パウロの學校は、「葡萄園」と言ふ美しい名が付いてゐた。子供は若い葡萄蔓のやうなもので、匍ひ上り、葉をつけ、實を結ぶべく敎へられなくてはならぬと云ふ處からつけられたものである。始は床に座つて、先生の言ふ通りを反覆し、遂に各章を間違無しに暗誦の出來るまで習ふのであつたが、追々には、本について讀むこと、書くこと、算術なども敎はることになつた。兩親は、宅ではヘブル語外ではギリシャ語を話した。そこでパウロは、兩國語共讀書を學ばねばならなかつた。

今日のやうに、書方の紙や繪入の本があつて、イロハを習つたのではない。海岸の沙で子供がやるやうに、砂の上に字を書いては抹し書いては抹ししたものである。文字が一通り解つてから、先生は生徒に石板位な大さの板と白墨とを呉れる。小パウロは他の子供等と一緒に組足をかいて、黑板に先生の書く字を皆な其板に寫すのであつた。尤も黑板は今の小學校などのと變りはないが、其に書かれることは、聖書の章句ばかりで、他に何もなかつた。而してパウロは、先生に敎へられた通り何もかも、そのまゝ讀み、そのまゝ暗誦しながら書いたのである。彼は恰悧ではあつたが、ヘブルとギリシャ語とを共に書くやうになるには容易でなかつた。パウロには一生、ギリシャ語を上手に書くやうにはなれなかつた。然し時が經つに隨つて、先生がモーセの律法から其日の日課を選んで黑板に書く丈けのものは讀めるやうになつた。ユダヤ人はあまり歌は好かなかつたので、學校でも唱歌は無かつた。

圖畫は嫌ひで、土で人間や動物の形を拵へたり、木を彫つてそんな物を表はすのさへ偶像を造るのだ惡いことだと云つた程だから、圖畫も習はなかつた。ユダヤ人は立派な神殿は愛し敬つたが、其中に像を置いたり畫をかいたりすることを許さなかつた。

さてパウロが八歳になると、充分讀むことが出來る。さうすると日課は一層六ケ敷くなる。父親は御座敷に箱入にして大切に置いてあるモーセの五卷の大きな褐色の卷物を恭しく開いて、パウロに其を讀ませるのである。お父さんから、なつかしいヘブル語の卷物を、高聲に讀んで見よと言はれた時、パウロは必つとうれしかつたであらう。況して、此子は他日偉い教師になるであらう、會堂の學校長位ではない、エルサレムに居る偉い教法師達の仲間入をする程になるであらうと心密に信じてゐた母親は、一層うれしく思つたことであらう。

十歳に達する頃には、もうモーセの五卷を憶えて、アブラハム、イサク、ヤコブ等の如き、牧羊者をした祖先の物語や、立法者モーセに導かれてユダヤ人がエジプトを出た歴史や、曠野で人々が小さな金の犢を造つて柱の上に載せ、其を拜んだり其周圍を踊り廻つた爲に、罰を受けた事などを悉皆話すことが出來たであらう。また彼は、神を禮拜する處として造られた大きな天幕、集會の幕屋と言ふが有つて、其はモーセの指圖の下に、紫の強い布や眞紅に染められた獸皮で作られ、其中は美麗な緞帳で區切られてゐて、幕屋の上には雲が降り掛つて來たことなども云へたであらう、

斯樣にして少年パウロは、自國民の歴史と宗教とを一緒に學んだ。モーセの五卷を初から終まで暗誦するなんと云ふことは勿論能きないが、大切な個處だけは。何處を問はれても答へが出來ねばならなかつた。大教法師達の說では、パウロ位の年になつた者は、よく出來る子供なら、既う次のカナン征服の記錄の方に進むべき筈であつた。そこでパウロは喜んでずん〳〵先に進み、諸王や戰爭や冒險に關する物語を讀み、戰爭の話よりは、よつぽど爲になる神や愛や溫柔の敎を學ぶことを許可されたのであつた。溫柔で愛に富むは卽ち神の旨を行ふことであるが、殘忍で人を殺すのは神の旨に叛ふことである。

一一　白眼船

タルソ・五歳から十歳

少年パウロは、朝から晩まで床の上に座つて、聖句を學んだり、石板に物を書いたりしてゐて、外に何も爲なかつたと思つては間違である。學校は早朝始つて、今の小學校の初めの時間迄に、既う終つたのである。稍成長して家業を習ふ時が來るまでは、其殘の時間は自由に遊友達と一緒に跳ね廻つて可いのであつた。他の子供と同じ樣に、パウロも仲々學校から直ぐ家には歸らなかつた。途中には彼の鋭い目につく物が澤山有つた。

タルソ市のギリシャ少年達は、遊戯競走にかけては有名であつた。河に近い處に立派な大遊技場が有つて、游泳、高飛、角力、競走を習ひ、球を以て遊ぶ種々の遊戯をやることが出來たのである。パウロは其處に入ることは許されてなかつたが、其代りユダヤ人の子供達と連立つて、河の淺い入江に行き、着物を脱棄て、水に飛込むで、烈日の下に、バチャ〳〵やつては、いつとなく游泳を覺えた。河岸の緣い叢林に小鳥が巣くふ頃だと、パウロは其を探し歩いて、中の卵子を數へ、其處に大きな石を建て、目標にした事も有つたであらう。果實熟する頃には、野や畑に行つて、赤い林檎、紅の櫻桃、黄金色の柑、蒼白い香櫞、レモン、棗椰子などが枝から落ちるのを拾つたことであらう。蜂蜜を採る時期には、遠くに立つて、樹技で蜂を防ぎながら、蜜の點滴る巣を取出す人達を眺め、甘露の流下る一片を貰つて、大喜で頬張つたこともあらう。

然し一等嬉しいのは、葡萄收獲の時であつた。晩秋の日盛に、父親と共に葡萄焙に行つて、紫の房が無數に剪取られ、籃の中に山盛にされるのを見てをると、軈て兩手に一杯貰へたのである。其頃葡萄は野生したので、誰でも取つて來て褐色パンに添えて食べたのである。

學校から直ぐ自宅には歸らないで、パウロは、河の兩岸にある埠頭に走つて行つた。其處には海を越えて外國からやつて來た船舶が列んでゐた。パウロは、魔除けの爲に附けられた船首の破浪神像を不思議相に眺めたことであらう。また或船には、船首に大きな白い眼球が畫いてあるのを見て、何の

爲だらうと不審がつたことであらう。港にはエヂプトから遙々航海して來た銅錢のやうな赦黑い顔をした水夫達や、亞弗利加から來た黑奴や、クリート、クプロ、ローズ等の島々或は遠く伊太利、希臘シリヤ、バレスチナ等から來た赤や藍の頭巾を被て節面白く歌唱うてゐる人々も居つた。パウロは此樣な人達を見て、タルソも大きな市だが、あの輝く海の對岸にも種々な國や市が有るのだと思つたに違ひない。

パウロは又た、材木の筏が、其上に乘つてをる人の竿や綱で舵取られながら、市の上の方から流れて來る有樣や商品の梱が、船艙から投出される處や、一團の人夫達が、手拍子取り大聲擧げてをる男に調子を合せて、大理石材を埠頭へ曳上げる光景を見たであらう。さうかと思ふと、穀類の袋、獸皮の把、粗い布、毛皮、羊毛、柔皮、さては黑い革袋や赤い土燒の瓶に入れられた油、酒などを背負はされた驢、騾馬、駒が、幾筋にも列んで、重荷が下され船へ積込まれるのを待つてゐた。

軈て船が荷物で一杯になると、水先案内者と船長が大聲に出帆の命令を下す、水夫達は勇ましく、綱をたぐり竿で船を岸から突放す、擢が幾本も水中に突入れられる、舵手は船尾の小屋の上に立つて、二本の大舵を押したり引いたりしながら下で擢を漕いで居る水夫達に號令する、と船は見る〳〵中流に出る、する〳〵綱音がして上を赤く染めた大帆が水夫達の歌聲叫び聲と一所に、檣高く昂げられる忽ち帆は風を胎んで、バタ〳〵と生物の如に動き出すのであつた。

何樣な子供でも港に遊んで、外國船を眺め、奇態な叫聲、見馴れぬ顏、道化た人々の異樣な服裝を見ては、不思議がつたり面白がつたり、白帆の翼を伸べて、其處に來たり往つたりする船舶の國々が海の向ふに有ることを知つては驚きもし心惹かれもするのである。少年バウロは、海上生活の勇ましく暢氣な事を感じ、其早い耳と鋭い眼とを働かして、船の事や水夫達の仕事を確手覺えて置いたに相違ない。思ふに、其れが彼自ら航海した時に役立つたものであらう。

一二　クレオパトラの金の舟

タルソ・五歳から十歳

バウロはシドナス河を溯つた不思議な船の事を聞いたに違ひない。羅馬の大將軍マーク・アントニーの命令でエジプトの美しい女王クレオパトラがタルソに乘つて來た其船を見た老水夫達が未だ澤山生きて居つた筈である。其日には河の兩岸は美貌と豪奢とで名高い女王を一目でも見たいと犇めき合つて居る群衆で一杯で有つた。クレオパトラの來た日は好い天氣で空は碧く水は輝いてゐた。人々の眼に第一映つたのは微風にゆらぐ紅、藍、白、黃、樣々の色に染められたリボン美しく垂れた高い檣と尖細の帆桁に白い綱で張られた紫絹の大きな帆とであつた。水の上に高く突出た金光眩き船首の上には、青綠、黃金、薔薇、濃藍、種々の衣を纏ふた少女達が可憐な海の乙女の如く立ち、他に一群の

娘達は香焚く煙を雲の如く上げて美しい薫を岸に送つてゐた。船が漸次市に近いて來ると、兩舷に列ぶ廣い撓は銀を以て被はれたもので、竪琴や笛の音に調子を合せて水上に出沒する毎に、閃々と耀いてゐた。高い船尾は窓の附いた家の形に造られ全體金を以て被はれてゐた其上には金の刺繡と緣とで飾られた薔薇色の天蓋か張られて在つた。柔かな椅褥を敷いた臥榻に美しいエヂプトの女王が四方から容易に見られる樣に閃めく寶玉に全身を飾り立てゝ横はつてゐた。其側には、少年達が戀使の如く輝く衣を着雪の如く白い翼をつけて立ち列び、孔雀の羽毛で拵へた虹團扇で女王を煽いでゐたのであつた。

此色淺黑い女王は、愛の女神ヴィナスのやうに、あらゆる美しい物に取卷かれて、此羅馬の勇士の心を惑はすべくタルソに來たのである。女王は唇を紅で染め、眉墨をひき、蕃紅花で手指の先を黃色に染めてゐた。今から見れば左程の人でもなかつたやうであるが、然し少年バウロは、クレオパトラの金光燦爛たる屋形船は、七色の飾紐に飾られて、往古からタルソに入つて來た船のうち一等立派なものであつたと聞いたのである。

忙しい港に加へて、今一つ、眼を光らせて居る子供達に大相面白い場所が有つた。其は廣い市場で、タルソ市近在の商賣は大低其處で行はれたのである。山家の牧畜業者達は、長い毛の羊、黑や白の山羊、馬、驢馬、駱駝、牛、豚等を連れて來て、此處で市を開いた。其方形の廣場の周圍に、市の商店

は大低集つてゐた。尤も商店と云つたところで、商品を澤山積んだ石の建物などが有るのでは無く、單だ、假小屋に持運の出來る臺や卓子が有つて、其上に、日除けの爲に黑、褐色、赤、黃などの厚い天幕樣の日覆がしてある丈けであつた。

其處には皮草鞋や上靴を造る人達が、赤、黃、褐色、樣々の皮革を垂下げた小屋の中に居る。內の男は床に趺をかいて、鋭利な刄物で獸皮を剪り、其を縫合せてをる。馬具屋も有る。織物屋もある。織物屋はカタ〳〵音のする織機を据えて、絲や天井から垂下げた棒を澤山列べて、絨氈、毛氈、或は赤、青綠色等の美しい肩掛を織つてをる。彼が織機の絲と棒とを動かし、梭を右から左、左から右と投げては受けてをると織物は見る〳〵出來ていつた。タルソには澤山織物屋が有つて、婦人用の肩巾にする黃や薔薇色の絹布、男子服地の厚い毛織物、少女用の白い亞麻布、羊飼の天幕や舟の帆にする山羊毛の强い毛布などを織つたのである。

此方を見ると露臺の蔭に、洋盃や皿の積まれた中に、陶器師が座つてゐて、鉢や瓶を、小さな泥だらけの車にかけて拵へてをる。其車を糸で廻してをるのは少年である。其方法は今と餘り變らなかつた。此他、香水商人、理髮師、菓子屋、パン屋、家具師、鍛冶屋、刀劍師等が有つたか、皆話してるたら極限が無い。

それから一つ悲しい哀れな光景も見られた。其は奴隷賣買で、パウロは、大低は黑いが、仲には殆

んど白人と變らない少年、少女が、人中に立つて賣られてをるのを見た。然し當時パウロは其を氣の毒と思つて見なかつた。パウロは或人々は自由、或人々は奴隷として金錢で賣買せられても可い、そして主人の命令に從はない時には鞭たれて可いのだと敎へられてゐたのであつた。勿論讀者には其不法である事は解つてをる、パウロも成人して後、奴隷問題に就ても己の意見を變へたのである。彼の心を變へさせたのはイエスであつた。

一三　樂しき安息日

タルソ・五歲から十歲

毎金曜日は、小さな會堂學校の休日であつた。其日は父も早く仕事を止めるのでパウロは本統に嬉しかつた。毎週の安息日は、其日の日沒から翌土曜日の日沒までゝあつて、其間は父も仕事を休んだのである。今日の日曜日は土曜日の夜半から始まる。さうして其日にイエスが墓から甦り給うたと云ふので、其以來、週の第一日とし基督敎會の安息日と定められたのである。然しパウロが少年であつた當時は、イエスは未だナザレの青年であつたので、安息日が變更つてゐなかつたのである。

パウロの父が、金曜日の晩、家に入つて見ると、家の中は綺麗に掃除が行屆いて、妻や子供等は晴衣に着更へタ餉は出來て白い卓子布の上に列べられてある。樂しい安息日の燈火は、新しい花、赤い

葡萄酒、出來立てのパンの上に軟な光を投げてゐる。彼は家に入りかけに、かの戸口の柱につるされた輝く小箱に手を觸れて其觸つた指に接吻し、「エホバは今よりとこしへにいたるまで汝のいづるると入るとをまもり給はん」と云ふのであつた。そして彼は妻や子供等に接吻し、パウロの頭に手を措いて「神、汝をエフライム、マナセの如くならしめ給はんことを」と云ひ、妹の頭に手をおいては「神、汝をサラ、リベカの如くならしめ給はんことを」と祈つたのである。

それから父は仕事服を脱棄て、手足を洗つて、嬉しい御祭に着るやうな晴衣に着更へた。紫の山の彼方に太陽の光が消え、深い蒼空に銀の如き宵の明星が現れると、安息日が始まるのである、其時各會堂に喇叭の音起り、エルサレムの金の神殿の屋根からは銀の喇叭朗々と響き亘るのであつた。部屋の戸は閉される。皆卓を圍んで座る前に、父は、家族の上に神の祝福を祈り、子供の捧持する水盤で兩手を洗つて、赤い葡萄酒と水を一の洋盃に注ぐ、皆立つたまゝ其を順次飲む。其間に父は神、葡萄樹、それから樂しい安息日に就て簡單な敎をする。そしてパンを裂いて、小片を一つ〳〵鹽水に浸して各自に與へる。そこで皆席に着いて、一週間中の一等喜しい食事を始め、魚、スープ、パン、牛乳、果物、葡萄酒等の馳走に預るのであつた。

安息日の晩餐が了ると、パウロの父は、常の感謝の言を云ひ、一同其に和する。それから、神が安息日を休息の日と定め給うたこと、其日には火をつけること料理することでも仕てはならぬこと等の

規定してある聖句を讀む。父は、此規則は、敎法師達によつて一層嚴格にされたものであると言ふことも說明して聞かせるのであつた。父は、また、永遠忘れてならないユダヤ人のエジプトから救出された話を反覆し、パウロに問題を出すと、パウロは得意になつて其に答へた。父は、確に左樣と信じてゐたので、嚴な態度で、安息日に働く者は死刑に逢ふに定つてゐる。昔、或人が薪を拾つてゐるのを見附つて、モーセは彼を、黑い天幕露營地の外に引出して、石で打殺させたものだと云ふやうな話しをして聞かせたに相違ない。

朝が來て見ると、ユダヤ人の街では、孰の家からも煙突の煙が吹いてゐない。安息日には、たとへ一哩でも步いてはならなかつたので、皆大低室內で一日を過したが其でも愉快な日で、隣近所互に招んだり招ばれたりしたのである。タルソ市の人々は安息日を守らない、そしてユダヤ人が安息日を嚴守するのを愚弄した。然しユダヤ人等は飽迄忠實に此日を守つて、自分達の街の兩端に繩張りをして彌次馬の入つて來るのを防いだ。

斯樣にしてパウロは早くから、安息日には散策の杖一本携へるのも惡いのだと敎へられた。然し此んな小さな安息日の規則を拵らへた敎法師達自らは、其を守らずに居ることは知らなかつた。イエスは、我々に、安息日を如何したら正しく守ることになるかを敎へ給うたのである。けれども彼はパウロの父が非常に大切に思つた此等の小さな安息日の規則を破つた爲に、種々惡い名を負はされ給うた

のであつた。

一四　會堂の燈明

タルソ・五歳から十歳

ユダヤ人の會堂は今日の教會の原型となつたものである。少年パウロが、母親や姉妹達と安息日の集會に出席したのは、林の眞中に建つ白大理石の堂々たる神殿ではなく、街の一隅に建てられた小さな圓い建物で、其入口の上には、會堂の表號である蔓草、一圍の花、又は枝のさいた燈臺が、石に彫付けてあつた。彼等は街を通つて行く間、右も左も側見を爲ない。遂に會堂の小さな戸口を入つて往くと、日光の中から遽に入つたのであるから、堂内は眞暗に見えるのであつた。

婦人席の格子戸から透かして見ると、高い眞鍮の七枝の燈臺、紫、赤、藍、金の色に染められて立派な緞帳、其處に垂された常夜燈、其後にある聖書の大きな卷物の納めてある箱などがパウロの眼に映つた。父が來ると、彼は履物を脱いで、經牌を腕と前額に結付け、靜に進んで、重立つた人々の座つてゐる美しい緞帳の前に坐を占める。中央には小高い講壇と机とが有る。其前に男の人達は床の上に趺をかいて、頭に藍い祈の肩掛を引被つてゐる者もある。そして皆エルサレムの方角、燈明に面して坐つてゐるのであつた。

戸が閉されると一人が皆の知つてゐる聖書の美しい祈禱文を唱へる。さうすると一同起上つて其を聽く、讀まれた句は次の如なものである。

世界の王なる主を讃めたゝへよ。
主は光と暗とを造り、
平和を作り、凡の物を創造り給へり。
主は慈愛もて地に光を與へ給へり。
主は、その善をもて、日々夜々に、
創造の働を新になし給ふなり。

パウロも皆と一緒に薄暗い堂内に頭を垂れながら、「アーメン」と言ふのであつた。祈の句は更に續く。

我等の神よ、汝は大なる愛をもて我等を愛し給へり。
我等の父また王よ、汝は大なる憐みを以て我等を
憐み給へり。
我等を慈しみ、我等を教へ給へ。我等の眼を開きて
汝の律法を知らしめたまへ。

我等をして心一つに汝を愛し汝を畏れしめ給へ。

讀者が机に進み出て、聖書のよく知られた個所を朗讀すると、一同座つて頭を垂れたまゝ異口同音に唱和する。其は子供にまで云へる馴染の句である。

イスラエルよ聽け、我等の神エホバは
唯一人のエホバなり。

暫く讀續けてから、讀者は机を離れて、美しい緞帳の前に立ち、更に他の祈禱文を讀む。

我等の父祖の神は讀むべきかな。
彼は惠み深き約束を覺えて、
我等の子等に救主を來らせ給ふ。

彼が四度中絶すると、會衆一同が「アーメン」と云ふ。

若し丁度祭司が居合せると、彼は前に出て來て、兩手を高く差上げて指頭を合せ、名高い聖句を以て人々を祝福する。

願くばエホバ汝を惠み汝を守りたまへ。
願くばエホバその面をもて汝を照し、
……汝に平安を賜へ。

式は未だ終らない。讀者はやがて美しい緞帳の中に入つて、軸に卷いた大きな卷物を取出して來る。さうして机の處に來て高聲に、恰も歌を唱ふかのやうに、ヘブル語で數節を讀上げる。さうすると通譯者が居て、一同の解るやうに其をギリシャ語に譯する。こんな風にしてモーセの律法が讀まれたのである。

パウロが見てをると、次に今一の大きな卷物が披げられて、「預言書」の一部が讀上げられる。律法と預言書とは別々の卷物になつてゐて、毎安息日に其一部宛を讀み、一年の内には全體を讀了るやうにしたものである。

一同座ると、水を打つたやうに靜まる。會堂には牧師のやうな者は定めて無いので、誰か話すのを待つてをるのである。誰でも自由に感話をして可かつたのである。パウロも見てをると、軈て一人の男が立つて、講壇に上り趺をかいて、今讀まれた聖句に就て靜な調子で感話を述べる。其が若し學問のある教師であると、聖句から、昔からの教法師達が種々工夫して拵へた規則づくめの演說をやる。聽衆の中からは例の如く叫聲も起る。嘆聲も發せられる。而して話が終ると、話した人に向つて質問の出ることが屢有つた。今日の說教の後には、そんな事は行はれてゐないが、可い事であつた。歌を唱ふことは祭日の外は爲られなかつた。故に質問が了ると、簡單な祝禱が有つて、一同開散して靜に家路についたのである。

安息日は斯樣にして過ぎて行つた。バウロの父は規則を嚴重に守つて、外を歩くことも爲ず、終日在宅して、妻子と共に、休息の日、悅の日、神に近付く日として樂しく其日を過した。

而して太陽が漸次西山に傾いて、山陰が野や葡萄畑の上に刻々長くなると、バウロの父は家族の者を自分の周圍に召集める。遂に太陽が見えなくなつて、宵の明星が輝き出すと、彼は逝く日を送つて、祝禱を述べる。其を合圖に、安息日は終を告げ、新しい週の家事や、忙しい家業が始められるのであつた。

一五　六ケ敷い儀式

タルソ・五歳から十歳

讀、書、算術、聖書の章句を暗誦することなど、幼少なバウロには隨分六ケ敷かつた。然し教師は親切であつた。ユダヤ人は子供を可愛がつた。我々は、嬰兒、子供、青年と云ふやうに僅三つ位に區別してをるが、ユダヤ人は九つに分けてゐた。乳兒、斷乳兒、食初兒、强兒、熟兒と言つたやうな調子である。凡て教師は、自分の子が有つて子供に親切な者で、子供の取扱を辨へた者でなければならぬ上に、會堂の長老達の監督を受けてゐた。長老達は、教師が兒童を無暗に長く學校に留らせることを許さなかつた。子供等は直ぐ疲れ、殊に暑い天氣の日には直に不機嫌つてくる事に注意してゐた。

教師は生徒を口で譴つても可いが、革の鞭で打つ位より以上に非道く罰することはならぬことになつてゐた。

バウロは學校に入つてから十歳になるまでに、モーセの五卷を學ばなければならなかつた。其間四年はあるけれども、創世記丈けでも長いのは一章が六十節もあるやうな五十章から成つて居るのだから仲々であつた。五卷全體では百八十七章、六千五百七十節ある。おまけに、宗教上の教ばかりではない。歷史、旅行記、其他雜多のことが其中に教へてある。のである預言者の各書によつて、バウロは、バレスチナが敵に征服せられて、ユダヤ人達が外國の都市に捕虜になつたり、諸邦に流浪の身となつたりした事、何時かは故國に皆な歸つて集ることが出來るのだと云ふ事を教へられた。然し是は十歳以前には未だ習はなかつた。

バウロは、聖書によつて、金の神殿に居る祭司達は、モーセの計畫に隨つて、衣裝の型や色合に至るまで、色々な儀式を守らなければならぬことを學んだ、それからユダヤ人の毎日從つて行かなければならぬ律法を讀み、其を破れば罰に逢ふことも覺えた。偶像を拜むとか、神に反いた言を發するとか安息日の規定を破つた罰には、刀で殺されるか、槍で刺されるか、石で打殺されるのだと知つて怖しく思つた。今日では此等の規定は行はれてない。けれども少年バウロの時代には、斯樣な律法は正しくないと言つて批難するのは、最惡いことであると教へられて其を信じてゐたのである。

九歳や十歳の子供が、モーセの五卷などを讀んでも、今の子供に比較て、大して多く了解の出來た譯は無いであらうが、然し、彼等は先生によく質問するやうに敎へられたものである。是は勉强に興味を起させ、先生の敎に就て熟考する癖をつけるに良い方法であつた。今日の學校や敎會でも此樣な習慣が有つたならば、子供達は隨分奇妙な質問を出すことであらう。子供に判らない種々なことが云はれてゐるから、子供達の方では問ふて見たく思つてゐる事が澤山あるであらう。若し少年パウロが白髮交りの先生が答の出來ないやうな問を出すと、會堂學校の床に趺をかいてゐる子供達は、さぞ面白がつたことであらう。パウロは非常に才智に長けた少年であつたから、モーセの律法の中にある奇態な事柄に就て、質問を發するやうな事は屢有つたであらう。然し、先生の言ふことは、どんなに奇態に、有りさうもなく思はれることでも皆、信じなければならぬと云ふ不愉快な規則が有つた。

パウロは、自分が學校で習つて來る律法や規則を、宅の父親が、非常な注意を以て實行し、食前食後の手を洗ふ事にまで、特別な注意を拂つてゐるのを見た。父は非常に嚴格なパリサイ人であつた。會堂の集會は安息日に二度有つた他に、月曜日と木曜日にも有つたが、父は其を一も缺かさず出席し少年パウロも父に隨いて行つたのである。

一六　羅馬の兵隊

タルソ・五歳から十歳

タルソではギリシャ語を使つてはゐたが、パウロの生れるよりずつと前に征服されて羅馬の一都市となつてゐた。市民は主としてキリキャ人であつたが、シリヤ人、イタリヤ人、ギリシャ人、ユダヤ人等も居た。ユダヤ人は全人口から見れば極く僅で、家や會堂で見えざる神を拜んでゐる彼等の心の解らない他の人々は、彼等を好まず、また市の諸神宮に詣でずギリシャの諸神の大祭にも加はらないのを輕蔑した。

ユダヤ人の兵隊は無かつたが、少年パウロは屢、羅馬の兵隊が城から地方に出て行く途中、街を進軍して往くのを見た。歩兵は、雜多な色の粗末な膝まで垂れる上衣をつけ、裸足に頑丈な靴を穿ち、更に革の短上衣を着け、胸と背には眞鍮の甲冑を輝して、靴音高く隊を組んでやつて來るのであつた。彼等の脚、屢腕にも、眞鍮の膝當、臂鎧を紐で結付け、頭には、晃く眞鍮の板を張つた革の兜を頂き其には時に白又は黑の馬の鬣で峯をつけて威風を添えてゐた。彼等の腰には、恐しい青銅の短劍を垂し、左手には長い青銅の尖の付いた槍を握り、背には、牡牛の皮で作り、眞鍮の鋲を打ち、內側に兵士の名前と番號を書付けた重い楯を打掛けてゐた。是れこそ、遠い羅馬の市に居る彼等の主君の爲に戰ふ怖しい兵士共であつた。何でも鬪ふのが彼等の商賣で、誰と戰はうが、何の爲に、如何なる理由で戰はうが、ちつとも構はなかつたのである、

騎兵は、身輕で活潑で、布の褥鞍一枚置いたばかりで、鐙も無しに、駿馬に跨つてゐた。彼等は槍を片手に一跳して馬の背に飛上ることが出來たのである。其は何の不思議も無いことで、彼等は子供の時から騎兵たるべく養育せられ、死ぬるまで騎兵で生活す連中であつた。彼等兵隊の心を勵すべき音樂は無かつたが、たゞ正に戰に進まんとする時には、前方に、長い眞直ぐな青銅の喇叭を携つた一列の兵士が進んで、一時に怖しい音を立てゝ殺戮の合圖としたのである。軍旗の代に、一隊の兵士は綠又は赤の小旗を持つてゐた。其には蛇が刺繍してあつて金滅金をした棒の先の横木に付けてあつた。中には、隊伍の番號丈け記してあるのもあつた。或兵士達は、棒の先に、旗でなくつて金滅金した玉皇帝の小さな像、又は翼を擴げた小さな鷲を付けてゐた。棒の下の端は尖細になつた眞鍮を付け、戰ふ時には槍の代用にし、行軍の途中休息する時には、地に突立てゝ、各組の場所の目標としたものである。

パウロは此羅馬兵を憎むやうに敎へられた。父は毎日救主が早く現れて、羅馬軍の束縛からユダヤの國を自由にし給ふやうに祈つてゐた。然し後年に至つて、パウロは羅馬の兵士を好くやうになつた。羅馬兵はパウロを助けたこともあり、或兵士は、非常に親切にして呉れたのであつた。

タルソの市の大祭の時には、偶像の神殿神苑から行列が出た。白い着物をきた男女の祭官數百名、花と飾紐に埋つて、市中を練り歩き、踊り、歌ひ、また各神殿で飲み、喰ひ、騒いだ。けれども少年

パウロは其を見るのを許されてなかつたであらう。祭官達は、此の祭は偶像を崇めんとするのだと云つてゐたが其遣方は、祀られてをる偶像よりも穢らはしいものであつた。太陽神アポロの祭もあれば競技の神ヘルメスの祭もあり、八百年許前にタルソを創設したと言はれてゐたアッスリヤの大酒王サルダナパラスの祭も有つた。

又ある時は二千年も前に、其國最初の女王となつたと云はれてゐたセミラミスの祭をして騒いだ。是は、ユダヤ人の憎んだ所謂アシタロテ女神・卽ちヴィナスと混交にして祀られたものである。此祭の行列は、女が大部分であつたが、一等卑穢なものであつた。彼等はまた羅馬皇帝アウガスタスの誕生日を祝つた。此等の禮祭は、偶像敎的であつたので、ユダヤ人は之を嫌ひ、少しも其中に加らず、子供達に見せないやうにして、木や石の偶像を祀るのは甚だ惡いことだと敎込んだのである。

一七　會堂の祭儀

タルソ・五歲から十歲

ユダヤの祭は、タルソでよりも、勿論、かの金の神殿で遙に立派に執行された。然し會堂は各、一小神殿とも見るべきものであるから、外國に居るユダヤ人等も、出來る丈けの事をして祭儀を守らなければならぬとエルサレムの敎法師達は敎へたのである。プリム祭が來ると、子供達は意氣揚々と燈

明に輝く會堂へと集つたのである。其は春、花の咲揃ふ頃、女王エステルの紀念に行はれたのである。朗讀者はエステル書全體を讀んだ。憎いハマンの名の所に來る毎に、子供達は叫び囂いだ。成人達は足を踏鳴らして、往古にペルシャでユダヤ人を殺さうと企てた惡い總理大臣の憎くて堪らないことを表はした。反之エステルの名が出ると、此處にも彼處にも、女王を祝福する低聲が起つた。式が終ると、誰か親切な人が子供等に菓子を遣つて散會させた。此古い祭は、今日でもユダヤ人の子供達は守つてゐる。

冬の十二月が來て、山の方から雪持つ雲が市の空にやつて來て家々の戸口に白い物を敷く頃になると、ユダヤ・マカビアス及彼が三年間閉ぢられてゐたエルサレム神殿の戸を開いた日を紀念する祭が行はれた。其日には子供達は輝かしい棕梠の綠葉の枝を持つて、堂内一面に燈明の光晃々たる小會堂に集るのであつた。各自の家々にも内外に燈籠を垂し、最初の夕、各人の爲に一個宛の蠟燭を點火け一晩毎に殖していつて、祭の終には、家の者一人々々に八個宛の蠟燭がつけられた。斯樣にして日の重るに隨つて喜悅も亦增加はることを示したのである。

バウロは又、六月の太陽の盛な月に、初穗の祭の來るのが樂みであつた。其時にも友達と一緒に會堂に行つた。此度は皆な頸に赤や青の花を飾り、手には綠の花環を携へて行つた。會堂に入つて見ると、かの立派な緞帳と常夜燈の前には、あらゆる種類の果實、穀物が、澤山に小さな白い柳籠に一杯

盛つて列べられてある。其は果物や穀物の初穗の上等を、神に献げたのであつた。

新月の樂しい祭も毎月有つた。バウロは番人が、碧空に白い月の細い端が見えるのを一生懸命見張つてゐて、見附けるや否や其報告に會堂へ驅けてゆくことを知つてゐた。バウロと同じ町内の人達も戸口に立つて同じ銀の弓が見えてくるのを待つてゐた。バウロが眞先に見附けると、父は喜んで、新月を仰ぎながら嚴な聲で言つた。

「オヽ神よ。汝は讃むべきかな。汝は蒼空と星とを造り給へり。彼等は喜び喜びて造物主の旨を行ふなり。オヽ神よ汝は讃むべきかな、汝は月を新になし給ふなり。」

其日には學校も休日で、友達を馳走に招いた。ユダヤ人に限らず、ギリシャ人等も、夕の空に輝く眉の如き新月を喜び迎へたので、タルソ全體喜ばしい夜を送るのであつた。毎月の月の祭に加へて、年の最初の新月は、喇叭や角笛を吹き立てゝ迎へた。其時は又格別の喜や馳走が有つたので、喇叭の祭とも呼ばれたのである。

今日の我々は滿月の方を喜ぶ。滿月の時は地は限なく照され、海の波の上に印する銀の足跡が美しいからである。

一八　競技場

タルソ・五歳から十歳

タルソには大きな戸外劇場が有つた。バウロは其處に行くことは有つても、其は幾千の觀客が亢奮して芝居を見てゐる時ではなくつて、空の時であつた。劇場は傾斜した坂地の廣い庭に有つて、座席は石で、段々上に廣い半圓形を畫いて作られてゐた。こゝに市の富者も貧者も朝早くから群集して、半日もかゝるギリシャ劇を見物した。笛、竪琴、立笛等の鳴物が入り歌も唱はれた。幕間には辯當を開くのであつた。殊に教育ある人々は觀劇を好み、新鮮な詩句や爽快な音樂を聽くのを樂しんだのである。然しユダヤ人等は其を好まなかつた。バウロの父は、其樣な物はパリサイ人の息子には適當でないと思つてゐた。

海から一等遠い市の一端に設けられた徒步競走場に就てもバウロは色々な事を聞いたであらう。ギリシャや羅馬の人達は非常な競走好きで、大競走に勝つた青年は、偉い善い事でも爲たやうに賞讃せられ、彼の銅像が建てられると云ふ勢であつた。競走場は劇場に似て宏大な廣場に設けられてあつたが、形は長細くなつてゐて、若者達は一方の端まで走つてまた後戻りして來るのであつた。兩側に觀覽席が段々に出來てゐて、長の年月賞與を得べく練習を積んだ青年達の競走を見に、數千の人々が其

處に集つたのである、バウロは此をも見ることは出來なかつたかも知れぬが、練習して居る處位は見たであらう。そして晴の競走が終つた後で、誰が選手競走に勝つたか聞いたであらう。其時には市中の人が、最負々々の競走者の色章をつけて、其話で持切つてゐたのである。

然しタルソ市を最有名にしたのは、競技場であつた。其はジムナジアムと云つて、今でも英語等では青年男女の運動場に同じ語を傳用ひてゐるのである。此競技場は市の東の郊外に在る丘の傾斜面に建てられ、今では到底想像も及ばない程の大きな立派なものであつた。我々は子供達を善い賢い人になるやうに教へるのが第一のこと最善いことであると思つてゐるが、バウロ時代のギリシャ人は、さうは思はなかつた。彼等は第一に子供を强健に、秀美になるやう訓練爲なければならぬと考へた。十六から十八までの男兒は、强い人にする爲に、體操ばかりを教へられた。美しい體になることを、善い人になるよりも餘計に考へてゐた。けれども全然、跳ねたり、角力したり、走つたりする許りでも無かつた。と云ふのは此處に毎日集つて來るのは子供や青年丈けではなく、市の學者達も來て、學問の話をしたのである。

其處には冷溫兩浴場が有つて、子供達は皆、游泳術を教へられて入浴することを奬勵せられた。浴後は必ず、橄欖油を以て體を克く摩擦し、皮膚を柔軟にした。競技の時には裸であつたので皮膚を美しくして置く必要が有つたのである。晴天には戸外の運動場に出で、雨天には大きな屋根のある場所

に入つて、教師達から、歩行法、競走法、高跳、舞踊、歌、球を用ゐる種々の遊技などを習つたのである。

バウロは油で鮮麗してをる少青年達が、大きな獨樂を廻したり、蹴球で彼處此處に駈けめぐつたり力一杯綱引をしてをるのを見たであらう。投球、投輪、弓術もあつた。或歳頃になると、種々の學課を含んだ初歩教育も受けたが、其に就ては後に記さう。一人の長官が有つて、紫の職服に白い靴を穿いて、多くの部下を從へて競技場を巡邏した。一つには若者達が、立派に競技して、紛爭を起したり怒つたりすることの無いやうに監督する爲であつたが、其は實に可い規則であつた。

終日嬉々たる少青年の聲で鳴響つてゐる此競技場は、彫刻された柱、彫物浮ける壁、美しく樂しい場所であつた。さうして、廐間、浴場、廊下、花園、庭内の森の別なく何處にも彼處にも、一名高い人物や褒美を貰つた美しい青年達の白大理石或は有色石の像が立列んでゐた。斯くて子供達は、青年の強さと熟練のみならず、賢人達をも崇拜するやうに教込まれたのである。雨の降る時には、廣い廊の設備が有つて、學者達は、柱の間を縫うて其處を散策し、下の花園や遠い郊外の景色を眺めた。晴天の日には、三三伍々、綠葉繁れる桂樹に蔭せられた蜿蜒たる小徑に策を曳いた。而して賢い人々が話合つてをると、賢くない連中は耳を傾けて聽いた。時には談論風發して、互の智惠の底まで廣げるのであつた。皇帝の子供達の教師を選ぶのも、此花園で行はれたのである。

バウロの父は遊んでをる子供達をバウロに見せて、此等の光澤した笑ひ興じてをる連中は、強い兵士や、足の早い競走者になるであらうが、然しモーセの律法を學んで學問に秀で、善良に生長する子供の方が、ずつと良い人に成るのだと訓へたことであらう。

一九　口授傳說

タルソ・五歳から十歳

バウロの習つた聖書は、殆んど現在の舊約書と同樣であつたが、今日のに編入されてないのも多く有つた。バウロは神聖語となつてゐたヘブル語でモーセの律法丈は讀んだ。けれども其他の諸卷は、日常用語のギリシヤ語で讀んだのである。昔のユダヤの教法師達は、聖書を三部に分つてゐた。第一は律法と稱ばれた五卷で、次は預言書と呼ばれた二十二卷・其餘を文學書と呼んでゐた。此頃バウロは、もう預言書に移つて・諸王や戰爭の物語を讀んでゐた。孰の話も物語も、神に對する愛と從順、ユダヤ人が神に忠なれば榮え、偶像を拜めば衰へることが、織込まれてあつた。

バウロは、ユダヤの士師サムソンが、狐の尾に炬火を結びつけてペリシテ人の野に放つた話、ユダヤの王エヒウが、怖しい勢で馬車を驅つて來るので、市の周壁の番人が直ぐエヒウの來ることを知つた話・多の癩病人達がサマリアを出て、シリアの軍門に降らうとすると、シリヤ軍は其光景に驚いて

陣屋を棄てたまゝ逃亡してゐた話、ソロモン王に會ふべくユダヤにやつて來たセバの黑い女王が、ソロモンの豪奢に驚いた話などを讀んだ。そして今時の子供が自分の國に就て到底も知り得ない程多くの歷史を僅十歳で覺えたのである。

進んで十二卷の文學書になると物語は少くなつて、格言、歌、長い詩、或は歷史と言ふやうなものであつた。然しパウロの先生は、我々が今も思ふやうに、其十二卷を非常に貴いものだと敎へた。そして彼は詩篇の長い處を學び、善いのや惡いのや種々の王の話、アツスリヤで偉い人になつた少年ダニエルが、死んでも神を拜むことを止めなかつた話などを讀んだ。

舊約書の三十九卷丈けでも子供が學校で學ぶには多過ぎる位である。然るに父が若しパウロを敎師に仕上げ度いと思ふたならば、パウロは聖書を終えてから未だ其程の物を覺えねばならなかつた。其は書いた物には成つてゐないで、敎師の口授するのを學ぶのであるから、餘程六ヶ敷いものであつた。其を口授傳說と言つて、無數の敎訓、聖書の說明、敎法師が最初の五卷に含まれてゐると言つた六百十三ケ條の律法等であつた。此等の傳說は、一生涯、傳へられた敎を暗記し、其を生徒に口授し、更に出來るならば自分でも敎訓を殖すことを商賣にして居た往古の大敎法師等が、代々積上げたものであつた。

敎師達は、此等の敎は完全無缺なもので、聖書中の孰の題目に就ても疑問を挿挾む餘地は無い。凡

ての疑問に對する答が其中に有ると敎へた。彼等は、あらゆる天使に各自の名をつけ、エジプトの法術士等の名を定め、エデンに居た獸は皆人間の言語を用ゐたと云つた。此等の傳說が餘りに澤山で細々しかつたので、串談好の或敎法師は、一本の毛で山を垂すやうなものだと評した。若しモーセの律法を覺え凡百の規則を知つて、皆な守るつもりであつたら、晝も夜も其にかゝつて何も爲る隙は無い、食事する間も寢る間も無いであらうと言つた人もある。

若しパウロが第十回の誕生日迄に聖書を覺えて仕舞つたとしても、彼が果して父の志通り、エルサレムの敎法師となる心算であつたら、未だ漸く、其より年々建築して行かなければならぬ學問の大伽藍の基礎を置いたに過ぎないのであつた。此山のやうな六ヶ敷い規則は、一般のユダヤ人民の重荷であつた。各會堂には會議又は法庭が開かれて、老人達がエルサレムの高等法院の委託を受けて法官となり、ユダヤ敎の法律規則を守らない人々を裁判したり罰したりしたのである。讀者は、イエスはモーセの律法を承認したが、口授傳說には正面から反對して、イエスは人々を自由にする爲に來たのである。彼等は是を神の律法だと言つてをるが實は人間の作つた規則に過ぎないと宣言したことを覺えて居るであらう。然しパウロは、若し傳說が聖書と衝突するやうに見えた場合には聖書よりもむしろ傳說に從はなければならぬと敎へられ且さう信じてゐた。

斯樣にパウロは、毎日毎週、來る月も來る月も、律法、預言書、文學書と次々に、こつ〳〵勉強し

て行つた。そして悧口な生徒であつたから、直ぐに傳說に來たであらう。而して愚な話や、無益な說の毛で垂下げられた山を喰ひ盡さうと徒に悶躁いたことであらう。

二〇　父

タルソ・十歲から十五歲

此頃には、ガリラヤの谷間に育つた聖童イエスは、エルサレムの金の神殿に詣でた。そして、パウロが驚異の情を以て遙に想像してゐる色大理石柱の中で、敎法師達が問答してゐるのを聽いてゐた。其時彼の純潔な魂は、疑問に滿され、彼等に答の出來ない質問を發せずには居られなかつた。イエスには、敎法師達の言つてゐる事は神の言ではないと思はれた。イエスも學校に行つて、今や大工と云ふ骨の折れる家業を習ひ初めた處であつた。然しイエスの智惠は、人間の學問の方に發達したのでは無かつた。パウロは、苦心慘膽して、一行々々、一敎一訓、後日になつて棄てゝ了はなければならぬとも知らずに、記憶の山を積んでゐたが、イエスは、天父の智惠を思ひ、慮り、體得して行つたのである。

タルソでは、子供の成人するのは早かつた。で、パウロも、十一歲になればもう立派な青年であつた。彼の勉强は六ケ敷かつたが、父は其を更に六ケ敷くした。父は、日々の生活に、モーセの律法ばかりでなく、敎法師等の規則や傳說も出來る丈け守つて行くのが善いと思つてゐたから、息子のパウロにも其通り敎へた。彼はパウロを自分の如な嚴格なパリサイ人にしたいと思つてゐたのである。パリサイ人になると云ふのは、ユダヤ人が宗敎上のサドカイ黨、パリサイ黨の二派に分れてゐた其一方に加はることであつた。サドカイ派は富祐な上流の人達で、今日ならば貴族社會とも云ふべきものであつた。彼等は廷臣、高官、多交官、祭司長、政治家等、國家の高級な役に就いてゐる人々であつた。そして聖書とモーセの律法は信じたが、敎法師達の口授傳說は少しも信ぜず。又、天國、天使、或は死後の生命と云ふものも信じなかつた。反之パリサイ人は、此等の事を信じ、普通の人が此派に加はつて、貧しい敎法師、學者、代言人、敎師達の大部分を包擁してゐた。彼等は聖書も神の言であれば口授傳說も同じく、聖書から出て、日常生活に聖書の敎訓を適用したものであるから、神の言であると主張した。そして始終サドカイ人と論爭して、サドカイ人は惡い、自分達は非常に善いのだと信じてゐた。然し、パリサイ派の方が良いには良いけれども。パリサイ人もサドカイ人も共に惡いと考へて居る人達も有つた。パウロの父は、パウロが成人したならば、律法にも傳說にも全く服從して、富祐で權力を恃んでをるサドカイ人の惡い敎を打滅さなければならぬと敎へたのである。

然し、パリサイ人でもサドカイ人でも無い人々も多く有つた。其は平民達で、彼等は働き、勞役した。祭も守り、會堂にも行つた。そして敎を聽いた。說法され、譴責され、罰せられ、而も、氣儘の

生涯を送つてゐた。そして高慢な自ら義とするパリサイ人からは「律法を知らぬ呪詛れた人々」だと言はれてゐた。

けれども彼等にも彼等の思想が有つた。其は偉人が現れて彼等の爲に代辯するまで、世の表には發表されなかつたのである。彼等は自分の名が世に顯はれることを欲しなかつた。たゞ、穀物や葡萄酒の十分ノ一を取立てる祭司達の課税が、重過ぎることなく、會堂法廷に引出されて罰を受けることさへ無かつたら、其で可いのであつた。

而もパウロは、此等の平民達を嫌い避けた。父は、平民達は毎日惡い事をして居るから罰を受けるのが當然であるとパウロに教へた。勿論其は正當な意見では無かつたのである。安息日に一哩歩くこと、杖を携へること、焚火を點けることまで、パウロや彼の父から見れば大罪であつたのである。安息日に牝鷄の産んだ卵子を食ふのを、或教法師は惡いと言ひ、或者は食つても可いと言つた。彼等は針の尖端に幾人の天使が一緒に立つことが出來るであらうかと云ふやうな事を激論した。そこで地を耕作し、種子を播き、斧を執り、木を伐る平民達は、教法師達も、常識の有る人なら、些少も氣に掛けないやうな細小い問題を議論して日を潰さなくとも、何かもつと有益な仕事が出來さうなものだと思つた。是は我々も同感である。

二　姉の結婚

タルソ・十歳かか十五歳

タルソのユダヤ人町には、家庭の祝宴に賑ふ時も多く有つた。家々は燈火に輝き、部屋も戸口も、花や綠葉で飾られて、喜びを供にすべく知友達が招かれて來るのであつた。たとへば子供の出生の日などが其で、ユダヤ人の律法は立派なものであつたにも似合はず、女の子よりは、男の子の生れた方を一層悅んだものである。更に多くの花を飾り燈火をつけ嚴な儀式の行はれた家庭の祝日は、子供の命名式の當日であつた。子供が男兒であると其子が十二歳になれば、聖句をヘブル語で書いた物の入つてゐる經牌を、心臟に近いと言ふ理由で左腕に、黑い羊皮の紐で結付けて貰ふ式をして大いに祝つた。女の兒の場合には斯樣な祝は無かつたらしい。經牌を付けないでも可いと云ふのか、其とも其を付ける價値が無いと見てゐたのか、孰れとも不明であるが、然しユダヤ人の女子は、種々の點で男子に劣らざるのみならず、生長して後男子以上の立派な人になつた者も多かつた。

女子が結婚の約束が出來て、契約狀を認め双方の捺印が終むと、祝賀の夜宴が開かれるのであつた。パウロも姉の婚約が成立した時には、其祝の席に列した。愈結婚の日になると、更に大きな祝が有つた。數週間も前に、會堂で報告が有つて、其からと言ふものは、結婚式に客を招く準備に忙殺された。

結婚日は例の教法師の細い規則によつて水曜日の赤い太陽が沒して後と言ふことに定つてゐた。パウロの姉は、暫く父の家に座つて待つてをる。白い花嫁の衣をつけ、薫高い花を飾り、眼も桃色の頰も見えないやうに頭から足の先まで厚い面帕を被て、皆晴衣を着た客人達の眞中に、侍女共に取卷かれて、花婿の來るのを待つのであつた。結婚式の最大切な處は、其夕花嫁を花婿の家に連れて歸ることであつたのである。

歌聲、叫聲、舞踊の騷しい音が、打ち鳴らす鑼鼓、カチ〳〵云ふ象牙四竹と相和して聞えるのは、花婿と、其伴侶の一隊が近づいて來る豫報であつた。花婿も、一等の美服を纏ひ、香水をかけ、長い髪を捲き、花の冠を戴き、香油の芳香高く進んで來るのであつた。色々儀式を行つて花婿は花嫁の家に入り、花嫁を導き出て、驢に乘せる。花嫁は其に乘つて狹い街を練つて行くのである。其後には客人達が從うて行く。手に〳〵炬火、提灯を持つた青年達は、踊りつ叫びつ歌ひつ花嫁を取卷いて行く。花嫁は、斯樣にして星月夜を、新郎の家へと乘込むのである。途中まで行くと、美しい衣服を着て、花を飾つた少女達の一團が薄長な棒の先に提灯を垂るしたのを持つて、花嫁を出迎へ、行列に加はつて、結婚を祝壽く新作の歌詞を以て、花嫁花婿を、聲高らかに祝うて進むのである。愈花婿の家に着くと、花婿は花嫁を驢から下して、彼の友人達が花嫁を舁いで家に入る。是は花嫁が入口の閾に躓いては緣起が惡いと云ふ爲であつた。續いて客人達が入り、それから結婚の晩餐と呼ばれた出來る丈け

山海の珍味を集めた樂しい祝宴の席に着くのである。其時花嫁花婿は隣合つて座るが、花嫁の眼は未だ厚い面帕で隱されてゐて、花婿は未だ彼女の顏を見てはならないのであつた。

御馳走が終ると、客人一同に、炒麥を撒きかけ、花嫁花婿が退席する時に兩人に撒く。其時でも未だ花嫁は面帕をきてをる。兩人限になる迄は花婿も其顏を見てはならぬのである。兩人限になると、花婿は初めて、花嫁の面帕を取除けて、現れ出た美貌に歡喜の叫を擧げる。次の間に控へてをる友人達は、その花婿の喜の聲を聽いて一緒に悅ぶと云ふ順序になつてゐたのである。結婚の日は其で終ひになるが、親戚知己の馳走祝賀は少くとも一週間は引續き行はれて、凡ての關係者が此結婚を喜ぶこゝろと新郎新婦の新家庭の幸福を祈る心を表したのであつた。パウロも、姉が若い良人に、こんな風にして嫁いで行くのを見たに違ひない。

二三　悅ばしき逾越節

タルソ・十歳から十五歳

家庭に於ける祝賀の宴や、小さな會堂に於ける特別な諸式の外に、タルソのユダヤ人達が守つた大祭祝日が三個有つて各一週間續いた。其時には、出來る人はエルサレムに歸つて金の神殿で其を守れと言ふのが、モーセの律法であつた。其で遠國から遙々エルサレムに往つた人も澤山有つたが、其が

出來ないで、子供達と共に家に留らなければならぬ人達も多く有つた。

三大節の一は、春祭の、エジプト脱出を紀念した逾越節であつた。其大切な處は、樂しい逾越節晩餐であつたが、パウロも既う其に與ることの出來る年頃になつてゐた。其日には母親は、家の隅々まで拭掃除をして忙し相であつた。其處らぢうに落ちてをるパン片を燒き棄て、日没頃には、酵母を入れたパン屑の粉さへ何處にも落ちてゐないほど家の中は、綺麗に清らかに光るのであつた。それから彼女は、一等上等の麪粉に酵を入れないでパンを作り、苦菜、菊ちさ、ちさを料理し、無花果、棗椰子、巴旦杏などの砂糖煮や、醋を加へた捏粉で固めた藥味、焙つた小羊、赤い葡萄酒などを備へ、白い蠟燭を用意するのである。

午後になると子供等は一番善い着物を着て、父母に伴はれて會堂に往き、かの、死の天使が、エジプト全土を驅け巡つた夜の話を聽くのである。それから歸宅すると父は、母の手から火の付いた蠟燭を受取つて、酵の入つたパン屑が何處にも落ちて居ないか家ぢう見廻る。そして、母が故意と殘して置いた二三片の屑を拾ひ集めて其を火に燒くのである。是は律法に、パン屑一片でも落ちてゐては家が不淨であると云つてあるからであつた。

最初の星が現れると窓の戸は閉ぢられ、一同晩餐の用意せられてある燈火輝く部屋に入る。正午から何も食べないのだから、腹は空いてをる。皆手を洗つて、父は一番美しい椅褥を置いた卓子の上座

に有る臥榻に凭り、初めての逾越食事は、旅の用意をして心配しながら認められたものであるが、我々はお蔭で、悦ばしく氣樂に頂けるのだと一同に說明した。それから常の通り父の祝福を受けて各自葡萄酒を飲むのであつた。次で苦菜や醋を食べて昔エジプトの苦い奴隷の經驗を嘗めたことを紀念し無酵パンを食ひ、而して後、火から取出したばかりの蒸氣の立つてゐる焙小羊が、父の前に置かれる。然し其に手を觸ける前に、父は赤い葡萄酒を今一杯注ぐ。若しパウロが一番幼い子供とすれば、彼は此食事の意味を父に訊く。さうすると父は、是はエジプトからユダヤ人が救出された紀念の悅しい晩餐なのであると說明して呉れる。而して一同起立して、次の如な詞で、喜の歌を唱ふのである。

イスラエルの民エジプトを出で
異言の民をはなれしとき……
海はこれを見て逃げ、
ヨルダンは後に退きたり。

其から熱い焙小羊を指で持つて食べ、更にパンを取り、葡萄酒を酌み、歌を唱ひ、遂に菓子果物其他好みの物を食うて、初め空いてゐた腹もしつかり馳走を詰込んで一杯に脹れるのであつた。

子供達は、貧しき者寡婦孤兒に親切であるやうに敎へられ、自分で準備の出來ない貧しいユダヤ人等は、近所の祐福な家に招かれたので、パウロは此晩餐のことを憶出すと常も愉快であつた。後に子

供達は、天使等も此喚聲が好きで、白い翼を動かして家の上に飛び、戸の後に立つてをる、昔の預言者エリヤの靈が、街に降りてをるなど云ふことも信ずるやうに敎へられた。父は酒盃に葡萄酒を注いで、其をエリヤの盃と呼び、子供達に命じて、門口の戸を開いてエリヤを迎へ入れさせる。子供達は月の光を凝視ても、誰も見えぬ、夜風冷く頰を擊つばかりである、洋盃の葡萄酒は、父が飲み干すまで、ちつとも少くはならぬ。其でも彼等は光と悅と馳走に醉ひながら親切な事をしたと思ふのであつた。たとへ太古に死んだ預言者には何の爲にもならなくとも、彼の爲に戸を開けた赤い頰黑い眼の小天使達の爲に良い精神を與へたに相違ない。

二三　エルサレム順禮

タルソ・十歳から十五歳

逾越節の週は、四月の陽氣な時候で、花は地を被ひ、天空は藍色の敷布を擴げた如うであつた。タルソの平原にある畑は、大麥小麥が豐に風に搖れてゐた。赤い野薔薇、黃色い忍冬が籔に香り、冬の白い雪は、いつしか麓から消えて、小川小溝は、眞紅の夾竹桃で籬せられてゐた。

子供の喜んだ次の節は、暑い十月にある結茅節であつた。其頃には日當りの良い葡萄園には、紫色の葡萄が熟して房々と垂れてゐる。子供等は父母に伴はれて田舍に出掛け、廣い葉の棕梠、白く光る

橄欖、灰色の柳、綠濃き桃金孃や梫の枝を伐つて來て、廣い屋上や、門や裏庭に小屋を造る。綠葉の家が出來上ると、其中に藁の筵を敷き、赤や青の毛氈を其上に重ね、四圍の枝には、赤い桃、黃色い枸櫞、紫の葡萄、林檎、橄欖等の果物を吊るす。其で中に住む準備が出來たのである。往來の兩側には樹枝を列べ、家々の壁には花の繩を飾り、一方の家から向ふの家にも引渡して、街は全で綠い森の小路の如に見えた。成人達は如何考へてゐたか知らぬが、子供達は其日が來ると悅しかつた。日沒頃パウロの家族は打連れて家を出で、自分達の拵へた小屋に入つてゆく。そして其中に少くとも一週間、好ならばもつと長く、住むのである。其頃の晝は暑くて燃えるやうで、夜は月光晃であつた。

パウロは、結茅節は、太古、ユダヤ人がエジプトを出てから幾十年も、曠野の黑黃な砂、頭を出してをる岩の道を漂浪ふた間、天幕生活をした紀念であると敎へられた。其樣にして一同綠の假小屋に一週間を過した。晝は日光、廣い葉越しに踊り、夜は、星光、絲の如く射込み滿月戸口に輝くのであつた。子供達の爲には、此上なく樂しい時であつた。

第三の大祭は、輝かしい六月にある初穗の祭で、其時には、小麥、大麥、らい麥、稷などの初穗が刈られた。

エルサレムまでは四百哩もあつたので、パウロは未だ父に連れられて行つた事は無かつた。然し大祭毎に、ユダヤ人の一隊は必ずタルソからエルサレムへ上つたもので、パウロの父も、少くとも年に

一度は、金の神殿に來詣して來なければ氣が濟まなかつた。タルソはタウラス山脈の彼方にある町村からエルサレムに上る街道筋に當つてゐたので、パウロは、幾百のユダヤ人巡禮が、タルソに宿るのを見知つてゐた。ユダヤ人等は相互に旅人を懇にする心から、巡禮の人々を、各自の家庭に宿泊らせたのである。

大祭の前、數週間は、タルソから上る巡禮者達は、旅の準備をした。パウロの父が行くときには、母は、一等上等の衣物や鞋を括つて、愈エルサレムに近づいだ時に着る用に備へた。父は森に入つて自分の背丈位の太い杖を切つて來たり、驢馬の諸道具を直したり、赤や黄や綠の新しい羊毛の房を、驢馬の頸に下げるやうに拵へたり、小さな總を其鼻の上に飾る用意などをした。巡禮隊は朝早く旅立つ、其時パウロは母と共に、市端まで見送つて行く。彼等は橋を渡つて、アダナの方へと進んで行く。見送るパウロ等の眼には、彼等が高く擧げて打振る棕梠の綠葉が映つた。耳には樂しい讃詠の聲が聞えた。彼等は懷しいエルサレムへの長途を、讃詠に氣を勵まして往くのであつた。

二三ケ月もして歸つて來た父はエルサレムの立派なこと、金の神殿の宏壯なこと、諸邦から集つた幾十萬のユダヤ人のことなど物語つた。パウロは天の幻覺でも見てゐるやうな氣で其を聽いた。其が結茅節だと、朝、白衣をつけた祭司等が、銀の喇叭を吹立てる。人々が群衆してくる。祭司長が、神殿の門からキドロン川まで岩に刻んだ一百の段々を下りて、不思議なシロアムの池から、金の大杯

に水を滿し、また神殿へと登つて來る。兩側の丘や岩の上に群つてゐる人々が其を見て聲を揃えて歌ひ綠葉の枝を打振る樣は、恰も森が大風に搖られて居るやうであると言ふ話。初穗の節だと、白衣のレビ人等や、少年唱歌隊が、大理石の石段に群つて、大きな眞鍮の銅鑼に調子を合せて大讃詠を歌ふ。其下には、參詣者等が眞黑に集つて、靜に耳を聳てゝをる光景などが話された。パウロは聽いて居るうちに、滅多に見られないやうな耀かしい夢幼を見てゐる心持になるのであつた。父は、パウロだつて今に大きくなつて、聖都も神殿も見ることが出來る。其を見たときの喜は、實際見たことの無いものには想像が付かぬと話して聞かせた。タルソのユダヤ人等は、皆、子供達に左樣敎へたのである。子供等は美しい信仰を以て眞面目にさう信じ、永く待つてゐた時が來て、愈本物のエルサレムと金の神殿を初めて見た時には、到底も想像以上に立派なのに、喜び叫んだのであつた。

二四　偶像、神社、妙な學問

タルソ・十歳から十五歳

パウロは賢い子供ではあつたが、未だ自分の考と云ふものを持つことは出來なかつた。學校の先生は、質問するやうに奬勵してくれたが、其はたゞ他の人の考を學ぶ丈けのことで、自分で決心するとか、自分の意見を持つとか云ふことを敎へられたのではなかつた。凡て勉强には、二つの規則が定つ

てゐた。卽ち、先生の敎へることを悉く暗記することと、凡て學んだことを信ずる事とであつた。そこで善いこと、正しいことを澤山學び且信じたと同時に、間違つた愚なことまでも其儘信じた。彼は神が、律法の五卷に記されてある凡の語をモーセに語り給うた、モーセの死んだ時のことまで語り給うたので、モーセは其を凡て書殘したのだと敎へられた。常識で判斷しても、其は眞實ではない。そんな事を信ずるのは良心に訊いても正しいことではない。けれどもパウロは、疑はしい事でも信ずる方が、疑の無いことを信ずるよりは一層賞むべきことだと敎へられたのである。

パウロの敎師は、聖書の各書は、皆神の言であるから、其を愛し其に服從するのは彼の本務であると敎へた。是は一面正しくもあり一面間違つてもゐる。斯樣なわけで善い敎と惡い敎とが混合してゐたのである。敎師は、また、シナイ山の烟と火の中で、神は、モーセに、多くの口傳の傳說を與へられ、モーセは、其を復た他の或人に話し、其人が復、次の人に傳へ、遂にパウロの時の敎法師まで、神の言として言傳へられた。でもしも、此傳說と聖書とが衝突する場合には、傳說の方を信じなければならぬ。此傳說に逆ふことを敎へるのは非常な間違ひで、烈しい罰を受けなければならぬとパウロに敎へた。然し、少し後に、イエスが、パリサイ人等に向つて、汝等は傳說の爲めに聖書を無い物にしてをると譴責し給うた時には、人々はイエスの言が眞實であることを知つてゐたのである。

然しパウロは、自分で考へて見るやうに奬勵されなかつた。そこで彼は、毎日の生活の爲に定めら

れた無數の細々しい規則を皆な學び信じ、昔の人達が出來る丈け不思議に見えるやうに造つて置いたユダヤ人の歷史の中に織込まれてをる奇妙不思議な物語を悉く信じた。彼の日課は學つて信じ、信じて學ふことで、少しも自分で判斷することは無く、遂には、傳說がどんなに不可思議で、馬鹿氣てゐて間違つてゐて、無理押付けのものであつても、其を信じ、他人にも信ずるやうに勸めるほどになつた。

パウロは既う自分でタルソ中を步き廻れる年頃になつたので、ヴィナスやサルダナパラスやセミラミスの爲に建てられた立派な社に行つて、門の處から、宮を取卷いてゐる綠樹の神苑を眺めることも屢あつた。彼は、廣い眞白な階段が、拜殿の屋根を支へてゐる大きな溝付きの圓柱林立する處まで刻まれてをるのを見たであらう。彼はまた白い衣裝をつけた神主等が、神苑の小路や廣い石段に逍遙したり、お祭の日には金錢を拂つて、市の人々が貴賤の別なく、諸方から集つて來て、神苑の中に群集して入込むのを視た。彼は子供心にも、其人達を非道く憎み蔑すんだ。あの立派な建物の中には、男や女の像が祀つてある、あの人達は其を神だとか女神だとか言つてをるが、惡むべき偶像なのだと思へば腹が立つのであつた。モーセの律法には、其樣な偶像を造る者は罰せられ、其を拜む者は皆殺されると敎へてある。此諸國から人の集まつてをる大きな市の中でも、小さな一町に住んでゐるユダヤ人丈けが、眞に神を拜んでゐる者である。他は皆偶像禮拜者である、其神社は打壞し、其神苑は伐倒し、其偶像は粉に斫り、其禮拜者達は殺さるべきものだとパウロは思つた。けれども勿論此時パウロ

は未だ少年に過ぎなかつたのである。

或日には、パウロは、並木に蔭せられた道のついた花園に取圍まれてをる美しい建物の側を通つた。其は、羅馬帝國中に其名も隱れなきタルソ大學で、歷史、文法、詩、音樂、雄辯學、天文學、藥學、哲學などが敎へられてゐた。パウロは子供らしい早合點から、神を知らぬ大學生等の學問は、何にもならぬ研究、惡い智識だとばかり思つてゐた。外國人の學問や書物や敎は、聖書や傳說を勉强する心を惑はすから、避けねばならぬと敎へられてゐたからである。尤もパウロは大人になつてからギリシャの學問も餘程有つた事が分つてゐるが、其は會堂學校の生徒の時でなく、ずつと成長して後に學んだものであらう。少年と云ふものは、漸く坂を登つて、自分の園圍を眞に眺め始めたばかりの時に、もう非常に賢く、ずつと先の方まで解つてをるつもりになり易いものであるから、パウロも此時代には、學校で敎へられた丈けで滿足してゐたであらう。

二五　河と白い瀧

タルソ・十歲から十五歲

市から少し溯つて行くと、シドナスの瀧が有つた。急湍將に淸洌な湖水に流込まんとする處、黑い岩壁に近づくに隨つて河幅は益狹くなり、忽ち落下して水晶の帶を垂れ、凸出つた巖石に碎かれて、

雪白の飛沫、千條の雨と化し、下なる岩床に當つて渦を卷く。其兩側には樹々の枝臨き、波立つ潭の小島に生えた木の、水の眞中に見え隱れするも面白い。

尤も此瀧は、パウロが其岩に立つて、逆卷く泡沫を樂み眺めた當時とは、變つたかも知れぬが、然し大體の光景に變動は無かつたであらう。瀧の上の赤い岸は、今も尙、こんもりした樹木茂り、巍峩たる端々は低く伸びた羊齒綠に、岩々は靑銅色又は茶褐色の蘚苔、西洋枕置ける如く、眞紅や深黃色の水苔で彩色られてをる。ずつと遠くには、昔に變らぬ紫の山々立ち列び、日光を浴びて碧空に輝く巍然たる雪の峯へと、漸次高くなつてゐる。瀧は子供の心を跳らせる。パウロも友達とぶら〳〵河を溯つて來て、思はず立止り、何も思はず何も感せずたゞ續々に落ちる水、逆卷く水、輝く水を見て、何とも云ひ知れぬ滿足を覺えたことであらう。

河には魚が澤山ゐた。其が屢母の備ふる食膳に上つたので、パウロも一日、淸い潭や、深い流に糸を垂れ、側の淺瀨に、赤い背をした塘鵝が膝まで水に入つて、滿腹御馳走を漁つてゐるのに氣附かぬこともあつたらう。朝早く出掛けると、灰色の天鵞轉り、金毛の載勝、奇妙な聲を立てながら岩から岩に往來ふてをる。夕までも歸らないでゐると、鶫や黑鶫が眞紅な安石榴、桃色の花咲く夾竹桃の蔭に呼交ひ、遂には墨色の羽毛した夜鶯が、高い松の木の梢から、初は徐にコロ〳〵と、終には總の友鳥を呼び起して、數時間立て續けに、鶯時雨を降らすのを聞いたことであらう。

少年パウロは聖書を知つてゐた。彼は無比に美しく閃く星の天井を戴いて家路につき、途上、輝く天空の世界を仰ぎ視つゝ、次の如き聖句を誦じたことであらう。

我なんぢの指のわざなる天を觀、
なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、
世人はいかなるものなればこれを
聖念にとめたまふや。
人の子はいかなるものなればこれを
顧みたまふや。

如斯くして、パウロの少年時代は、學校に行つたり、家庭で從順を習つたり、市中を歩いたり、野や河に遊び廻つたりしてをるうちに過ぎて行つた。四期は回つた。冬は白い衣を着、冷い息を吹いて夏は研ぎ澄した金光の太陽と、蒸し顫動く熱に、春は餘りと云へば變り易き輝く草の毛氈と紅の花の色と共に、秋は、黄ばむ葉と紫の果實を殘して。年と共に少年パウロは青年に造り變へられつゝあつた。而して種々な疑問が心を騷がし、色々な思想が胸に湧く年頃、殊にユダヤ人の生涯中最大切な滿十三歳が、日々に近づきつゝあつた。滿十三歳になると、ユダヤ人の子供は、少年時代を踏出して成人の域に入り、凡て子供らしい事を棄てゝ、成人らしく爲なければならぬことになつてゐたのである。

二六　律法の子

タルソ・十歳から十五歳

子供が滿十三歳になると、兩親は出來る丈け嚴に、是迄學んで來た凡のことに對する義務を言ひ聞かせなければならなかつた。既うモーセの律法を習つたのだから其に服從せねばならぬ。若し其が出來ないと、會堂の裁判にかゝつて罰を受けねばならぬのであると敎へるのであつた。十三の子供は嚴かに「律法の子」と稱ばれて、自分の事は自分で考へ自分で行うて、自分の爲たことに就て責任を負はなければならなくなるのであつた。

嚴肅な試驗に及第すると、パウロは成人の記號として會堂で、胸と前額に經牌を着けて可いと言ふ許可を與へられる。其日は母親にとつては誇の日であつた。經牌は叮寧に準備された。先づ特製の羊皮紙の小片に、特別なインキで、聖書の四つの句をヘブル語で記し、其を卷いて、黑い犢皮で出來た小箱に納め、而して其箱に、指位な細さの二本の長い皮紐を付ける。

パウロは、薄暗い會堂に集つてゐる人々の前に立たされる。さうすると白髮の役人が、其小い黑い經牌を取つて、彼の露出の左腕、心臟に接する邊に當て、叮寧に、付いてゐる皮紐を七回り腕に卷いて、漸次掌の方に下け、掌を三度卷いて中指に端を結ぶのであつた。而して、これからパウロは、會

堂に入る時には必ず此箱を左腕につけてゐなければならぬ。若し善い生涯を送れば、更に父の如く、前額にも今一個の箱を結着ける許可を與へられる時が來ると言渡された。教法師の演說が有つて、忠告、警告、奬勵の言が、パウロの心に深く印象されたであらう。母親は婦人席の格子に顏を寄せて、息子が斯樣に若年で既に律法を守る成人と看做すと云ふ宣告を受けるのを見て、歎息をつき、涙ぐむだに相違ない。もうパウロは、母親と一緒に婦人席に座れもせず、會堂に共に行くことも出來ないのであつた。

經牌の中に入れられたヘブル語の聖句は、如何な不思議なものであつたらうと諸君は思ふかも知れぬが、其は三十節あつて、「是をなんぢの手におきて記號となし、汝の目の間におきて記號となしてエホバの律法を汝の口に在らしむべし。……汝らの神エホバの汝らに命じたまへる誡命と律法と法度とを汝ら謹みて守るべし」と言ふやうな句もあつた。

若しパウロの誕生日に此宣誓式が行はれたのであつたら、樂しい誕生祝日の夕食が出て、父はパウロの頭に手を置いて祝福し、黑眼勝の母は、會堂の祈禱書にも無いほど美しい祈禱を胸に抱いて彼に接吻し、弟妹等はお目出度を言つたことであらう。

かくてパウロは少年時代を過ぎて律法に縛がるる成人期に入つた。嚴格なるパリサイ人の父に教へ込まれた凡の教訓は彼の頭に滿ちてゐた。そして學つた律法に凡て服從する義務を深く感じ、一生最大

切な寶物として嚴肅に授與された黑い小箱を見る度に其を忘れなかつた。

此頃から彼は、もう小學生では無くなつて、研究生になつた。學問を止めたのではないが、其方法を變へた。もう子供等と一緒に會堂學校に行かなくなつた。律法の子となつたのだから子供の仲間にはなれぬ。然し彼は軈て人の師となるべく、自分で勉强を續けて行つたのである。學校や學課が早く終つたら、勉强も其で濟むのにと思ふ少年もある。勿論、怠惰な少年や、直ぐから勞働する必要が有つて勉强する時間の無い子供には、學問は卒業式の日でお終となるが、其は就も氣毒である。反之、先生の命令でやるのでなく、自分から智識を好んで學校を出ても勉學を止めない若者は、實に幸福で、賢い人である。人は如斯者を賞める。如斯者こそ善い人になるからである。また或若者達は、自分の職業柄、自然一生書物と親しむ必要が有つて、小學中學大學と進んで行く。其は殊に誇らしい道で、パウロも此道を取りたいと思つたであらう。

二七　織機小屋

タルソ・十歳から十五歳

ユダヤの教法師達は、どんな子供でも皆仕事を習はねばならぬと教へた。而して子供は父の家業を學ぶのが、普通の習慣であつた。教法師達の教へによると、子供に仕事を教へぬ親は泥棒を養ふやう

なものである。自分で働いてパンを食べぬ者は他人のパンを食ふのだから。で教法師になり度いと思ふ學生は、商賣をして自活する途を習得はねばならなかつた。教法師だからと言つて、宗教で飯を食ふことは許されてゐなかつたのである。是は今日でも良い規則である。

機織職や天幕屋はタルソに澤山有つた。パウロの父親の商法も是で有つたらしく、パウロは機織職兼天幕屋を習得つた。タルソには遠近に聞えた強い織物を產した。其はキリキャの山間に牧はれる山羊の長い毛で製したもので、キリキャムと稱ばれてゐた。地質が固い爲に防水力が有るので、舟の帆穀物や毛を入れる袋、水夫や漁夫の外套などにも作られたが、主として、強い廣い天幕を造るに用ひられた。

若しパウロの父が果して天幕屋であつたとすれば、屋根丈けの仕事場が有つて、棒、紐、繩、石の錘などで出來た織機が一方に据付けられ、タルソの機織職獨特の不思議な熟練を以て、地の極めて良い毛織物が、徐に織出されてゐたであらう。黑、茶褐色、白さまゞの山羊毛の束が毛繩で括られ積上げられてゐたであらう。其は市場又は直接山間の天幕小屋を歩き廻つて、牧羊者の手から仕入れたばかりの原料であつた。

年に數回、パウロの父は迂曲ねつた石道を山家へと入り込んで牧羊者等と取引し、しばらくして歸つて來るときには、天幕製造の原料毛を或は束にし或は袋に詰めて、數頭の驢馬に澤山と背負はせて

來るのであつた仕入れて來た。原料毛は、櫛にかけて絲に紡ぐべく揃へられなければならぬ。其或物は赤、茶褐色、黃、紫、藍、綠などに染められ、天幕に太い縞を織出す用に供せられた。然し大部分は、自然のまゝの黑、茶、鼠、白などの絲に紡がれた。

同じ仕事場の他方を見ると、婦人達が快活に喋りながら、毛の束を持つたり、巧妙な指先で垂下つてをる絲を紡いだり、美しい色を混合せたりして、其を紡錘にかけ、機織人の梭につける用意に忙しい。パウロは其處に行つて、絲の紡ぎ方を敎へられたであらう。絲が梭につけられなくては機織は能きぬのである。やがて彼は、機織全體の事を自分一人で爲なければならぬ時が來るのであつた。

絲を紡ぐ方は其でも未だ織ることよりは容易かつた。機織を習ふ爲には、パウロは、外に太陽輝く時も辛棒良く小屋に入込んで、朝から夕まで、織布の種類によつて奈何、機に桁腹を置くか、梭に絲をつけるには如何するか、一方から他方に梭を投げて落さないやうにする方法、重い横木を押上げて絲と絲とを密着させる仕方などを、立つたまゝ敎へられる日數の重つたことであらう。然し、彼が自分で、端から端まで織物を織上げることの能る迄、父親が側に付いてゐて敎へてくれるのであるから、天幕や帆を造る粗い毛織物を織る位は、モーセの五卷の暗誦の出來る少年には左程六ヶ敷無かつたであらう。

織ることを覺えた次は天幕製造を習ふのであつた。硬々した毛織物の卷いたのを解いて、人が買つ

て住むやうになる天幕を拵へるには如何するか、學ばねばならなかつた。パウロは父が種々の丈に毛織物を切つて縫合せるのを側から見てゐたであらう。黑い髪の黑眼の鋭い少年パウロが、小屋の床に座つて、手に大きな青銅の針と太い糸とを持つて、徐々、雨が滲透つたり風に吹かれて綻びないやうに確り毛布を縫合せてゐる有樣が眼に見えるやうである。子供は、よく針仕事などすると指を突いて腹を立てるものである。パウロも上達する迄には幾度もやつたことであらう。

パウロの造つた天幕は、今日のやうな白い高いものではなかつた。大きな縞のついた段通で四角に圍つて、廣い端が地に垂下つてゐると思へばよい。帆柱の如に眞中に立つた一本の柱に垂られるのでなく、十二本許の低い棒杙を二列に立てた上に、幕を覆ふやうにして、下つた端を地に接して結付けたのである。其爲に、布の端が解けて來ないやう同じ山羊毛の强い繩で天幕の邊緣を取つてあつた。また其處此處に革の耳をつけ、短い繩を其に通し、槌で地に打込んだ短杙に天幕を括着けた。さうして天幕をピンと張つて、雨が流走るやうにし、且つは風に吹き捲られない用心をしたのである。

かう云ふわけで、天幕製造には、山羊毛の仕入れ、染色・紡積、機織、型造り、繩なひ、皮切り、棒杭けずり、耳つけ、鈎つけをして鍋釜、衣類、馬具などを垂す用意までして、漸く仕上げが出來るのであつた。それから其出來上つた如何にも强さうな新しいのを戸外に飾つて、アラビヤ人等が買つて行くと云ふ順序になる。或ものは美しい赤、藍、黃、茶などの廣い線のついたのもあるが、普通は

黑又は灰色で、煮焚の煙や煤で益黑くなるのであつた。パウロが父のやうに善い强い天幕を初から終まで自分で造り得るやうになる迄には、可成、永い月日が要つたに相違ない。

二八　天幕製造と見學

タルソ・十歲から十五歲

パウロは學校で良く能きた。彼は到底天幕屋で終る男ではなかつた。やがて律法の敎師となり、或はエルサレムの敎法師とまで出世すると云ふ人であつた。敎法師と云ふは、神と聖書に就て研究深く、其を他人に敎へる。今ならば、神學敎授とも稱ふべき者であつた。然しパウロは其迄に種々習はねばならぬことが有つた。彼は後年、大敎師になつたが、其は父がパウロの少年當時考へてゐたのとは大いに違つてゐた。

敎師になるのに、商法を學ぶ必要は無いやうなものであるが、然し其には多くの立派な理由が有つた。敎法師達は、人に敎へることによつて金錢を得ることを許されなかつた。ある敎法師は生徒に向つて「律法を金を掘出す鋤にするな」と敎へた。「勞働は大事である。神の榮光を表はす」と言つた人もある。「道端に斃れた馬の皮へぎでもよいから必ず仕事を爲よ。私は祭司だからと言譯をするな」と敎へた人もある。敎法師達は、桶匠、パン屋、裁縫師、大工、靴屋、建築請負、運送人、製粉者、天

幕屋などをした。それでパウロも自分の衣食住を支へ得る仕事が可能なければならなかつたのである。こゝに無料の福音の觀念が有つた。其後是が癈つたのは殘念なことである。パウロが、自分は自分で食つてをると言ふことの能る爲に、傳道旅行中、自分の商賣をコツ〳〵行つてゐたことは後に記すであらう。

昔學校で過した愉快な時、先生と遊んだり、勉强をしたりした事を想起するのは樂しいものである。然しパウロの爲には、さうした小學時代は既に過去つたのである。パウロは一人で敎法師の前に座つて、古い茶色のヘブル語の卷物を擴げて、此節の意味は何々敎法師が斯う說明したの、あの節は何敎法師によれば斯々の意味だのと言ふ長々しい講義を聽き、格言のやうなものは一言一句反覆暗誦するのであつた。若しエルサレムの大學で勉强して來た敎法師で、其學殖が會堂學校の校長に勝つてゐて而もタルソ市で自分の商法を營んでゐると言ふやうな人物が有るとパウロは必つと彼に就いて、無限の傳說を益々深く學んだに相違ない。

滿十三歲に達したとは言ふものゝ、パウロは未だ子供であつた。勉强の時間が經過ると、老敎法師は、茶色の洋皮紙を卷いて叮寧に箱の中に仕舞ひ、自分がエルサレムの學生であつた時代の事をパウロに話して聞かせた。神殿の周圍には、大小の部屋が有つて、畏い敎法師達が其處を講義所として控へてをると學生達が集つて來て思々の師に就て學ぶ。或は廻廊の邊で敎法師達と學生等が隨時集合し

て互に研究し、月謝も何も無しに勉强の出來ることもあるなどゝ話した。

線條入りの衣服をきて趺をかき、黑い頭髮には美しい布を卷き、熱心に黑眼を光らして、皺の深い敎法師の顏を凝視めながら、勉强をして聖別せられやうとする學生の前途には如何な道が開けてをるかと云ふことを話されて、非常に面白く聽耳を立てゝをるパウロの熱心な容子が眼に見えるやうである。誰でも若い時には幻影を見、夢想を畫くものである。我々の足は地の緣を着、天の碧色を被れる山の頂にある。そしてロを開ける途、黑い巖、急流が見えぬ。岩々は金色に輝き、流は白銀のごとく、白い霧にぼかされた道途は、希望の太陽に照らされて、紫紺と淡紅の虹が架つてゐる。斯樣にしてパウロは、懸命に勉强をした。袋や天幕や帆を精出して作つた。そして、苦しい仕事に日々追はれながらも、翼に乘つて天にも昇る心持でゐたのである。

天幕を製作ることは習つても、其キリキアム地を織るに必要な山羊毛の仕入や、出來た天幕の賣買が出來るやうにならなければ、未だ一人前の天幕屋にはなれなかつた。そこで時々パウロは、父の數頭の驢馬に鞍置いて、空の袋を持つて父に從ひ、小麥大麥の畑、葡萄園、果樹園等の間を通りぬけやがて暗いタウラス諸山への一本道によつて、向ふの牧羊者等の居る地方に出掛けるのであつた。

父子は黑い偏平い敷石の羅馬街道を驢馬に跨つて行つた。道は田舍の荷車や、昔の戰車の爲に凸凹に破損してゐた。仕入れには春、山羊が長い冬の毛衣を脫ぐ頃に出掛けたのである。赤土の耕作して

波打つ五穀の植えられてない處は、凡て綠草と野花の平野であつた。輝かしい罌粟、赤、黃、白の鬱金香の花床、眩いばかり眞紅の、紫紺の、秋牡丹、薫り高い桃色の唐水仙が廣い帶の如く咲揃へるもあつた。

此邊の野では、百花自ら種蒔き、煎付くやうな太陽に枯されて仕舞ふまでは、いくらでも繁殖つて行くのである。藪叢までが、黃色い忍冬や白い素馨の香高く、野生の葡萄は、幹から幹にと傳うて枝と枝とを、森の樹間にレースを張つてゐる常春藤のやうに、結び付けて居るのであつた。

道路は河に沿うて、左に渡り右に横り、短い樫の森を戴き、紺色の松林を帶にした低い丘の方へと溯つていつた。山間を縫ふ此急な道は、山々の對ふにある國々からキリキヤ平原に通ずる唯一の開口なので、キリキヤ門と稱ばれてゐた。昔、侵入軍が、岩を切開いたもので、處々、峽谷が隨分狹くて、荷を負うた駱駝が通れぬほど、出張つてをる巖石が上を塞いで碧空も見えぬほどである。

牧羊者等の住む地方は、此道が一等高くなる高原に有つて、其處には山羊の喰ふ桃金孃や百里香が野生してゐた。パウロ等が來て見ると、荒くれた牧羊者達は、パウロの作つたやうな屋根の低い天幕に住み、子供等や猛しい犬は其處に戯れ、婦等は、各天幕の口に燻つてをる木片塵埃の火で、煮焚をしてゐる。天幕を張つてをる彼所此所を訪ね、荒つぽい牧羊者等と一緒に住み、そして山羊毛を買うて幾日も幾週間も費した。牧羊者等は、パウロ等が山羊毛を買ひに來たのを知つてゐながら、さも賣

りたくも無さそうな態をするのであつた。

或時は、パウロは海岸の町村に帆や水夫の衣服にする毛織物を賣りに行つた。或時は、東の平原境にある低い丘陵を越え、諸々方々の道を旅して、田舍の百姓達や、町の商人達の處に往つて、穀物袋を拵へたり、天幕を直したり、鞍につける合財袋を縫つたりする爲の毛布を賣つて歩いた。

諸方に旅する間には、パウロは色々な人に接した。商人、水夫、牧羊者、百姓、町の人、村の人、富める者、貧しき者、ユダヤ人、外國人、そして世界には市が澤山有つて、偶像が拜まれ、祭禮が行はれるのは、タルソに限らぬと云ふことを知つた。エルサレムの外にも、神殿は澤山有る、犧牲を捧げる白衣の祭官は外にも多く居るのだと云ふ事も知つた。此等の町々では、其處に商賣をし、自分等丈け離れて住むで、小さな暗い會堂で禮拜してゐるユダヤ人等は、外國人に嫌はれてゐること、そして彼等は綠の森の中に安置された木や石の偶像の前に脆いて、捧物をしたり香を焚いたりしてをる外國人を悪むでをることも知つたのである。

二九　タルソを後に

タルソ・十五歲から三十歲

廣いキリキヤ平原や山々村々を旅してゐる間に、パウロは田舍の人達の爲て居ることが解つて來た。

薄黑い一團の顏を照す牧羊者の赤い火影に夜を過しては、闘つた話、交換して儲かつた話、牛や羊を飼ふこと、欺し合ひ、大酒呑、御馳走、泥棒などの奇態な話を聽いた。或は旅人の爲に拵らへてある粗末な石小屋に宿つて、驢馬の世話、煮焚の方法、それから愚圖々々した弱い者は押退けられ、强い者が取放題と云ふ山の中で、自分の身を守る術などを習つた。如斯にして彼は、己の生涯にどれ程旅行を爲なければならぬか知らぬ先から、旅行者としての訓練を經てゐたのである。

ユダヤの教法師達は、十六才になれば、既う律法も聖書も主要な傳說も學んだのだから、其からは傳說と云ふ傳說は、どんな形、どんな種類であらうが、新しからうが古からうが、モーセの律法に關係しやうが、其他の聖書の個所に關聯しやうが、悉く學ばねばならぬと言つた。其年輩になれば、律法に就てはもうチャンとした考が定つて居るのだから、どんなに奇妙に、不可思議に見えることでも隱す必要は無いと思はれた。彼はもう何でも信ずる、故に、教法師の奥の戸が開かれて、教法師達の知つてをる事は皆な見て知ることを許されたのである。

バウロは一つの商法を習得した。こゝで彼の生涯の目的を定める時が來た。若しパリサイ人の頭分で滿足するつもりならタルソを去るには及ばぬ。けれども若し、教師になる考が有らば、エルサレムに上つて、神殿の大教法師の下に學生として就かねばならぬ。バウロが教師となると言ふことに決定する迄には、父親と會堂の長老達との間に種々相談が有つたことであらう。また母親は相談の席には

加はらなくとも深い優しい心を持つて、此事を案じてゐたことであらう。バウロは優良な學生であつたので、老校長も、バウロが益學問を續けることになつたのを喜んだであらう。會堂の一同も、彼の如き前途有望な青年が、タルソからエルサレムに送られるのを誇としたことであらう。

送別の晩餐が開かれて、バウロが尊敬して其賞讃を受けるのを忝いことに思つた老人達は、バウロの進步の早いのに目を付け、やがて大いにやつて貰ひたいと言ふ考から、色々良い忠告を與へてくれたであらう。ユダヤ人は今日でもあるが、互によく助け合つた。でバウロも、若い者が他所に行く時には會堂で待つてゐてくれる人があり、監督をしてくれる者が無くては危險だと言ふので、エルサレムの知人達に紹介の手紙を貰つたに相違ない。口まめな誰彼は、偉い學者になつてタルソに歸つて來て此會堂で教へて呉れとも言つたであらう。バウロも心中では、是迄共に生活した人達や此市を想ふの情濃厚に、よし、己は偉い教師になつて歸らうと決心してゐたことであらう。

此頃には、バウロの姉は良人と一緒にエルサレムに住居してゐて、兩親もバウロと一緒に、大祭見物に出掛けたであらう。たゞし母親は見物よりも何よりも、一度別れては再た逢ふことの六ヶ敷い我子を出來る丈け永く見て置き度いのが眞實の目的であつたらう。

當時、巡禮船に乘つて、遠いパレスチナの海岸なるカイザリヤ港に航することも、陸路馬に跨つてエルサレムへと行くことも出來た。然し、バウロ等は、聖都に行き神殿に詣でやうとするユダヤ人等

の大巡禮隊に加はつて、ほつ〳〵陸路を往つたものと思ひたい。

タルソを去ることは、青年學生たるパウロにとつては言ふまでも無く、彼の母にとつても、自分の躾を離れて、今迄のパウロとは違つた人に彼を作らんとする或者の手に此子が渡るのだと思ふと、仲々容易ならぬ事件であつた。出發前の數週間は、母親は針持つ手の忙しいことであつたらう。襯衣、外衣、帶、肩掛、半巾の美しい上等なのをパウロの爲に準備爲なければならん。また冬の用意に重い外套や寢床にする筵も備へねばならなかつた。財布の中に金が有るばかりでなく、更着の着物を澤山持つてゐるのは富祐な青年の徵であつた。美しい飾をつけ、襟や衣緣に刺繍を施して、家や母を思はせるのは、母親の手に限る。

パウロは是迄屢巡禮團が早朝の日光を浴びながら、叫びつ歌ひつ發つてゆくのを見たが、今度は自分も往くのであつた。他の人達は二三ヶ月して歸るであらうが、パウロは歸られず、幾歳も此大きな市、其河、船、其ユダヤ町、父の家を再び見ることは出來ないかも知れぬのであつた。

母親を驢馬に乘せ、天幕、筵、鍋、壜、食物、衣類、書物等、凡て長途の旅行に必要な品々は他の驢馬に負はせて、市壁の外の原に集つてゐるユダヤ人の騷しい群にパウロ等は加はつた。集つた者には赤、黃、綠、茶樣々の色の晴衣を着た老幼男と少數の婦人があつた。四百哩の長旅に朝早く發つて行くのを見送に來た人達も多く混つてゐた。旅に立つ連中は別を悲んではゐなかつた。後に殘されて

豐な祝福を受けることも能きぬ人達こそ氣毒なれ、行くことの出來て、多くの物を捧げ、遠く祭禮に列る爲に旅をする者に與へられる豐な祝福を受け得る彼等は幸福であつたのである。

道路は、平原を横切つて白い飾紐のやうに東へ曲折してゐた。巡禮團は歡の歌を高唱し、見送の人達に對つて綠葉の枝を打振るのであつた。一團は老幼貧富樣々の人から成つた奇妙なものであつた。杖をつき佩囊をかけ、ぼろ外套を着て、旅を何とも思はぬらしい老乞食、馬に乘つた金持の父に連れられて世界中一等の見物に往く、輕裝、黑髮の少年、澤山重荷を駱駝につけて自分は腰に長い刀を下げて歩いてエルサレム迄商賣に往く肩幅の廣い紫と白の頭巾を被た商人、と言つた樣々の人が、笑つたり話したりして、ほつ〳〵長蛇の陣を作つて行くのであつた。山や谷さては碧海の岸邊を歩いたり乘つたり、丸でエルサレムまで休暇旅行をしてゐるのだから暢氣なものであつた。

先づシドナス河の狹い危い橋を渡つて、多くの軍隊の踏んで通つた數石の羅馬街道を二十哩も進むと、夕陽傾く頃には、廣いサウラス河岸のアダナの町に近づく。第一日の旅路は、河から河まで來たので、其處に足を留めて天幕を張り一夜の夢を結ぶのであつた。

三〇　エルサレムへ

アダナ・十五歳から三十歳

町と言ふ町には、宿屋と言ふほどのものでは無かつたが、旅人の宿る家は有つた。其は廣場を厚い壁で圍んだもので、弓狀廊に隱れて僅に雨露を凌ぐ位のものであつた。時には外階梯で上れる二階が有つたが、其に宿泊するには料金が要つた。此圍の眞中に深い井土が有つて、家畜の爲に石の水槽が備へてあつた。厚い周壁には低い弓狀門が只一個有る丈けだから夜其を閉塞すると、旅人は、其中で火を焚いたり馬に水を遣つたりして、泥棒に襲はれることも無く安全に宿ることが能きたのである。若し人數が少なければ、馬、駱駝、驢馬などの重荷を下してやつて馬小屋になつてゐる廊に繫いで休ませた。然し人が一杯な時は、獸類は庭に横はり、人々は廊の中や二階座敷に、能る丈け心持良くして宿つた。道具は何も備へて無い。始終人が變つてゐるのだから各自自分の鍋、皿、筵を持參して、自分で火を焚かなければならなかつた。

タルソの巡禮團も一部の人々は斯樣な宿舍に行つて能る丈け良い場所を取つたらうが、また安全なやうに可成市壁に近く露營を張つた連中も有つたであらう。そこでパウロの樣子を想像して見ると、彼は驢馬の荷を下してやつて、柱を立て、廣い天幕を振るひ、父に手傳つて貫つて柱の上に其を擴げ、天幕杭を打込み、繩を引張つて、ピンと天幕を張る。其間に母親は赤や黃の草の筵を垂して、後の婦人席と前の男子席とを區切る。それからパウロは母を手傳つて木片を集めて火を焚く。母は鍋や壜を荷物から引出して、驢て夫や息子の爲に夕飯の用意をするのであつた。太陽がタルソの後の薔薇色の

山に陰れて、屋が葦榮色の空に閉く頃には、親子三人の家族は一緒に夕の祈を唱へ、天幕の入口を締めて、小さな油燈の火影に、寢に付く準備をして居るのであつた。東の山に赤い曙光が輝く前には既う起出でて、再た旅程に立つ用意をして置かなければならぬのである。

パウロは、イエスが既に上り給うたやうに、家鄉遠く、色々聽きもし考へもした彼の大きな市へと上つて行くのであつた。然も兩者の行き方は大いに違つてゐた。イエスは聖き子供で、神に伴はれて行き給うた。パウロは十六の青年、規則や法規や傳說で昏迷つて、暗くなつた心を持ち、神を求めながら而も遠くの方に神を眺めながら行つたのである。

イエスは既に神殿に往つて來給うた。既に成人の域に達せんとして、ガリラヤの綠の谷間にあつて大工の職を習ひ、パウロが自分で考へてはならぬと敎へられた聖書の章句に就て考を廻らし、或は眞紅の花に、黃金色の畑に多の敎訓を記してゆく四期の運行に注目し、或は自分の周圍に在る子等卽ち天父の王國の子等を眺めつゝ居給うた。イエスは兩親の望に從順に幾度も歸つて來はし給うたであらうが、而も豫期するやうに敎へられた何物も神殿に見出し給ふ事は能きなかつた。

パウロは、神は神殿に住み給ふ、神を正しく拜することの出來るのは、神殿ばかりであると眞面目に信じて往つた。イエスは左樣でないと知つて居給うた。パウロは、モーセの律法全體、傳說全部を知つて守る者ばかりが、善い生涯を送るのだと信じてゐた。イエスも同じやうに敎へられたが、其を怪

み給うた。

二人は各違つた道を歩いてゐた。イエスは神の道を、パウロは人の道を歩いて彼の教師に課せられた無數の規則慣例に從ふことによつて、完全に達しやうと言ふ日々益增加する努力に喘いでゐた。二人はエルサレムで、神殿で出會したことが有るであらうか。若し二人が會つて、話したら、如何に大きな急激な變化がパウロに起つたことであらうぞ。然し其は、パウロが長い歲月無益に、增しに增して行く學問の苦い經驗をする迄は來なかつたのである。

三一　シリヤの門を潛りて

シリヤ・十五歲から三十歲

酸ぱい牛乳、薄いスコン、卵、炒つた麥、果物、食油などのさゝやかな朝食を食るが早いか、パウロ等は、大急に未だほの暗い頃、もう天幕を疊むで、諸道具を括つて驢馬に付ける。軈て巡禮團は、昇る太陽に輝く向ふの高い山々を仰ぎながら、廣いサウラス河に架つてゐる長い石橋を渡つて行く。其日の旅程も亦、綠草に蔽はれ、燃ゆるやうな頭を擡げた罌粟や金盞草に飾られた綠い平野と、牛も突破り得ぬやうな厚い茨の生籬を周した赤茶色の畑の間を通つて行くのであつた。

晝近くなる頃には、底い丘陵の間の明るい谷を進む。兩側の高い岩の上には、茶色した鹿どもが、

氣輕さうに跳んでゐる。正午には、森の陰に一二時間休息して晝食を認めた。午後再た歩き出す。前のよりも廣く深い河の邊に在る町に來て第二日の旅を終へ、天幕を張つて、焚火をするのである。

如斯して每日々々、巡禮隊は、破れた敷石道を徐ろに進んで行つた。道は昔からエジプト、マケドニア、ペルシヤ、シリヤ、ギリシヤ、ローマ等多くの國々の軍隊が通過して踏荒したもので、此後暫くして、常勝の土其古軍が此處を通過したのである。東洋と西洋の諸國に通ずる大街道で、商人達の駱駝は、夏冬無しに始終往來し、閃く武具に身を固めた軍隊や、慘酷な親方に追はれて往く疲れた、足を痛めた奴隷達の團隊も通つた。

其他に、此道を知つて居る者が有つた。其は山賊共で山の巖窟に住つてゐて、不意に護りの無い旅人達を襲うては再た山の中に遁込む連中であつた。夜は夜で、狼や鬣狗が出る。時には獅子や虎の出ることも有つて、人數が少いと見ると、旅人達を襲擊したものである。そこで巡禮達は隊を組んで往つた。また時には、戟の上手な部落の人々を傭うて、山賊の用心をして通らなければならなかつた。ボウロ等の一隊は大きかつたので、野獸や山賊を恐がることも要らなかつたであらう。而して每日沿道の町村から加はるユダヤ人で、愈數を增加へ、愉快な歌聲は、往くに隨つて益大聲になつたことであらう。

四日目になると、青い地中海の一端にある大きな灣を曲つた處で、海岸近く立つ。さうすれば既う

パレスチナとエルサレムに面を向けてゐるのである。前には高い山々が、海の端から遠き内地へと段々上りに高くなつてをる。彼等は此處から、自分の國のキリキヤとシリヤの國との國境になつてゐる所謂シリヤの門てふ狹い難路へと曲折ねつた道を上つて行かなければならなかつた。後顧つて見ると海灣の彼岸廣野の盡くる處、黑い丘峻の麓に、タルソの屋根や樹木を遙に眺めることが能る。シリヤに侵入する軍隊は此道から進んだのである。愈此を通り越すと、パウロは、自分の少年時代の境界であつた山々を出て反對の側に初めて立つのであつた。

彼等は丘の上に建てられた古い大きなアンテオケ市を通過した。其はシリヤの首府で、四周は四方敵を防禦する爲に造られた厚い石垣で圍まれてゐた。パウロは此市に、タルソよりも立派な、大理石輝ける神宮、劇場、浴場の有るのを見た、エルサレムのヘロデ大王が、此市に大路を造り其兩側に石柱を立て並べたほどであるから、勿論ユダヤ人も多くゐたに相違ない。パウロ等は又、此市に屬いたセルシヤの港を見たであらう。其處にはタルソの河岸よりは多くの檣や旗が群つてゐたことであらう

三二　初めてパレスチナへ

シリヤ・十五歳から三十歳

タルソの巡禮達は、此先、アンテオケから海岸傳ひに迂曲せる隊商道路を往くことも能き、直ぐ山

地に入つてダマスコの方に出ることも出來た。パウロ等は多分ダマスコの方に途を取り、其から懷しいパレスチナの國の中心へと、聖書を讀んで兼て承知して居る場所を通過して行つたであらう。パウロの記憶は新に、豫期は鋭かつた。父はユダヤ人の歴史を目前に想起させるやうな山や丘、谷や森、流などを指示したことであらう。

ダマスコを後にしてからは、バシヤンの美しい森林を載せた丘陵地を進むので、パウロの父は小高い處に上つて、空の白雲の如く見えてをるヘルモンの雪を戴ける峯を指して、あれこそパウロが度々聞いた高い山である、こゝから既う父祖の土地になつたのだと彼に敎へたであらう。今自分等の立つてをる地方は、ナフタリ族に屬し、丘を越えて南の方に見ゆる限りが、卽ちモーセに約束せられた國土であるとも敎へたであらう。ヘルモン山から擴がつてをるレバノン山脈を示し、彼處にこそ、かの大きな香柏の森林が茂つてゐるのだと話したであらう。さうするとパウロは詩篇の句を想出して、眼を瞻りながら其を誦んだであらう。

義しきものは棕櫚の樹のごとく榮え、
レバノンの香柏のごとくそだつべし。
……その影はもろ〳〵の山をおほひ、
そのえだは神の香柏のごとくにてありき。

その樹はえだを海にまでのべ、その若枝を
河にまでのべたり……
ヱホバの樹とその植ゑたまへる
レバノンの香柏とは飽足りぬべし。
鳥はそのなかに巣をつくり、
鶴は松をその棲とせり。

バシャンからヨルダンの谿に沿うた地方の眺望は極めて廣々たるものであつた。父は彼方に見ゆる谷ガリラヤの丘陵や谿を指して、彼處には羅馬軍も容易に勝てぬ人民が、山道や巖窟に陰れてゐて、いつかは羅馬人を自分の土地から驅逐し得る時が來るとの望を失はないで居るのだと言ふことも話した。ナザレのことも話したかも知れぬが、其時は未だイエスはナザレの小村を取卷く山の外には聞えてゐなかつたのであるから、イエスの話は出なかつたに相違ない。

ユダヤ人の地を見渡したバウロの父の胸には、一種の感慨が滿ちたことであらう。今は王と言ふべき者は無かつた。ヘロデ大王はユダヤの最後の王には違なかつたが羅馬皇帝の許可を得て國を治めたに過ぎぬ。二十年許前彼が死んだ時、國は、彼の息子、アケラオ、ピリポ、アンテパスの三人に分與され、王と言ふ名は付いてゐたが羅馬の知事に過ぎなかつたのである。其うちのアケラオはユダとサ

マリヤを領したが、僅二年足らずで羅馬皇帝の怒に觸れて、フランスに流罪になつた。羅馬の將軍クイリナスが其後に知事として座つたが、人民の數を調べて稅を課しなどして隨分民を苦めた。ユダとサマリヤの古い喧嘩が復た持上つて、ある怨深いサマリヤ人等は、庭に死人の骨を撒きちらして、神殿を瀆し、ユダの人にとつては恐ろしい惡事を爲した。つい先頃、ユダヤ人の友であつたアウグスト帝崩じて、チベリアスの世となり、エルサレムの知事はアンニアス・ラフアスであつた。父は、自分達の國土は非常に不幸な現狀に在るが、元氣な人達は、羅馬人から救出される時は間も無く來ると望むでゐることなどパウロに話して聞かせた。但し實際は、ユダヤ人等はやがて前よりも一層非道く壓制されることになつたのである。

三三　綠の谿、茂れる山

バシャン・十五歳から三十歳

タルソの順禮隊は、エルサレムへの樂しい旅を續けて、バシャンの高地からヨルダン河の方へと下つて往つた。パウロが、父の指すを見ると、ゲネサレの湖は、裸の丘陵の間にずつと低く横はり、草木その起伏せる岸に生じ、漁船は碧い水の面に群つてゐる。父は其邊で有つた戰の話、その岸に建てられたチベリヤス、カイザリヤ等の羅馬の都市のこと、將に横切らんとするヨルダンこそ、ヨシユア

がイスラエルの人々を引卒して、モーセの言つた通りに、乳と蜜の流るゝ地に入つた時渡つた河であることなどをパウロに敎へるのであつた。

田舍道を通つて往くうち、パウロの眼には自然、小さな槲の木が茂つて頂上までも綠のタボル山の圓い姿が映つたであらう。そして、昔バラクとデボラが、ナフタリとゼブルンの人々一萬を集めて、鐵の軍車を驅つて此山を降り、カナン人シセラを打破つた話を聞かされたであらう。其向ふには廣いエスドラエロンの原が有つて、道路幾筋と無く通じ、白い村々や五穀の畑が散在してゐた。父は此處でも、此野で行はれた昔の戰爭の話をし、ギルボア山を指しては、パウロが名を貰つたかの大人物サウロ王が、戰に敗れて刀の柄を地に立てゝ自ら心臟を其刃に貫いて斃れた處だと敎へたに違ひない。

順禮隊はサマリヤ人の美しい國を通つて行かなかつたであらう。サマリヤ人とユダヤ人との不和は甚しいもので、エルサレムの祭に往かうとしてサマリヤ人に襲はれたユダヤ人は澤山有つた。それでパウロ等もヨルダンの東方を通つたであらう。けれども遠くセケムの廣い谷を眺め、ヤコブと其子等が、ヘブロンにある父イサクを訪ねて往く途中、其處に四年の間滯在したことを想起し、ヤコブの井土も、ヨセフの墓も其處に在ることを敎へられたであらう。ゲリジムの岩山を指しては、あれがエルサレムの神殿に競爭つて、サマリヤ人が神殿を建てゝゐた處であるが今は破壞されてゐるのだと敎へられたであらう。一隊が、樹木の多い深いヤボクの谷を横切り、ギレアドの美しい牧草地を通るとき

には、ヤコブが終夜、角力した場所も指示されたであらう。

ヨルダンの對岸、山々を籠めた青い霞の中には、ヤコブが天の使の天と地の間にかけられた梯子を登り下りしたのを夢みて、其處に石を建て、一生神に事へんとの約束をしたベテルの石原が有るのだとも敎へられたであらう。

ギレアドの高地を下つて、やがてヨルダンの淺瀨に近づき、彼岸にエリコの沃野を見る。パウロは是こそ千年の昔、ユダヤ人等が初めて約束の地に渡つた場所であると告げられたであらう。巡禮隊は歡聲を擧げながら河に馳つて、ユダヤ人が今も爲る通り、水を浴び且つ洗つて、何か水が奇妙不思議な力でも有るかのやうに振舞ふたであらう。パウロも初めてヨルダンに浸つて見て、深い峽谷に日陰された水の實に冷いことを知つたに違ひない。

彼等は既に自分達の屬するベニヤミン族の地に踏込んだのである。パウロの父の胸には、あらゆる山も谷も、流も町も、皆想出の種ならぬはない。街上に樹木立列ぶ此强い石垣の築かれたエリコの町これヨシュアの進軍喇叭の響に石垣の倒れたかの町ではないか。ギルガル、こゝに人民が來てダビデ王を迎へ、エルサレムの宮殿に凱旋したではないか。大預言者サムエルが住居して、青年達を敎へたのはラマではないか。サウロはミズパで位に即いたではないか。更に向ふの白い石灰石の山は、パウロの同族の人々六百人が、四ケ月も防戰した古跡でないか。孰の野も石も木も、皆自分が幼少の頃か

ら學んで來た不朽の宗教と勇ましさ行爲の歴史に織込まれてゐるのだと思へば懐しかつた。バウロの眼には、四方八方種々な英雄の像で一ぱいに塞がれてゐるやうに見えた。

三四　エルサレム見ゆ

エリコ・十五歳から三十歳

美しいエリコの町を出て行くと谷になる。其が漸次狹く嶮しくなつて、遂には深い、西側に高い岩壁の欹つ峽谷となる。彼等は今やユダの丘地へと登つて往くのである。其邊は泥棒のよく出る處で路の惡い危險な場所であつたが、然し巡禮者等は、今にオリブ山に上るのだ、其向ふにはエルサレムが見えるのだと勇んで進むのであつた。

山の頂上近くなるとバウロの父は、世界ぢう一等美しい光景が見えるぞとバウロに注意したであらう。バウロは己の國を愛し己の宗教に熱心な情からすれば、若し石垣でなくて、閃めく水晶の土臺の上に建ち、閃めく金の塔林立する天上の市が見えても更に驚かなかつたであらう。數歩にして山の嶺に既う來た。そしてエルサレムの市は燦爛として彼の前に浮上つた。やゝ低い丘の上に建てられた市は深い谷を隔てゝ、その石垣、尖塔、平屋根、殿堂、街衢、恰も地圖を擴げたやうに見えてゐる。バウロは燃ゆる眼に父を顧みて、あの向ふの金の飾釘で取卷かれた金葺の屋根が、聖い神殿の屋根でせう

と問ふのであつた。

オリブ山は左程高くは無かつた。で巡禮隊は、間も無く長蛇の如くケドロンの谷へと下つて往く。バウロは、殿堂や塔、人々の右往左往する街、それから、外庭内庭の段々に高くなつてゐる神殿の建物、殊に一等高所に立つてゐる金光眩き屋根を戴いた小さな方形の建物を、畏懼の眼を以て仰見た。一言でも其建物に付て惡く言へば死刑に會ふ程神聖なものであつたのである。

靜つと凝視めて居るうちに、バウロの頭にはタルソで習つた神殿の爲の祈禱や、暗記してゐる神殿の説明が浮んで來て、其に比べても、今眼前に見る榮光に滿つる觀物は、遙に聞きしに優り、讀みしに勝ると思つたであらう。バウロは、親達の中でも最嚴格な父に薫陶されたユダヤ青年であつた。隨て、此神殿を仰いで、言葉に言ひ表はせず、此上を望むことも出來ない程の立派さだと思はなければ惡いのだと思つたであらう。生徒に厚く信頼された教師の感化と言ふものは偉いもので、炎の如き第一印象に於て、眞實眞面目に、生徒は、話された通に見、刻付けられた通に感ずるのである。バウロは後になつて自分で觀察したり考へたりするやうになるのであるか、此時は未ださうでは無かつた。

市の方へと降り坂を行きながらバウロは順禮隊と共に山の上で神殿を始めて見た時に歌つた讃歌を繰返すのであつた。

シオンの山はきたの端たかくして

うるはしく、
喜悦を地にあまねくあたふ。
こゝは大なる王のみやこなり。

と、讃詠が變るとパウロは、綠の枝を新に振つて、若い友達と一緒に歌つた。

シオンの周圍をありき偏くめぐりて
その櫓をかぞへよ。その石垣に目をとめよ。
そのもろ〳〵の殿をみよ。
なんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり。
そは神はいや遠長にわれらの神にまして
われらを死るまでみちびきたまはん。

是より少し前に、ガリラヤの聖童イエスは、同じ詩篇を歌ひ、綠の枝を振りつゝ、此同じオリブ山の脊を越え給うたのである。彼の若き母とヨセフも共に。彼の黑味勝の兩眼は、エルサレムを望見て燃え立つたのである。彼の胸には、對ふの神殿内に立派なものを見ることが能るとの希望が滿ちてゐた。然るにイエスは、求めたものを其處に得なかつたのである。彼の父の家は祈禱の家では無かつた。故に二三週間にしてエルサレムを後にしたイエスの心は疑惑に閉されてゐたのである。

然しパウロは、自分の前に見る光景の中に、教へられてゐた通のものを見た。神殿の中にも、話されてゐた通のものを見た。彼はイエスの如く、不滿足の心を持つて二三週日の後此市を去らなかつた。來る歳月此處を鄕里として、神殿を主な出入所としたのである。

三五　街上の群衆

エルサレム・十五歳から三十歳

逾越節にエルサレムに集つた群集は、市に入り切れぬ程の大勢で、市外に天幕の假小屋を作つて滯在する者も多くあつた。タルソから來た順禮隊も、神殿と相對したオリブ山の山腹か、でなければ石垣に近い平坦な廣場に露營を張つたであらう。若しパウロの姉夫婦が、此市に住むでゐたとすれば彼は其家の客となつたであらう。こんな時には市内の家々は出來る丈けの知人を泊めるのが常であつた。市内の街と言ふ街は人を以て滿たされ、ケドロンの谷にまで溢れてゐた。パウロが橋を渡つて市の門に近づいた時、彼はダビデ王の愛した白い流を瞰下したであらう。

河あり、そのながれは
神のみやこをよろこばしめ
至上者のすみたまふ聖所をよろこばしむ。

父に連れられて低い弓狀門を潛り、厚い市の石垣を通り抜けると、狹い群衆した町に入つてゆく。そこにエジプト、アジヤ、アフリカ、ギリシヤ等から集つて來たユダヤ人を見たパウロは、詩篇の次の言葉を想起したに相違ない。

エルサレムよ、
われらの足はなんぢの門のうちにたてり。
……
もろ〳〵のやから……上りきたり……
エホバの名にかんしやをなす。
……
エルサレムのために平安をいのれ、
エルサレムを愛する者は榮ゆべし。
ねがはくはなんちの石垣のうちに平安あり。
なんぢの諸殿のうちに福祉あらんことを。

またパウロ等が長い旅行中歌つたうちには次のやうな進行の歌の一節が有つた。

あゝ神よ、しかの溪水をしたひ喘ぐがごとく

わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり。
われむかし群をなして祭日をまもる
衆人とともにゆき
歡喜と讃美のこゑをあげて
かれらを神の家にともなへり。

エルサレムに於ける最初の朝、パウロは疾く起出でて、モリア山上の神殿の石垣の上で、新なる禮拜の日明けたりと市民に警告る祭司の銀の喇叭三聲吹立てられるのを聞いたであらう。其時二十人の手の要る神殿の門扉は徐ろに開かれ、やがて朝の犧牲が、祭司の庭の、粗い石の大きな白い祭壇の上で燒かれるのであつた。彼の顏を神殿の方向に向け、恐らくその眼を金の屋根に注ぎつゝ、パウロは朝の祈禱を誦し、遠いタルソでは到底感じることの出來なかつた近しい感想を持つたことであらう。

狹い町を通つて父と共に出掛けたパウロの足は輕く、心は喜に滿ちてゐた。聖書に次の如く書いてあるではないか、

萬軍のエホバよ、なんぢの帷幄はいかに
愛すべきかな。わが靈魂はたえいるばかりに
エホバの大庭をしたひ、

わが心わが身は、いける神に向ひて呼ふ。
誠やすゞめは窩をえ、燕子は
その雛をいるゝ巣をえたり萬軍の
エホバわが王わが神よ。これ汝の祭壇なり。
なんぢの家にすむものは福ひなり。
かゝる人は常に汝をたゝへまつらん。
……
われは惡の幕屋にをらんよりは、
むしろわが神のいへの
門守とならんことを欲ふなり。

美しい色に染つた晴衣を着た禮拜者達の群に隨いてパウロも急な街を上り、大きな白い石段を踏んで、華美に飾られた屋根の陰、彩色された大理石の圓柱廊へと入つて行つた。パウロの眼に映つたのは、第一の大庭であつた。彩色した敷石の上は、あらゆる國々から集つた參詣者で一ぱいであつた。ユダヤ人でなくとも、神を信ずる人なら其處に入ることを許されてゐたのである。然し羊や牛を賣つてゐる屠殺者等は隨分八ヶ間敷かつた。隣合つて柳製の鳥籠を持つた鳥屋や、貨幣の臺を置いた兩替

屋などが居て、賣つたり買つたり、取引したり詐し合つたりしてゐた。太陽は右往左往する人々を照してゐた。庭は青天井の下にあつて、三方に列る圓柱の歩廊に丈け、屋根が有つて、暑い時の日陰、降雨の時の雨宿となつてゐたのである。

三六　神殿の庭にて

エルサレム・十五歳から三十歳

生れて初めてパウロは跣足で、神殿の色のついた敷石の上に立つて見た。彼は今迄、如斯な群衆の中に入つたことも、斯樣な美しい圓柱も是程多くの白衣の祭司もこんな多くの鳥、獸群、鳥籠も、金錢の山も未だ見たことが無かつた。上には更に白い石段が有つて、また圓柱廊が有り、更に其上に、金の屋根と飾釘を戴き、祭司の他見ることの能きぬ青い幔幕の垂れた聖所が立つてゐた。

其石段の方に進むと、大凡人間の高さで、飾のついた大理石の低い垣が有つて所々穴が開いてゐた。其中に入つてゆく前に、パウロ等は、兩側に立てられた小さな柱にギリシャ語とラテン語とで彫付けてある「異邦人是より入るべからず。入る者は死刑とす」と言ふ禁制を讀んだ。パウロは此處を通つた時、後には此處で死ぬ目に遇ふ日が有るとは夢にも豫想しなかつたのである。

石段を登つて圓柱の間をぬけると第二の庭に入る。其時コリントからの有名な輝く眞鍮の美の門を

見る。入れば即ち婦人の庭であつて矢張青天井、此處から奥には母親は入ることができぬのである。

此庭を過ぎて更に楷段を上り更に美しい圓柱を拔け、金銀に飾られたニカノル門を入ると其處は男子及祭司の庭である。こゝに鑿も鎚も加へられない自然石の大きな白い祭壇が有つて、それから消えぬ火の青い煙が一條立ち昇つてゐる。そこらを歩いて見ると、羊を屠る大理石の臺、其血を受ける金銀の鉢、海と呼ばれて祭司が身を洗清める爲に用ゐられる十二の眞鍮製の獅子に乘つた花形の大水盤などがパウロの眼に入つた。

而も一層高い處があつて、青年パウロは其前に立つて畏れ多さに頭も上らなかつた。是が輝く聖所で大きな石材は金を以て被はれ、白大理石の圓柱は金の屋根を支へてゐる。金の扉の前に、紺、赤、紫、白の色糸で織られた緞帳が垂れ、其後にはパウロが見るも物體ないと思つた聖器が置かれてあつた。パウロは父の側に蹲いて、其緞帳の中に住み給ふと信じた大なる見えざる神にと祈つた時に胸が波打つた。そして父親が、教法師達が學生を教へてゐる庭の一隅の切石の部屋を指し教へても耳に入らぬ程であつたらう。

若いパリサイ人の純白の衣、縞の巾を着て、跣足で熱い彩色した敷石を踏んで歸つて來る我子を見ると、母親は、彼の緊張した面貌に、彼女の一生見ることの出來ぬものを見て來て深く感動した樣子の顯はれてゐるのを見た。我子は最早や我手を離れたのである。他の頭が、然り、上の庭で見るから

に純潔な白衣を纏ふて祭事を取り行ふてゐる靜な祭司達の頭が、是から先、我心に慈しんだ此若き者の生涯を作ゐるのであらう。

タルソから來た連れの者達と一緒になつて、其處らを見物して歩いた。父はパウロに、圓柱の數や石の大さやレバノンの洋杉で造つた梁や、祭司、祭司を助けるレビ人、兵士のやうな番人の各自の住居などを教へた。そこには衣裝、食物、燈臺、蠟燭、油、酒、鹽、其他毎日入要な品々を仕舞つて置く藏も有つた。パウロはまた、此神殿を造營するのには既に四十年を費して、未だ完成はしてゐないのだと教へられたであらう。此處の金庫は金銀財寶を貯藏して置くのには全國一等の安全な場所で其中には昔から富祐なユダヤ人達の奉納した献物、外國の諸王が贈つた金の器物、世界各所のユダヤ人等が送つて寄した金銀の山が貯つてあるのだとも教はつたであらう。見ればそこの戸の側に、喇叭口の付いた賽錢箱が列んでゐて、皆が金錢を掴んで投込んでゐる。パウロも初めての賽錢を投入れて、其が中の山の上に音を立てゝ落ちて行くのを聞いたことであらう。

三七　神殿の一日

エルサレム・十五歳から三十歳

漸次晝になつて來ても、神殿の庭に集つた群衆の數は減らなかつた。出る人が有れば、新しく入る

人が有る。白衣の祭司達は、捧献物を受取つたり、ユダヤの宗教法によつて多くの祭事を行ふのに忙しかつた。パウロが我に返つたとき、彼の注意を最強く惹いたものは、羔や金を捧げてをる田舎の人々や祝福をして貰ふ爲に嬰兒を携へて來る若い母親達ではなくて、各入口に近い圓柱廊や僧堂で、人々が教法師達の教に耳を傾けてゐる光景であつた。パウロはとある圓柱の側に立つて暫く其に耳を欹て、更に他の人の話すのを聞くべく前にのり出していつた。時には、其聲が強く量豐富で、日の照つてゐる庭の方まで響き亘ることもあれば、また弱い震へた白髪の老人の聲であることも有つた。そんなのは大低神殿附の大教法師達であつたので、人々は聽洩さじと耳に手を當てるのであつた。

パウロは背伸びして、石の高座に座つてをる老人達を見ることができた。其足下には、弟子達が圓座を作つて靜に傾聽してゐた。老人達は思ひ〳〵に、通りの良いズラズラ辯で、通り掛りの人々に說教してゐた。彼等は何も新しいことは、言ふのを禁じられてゐたので、言はなかつた。たゞ昔からの大教法師達が、律法や傳說に就て教へて置た通りを反覆して、智惠の言に耳を傾けよと人々に呼はつてゐるのであつた。

我がタルソの青年は、奇麗な頭巾を清い黑眼の上深く戴いて、直ぐ出ることの出來るやうにあまり深入せず、群衆の外側をぶらつきながら、タルソで教はつたと同じことを多く聞いて歩いた。歩き歩いていつの間にか大きな庭の三方を一巡したころには、何も疑はずに傾聽はしたものゝ、教法師達の

學問の洪水に、いくらか惱まされたことであらう。

かのガリラヤの聖童が、晴着をつけて、赤い頰、つや〳〵した茶色の頭髪をして逾越節に上つて來て、群衆の中に入込んで兩親と別れたのは、僅數年前であつた。彼は說教者等の聲に引かれて、圓柱を拔け弓狀門を潛つて甲の教法師から乙の教法師へと、今迄發見することの出來なかつたものを求め、未だ聞かなかつたことを聽かうと歩き廻つた。彼は三日も歩いたが、たゞ心惑ひ煩ふばかりであつた。彼は教法師の言つたことを信ずることが出來ず、彼等が人々に眞實ならぬ事を教へて居るのを見て憂ひたのである。彼は、或老つた教師に進んで簡單な質問を試みたが、教師は彼に答へることが出來なかつた。益質問の矢を放つてゐるところに、喜し相な心配相な母親の顏が見えたので、母に連れられて金の神殿を去つた。それより彼の純白な生命の中には、神殿に行はれてゐる物事に對する疑問と不快の感が、愈大きく展開つて行つたのである。

そのイエスは、もう青年で、ガリラヤで大工をして居られた。然し是から僅の年數を經たならば、彼の聲は再び圓柱の間に聞え、此大庭に集つた幾千の人々の頭上に鳴響く筈であつたのである。パウロはその單純な問と賢い答で教法師達を驚かしたガリラヤ少年のことを此時聞きは爲なかつたであらう。パウロはイエスと異つて發すべき質問を持たなかつた。群衆の眞中に押入つて行くほどの燃ゆる驚畏を感じなかつた。パウロの疑問は未だ遠くの方に在つた。然し炎の如く貫き火の如く燒くナザレ

の大工の言に刺戟されて、愕然として疑問の爆發する日が來るのである。此日彼は神の言でなく人の言を談る教師達の足下に脆拜して滿足してゐた。彼の兩親も彼が長い時間聽衆の中に交つて居るのを不思議とも思はなかつた。

夕の紅の影が金の屋根に愈濃くなり、祭司の警告の喇叭が神殿の大門一つ〳〵閉ぢらるゝことを告げるまで、パウロは、是こそ神の家なれと仰ぐ神殿の圓柱や弓狀門の邊を去らなかつた。

三八　老法教師ガマリエル

エルサレム・十五歳から三十歳

サマリヤの山々に掛る紅の幕に太陽が隱れて、神殿に於けるパウロの長い最初の日も暮れた。パウロは朝の犧牲から立ちのぼつた青い煙が、また夕雲の赤らむ前に空に流れてゆくのを見た。パウロは金の諸門が開けられて再た閉ぢられるまでの一日が、單の一時間の如く思はれた。そして彼の熱望は滿足せられたのである。是迄彼は神殿の庭のことを歌にうたつてゐたのであるが、今日は自ら其庭に自分の足で立つたのである。是迄は其處に集ふ群衆のことを暗誦してゐたのであるが、今日は自身も其中に混つたのである。是迄は面を神殿の方に向けて、遠く隔れたタルソで禮拜してゐたのだが、今日は境内に入つて禮拜したのである。されば宿に歸つて行くときパウロの頭は興奮の渦が卷き、胸

は絶美なる喜悅に滿たされてゐた。

毎日々々パウロは疾い朝陽を浴びながらモリヤの山に登つて凝視め驚畏き拜脆んで、青銅色の棕梠の樹蔭が地に長くなつてゆく夕方には、聖所の壯麗と神秘に益深い感銘を受けて歸つて行くのであつた。彼は此等の白壁の蔭に學生生活をして、或は拜し或は學び、後になつては、此建物の一個々々の石も知つて居る、愛して居る、其圍の中で行はれることは何でも熟知して居ると言ふことの可能るやうにと、遙々タルソから來たのである。青年の熱心は無限である。若い時には何でも可能るやうに思ふ。我が黃金道を未來に横へて、凱旋將軍の如く易々として旅するつもりである。或青年は自分を音樂の天才の位に据ゑ、或青年は人々の指導者、或者は科學の泰斗、或者は夢想も及ばぬ程の富豪たるべく考へて居る。パウロも、自分はもう教法師になつて、神殿の廊柱の間に、彩色した敷物の上に座を構へ、代々の教から引用される言に耳傾け、彼の驚嘆すべき智識に茫然たる群衆に取卷かれて居るつもりになつてゐた。たゞし人の一生には、時に他の人の生涯に出會して。豫定の進路を一變することが有る。パウロの場合も、やがて左樣なるのであつた。

パウロの師として選むべき教法師はエルサレムに多く有つたが、後世に其名の傳へられたのは殆ど無い。パウロの父は、是非嚴格なパリサイ人を探して、我子にはパリサイ派の規則や信仰を教へて貰ひサドカイに成らぬやうに注意してやつて欲しいものだと思つたであらう。其選に當つたのはガマリ

エルと言ふ教法師で、彼は中老の律法に精しい博士で、人々の尊敬厚く、大教法師と稱ばれてゐた。彼は教法師シメオンの子で、かの學識最深く、而も親切で慈悲心に富んでゐた爲に名高かつた教法師ヒレルの孫で、其慈悲心は祖父から繼承いでゐたやうであつた。

教法師ヒレルの教には非常に立派なのが有る。一例を擧げると、「汝の嫌ひなことは隣人にも爲るな是れ律法の全體であつて、凡て他のことは其適用に過ぎぬ」、また曰く「律法を知る者は未來の生命を得たのである。」

ガマリエルは嚴格なパリサイ人であつたが、決して無慈悲では無かつた。是からずつと後のこと、ペテロがユダヤ高等法院の前に立つてイエスに就て證言する時に、ペテロは神からの告を持つて居るかも知れぬと言つて、彼に發言を許可したのはガマリエルであつた。周圍の人々とは違つて優しかつた此教師は非常に長壽を保つたと言ふことであるから、彼自身の生徒パウロが後になつて教へられた規則や律法を破つた爲に、高等法院の裁判を受けた時には、彼も其席に列してゐて心の痛を覺えたことであらう。

三九　白き羔を殺して

エルサレム・十五歳から三十歳

教法師ガマリエルは教法師ヒレルの教義に隨つた寛宏な教法師達に屬してゐたが、當時他に狹い酷しい一派の教法師達が有つた。彼等は是も餘程前に亡くなつてゐた教法師サムマイの嚴酷な教義を守つてゐた。サムマイは弟子達の爲に多の規則を作つて置いた爲に「束縛する者」と云ふ異名を貰つてゐた。反之親切だつたヒレルは「解放する者」と稱ばれてゐたのである。

ガマリエルの教義を創めた此老教法師ヒレルは荷物を擔いで歩く人足であつた。彼が子供の時には非常に貧困で、ある冬の日、先生の處に持つて行かねばならぬ僅の金錢が無かつたので、家に歸つて行くのも嫌だし、學校の窓に匍ひ上つて、勿論硝子は嵌つてゐないのであるから、先生の講義を狐鼠り聽いてゐた。雪が降つてゐたのでブル〳〵震へながら耳を傾けてゐると、先生は不圖彼に目を止めて、彼を呼入れ、火に暖らせたと言ふ話がある。

白髮のガマリエルは、パウロの父が、輝かしい眼をした息子を連れて來て、此子は實に善い子供でタルソの會堂學校では一番でした。是非先生に就けて、教師にして貰ひたいものですと申入れるのを微笑々々しながら聽いたことであらう。其時パウロは黑眼を瞠つて、ゆるやかに垂れた衣を纏ひ雪白の頭巾を被た老教法師の重々しい顏を正視して立つたであらう。是からガマリエルの教の言はパウロに執つては聖書の言ほど神聖に聞えるやうになつたのである。

逾越節が本統に始まるまでには未だ日數が有つた。其間にパウロは種々なことを聞いた。教法師達

は、凡てのユダヤ人、殊にエルサレムから七里以内に住んで居る者は、毎年此祭日に列しなければならぬ。婦人も子供も來て可い。來る時には一等の晴衣を着て、捧物を持つて喜んで來ねばならぬと敎へてゐた。死人を埋葬したり、墓を掃除したりする事は、一ヶ月前に了へて來なければならぬ。屍體や墓に一ヶ月以内に手を觸れて來た參詣人は不淨であるから祭禮に加はる資格が無い。順禮の通る道路や橋梁は修繕して置かねばならぬ。牧羊者や百姓は羊や牛の什分の一を献げねばならぬ。其には羊や牛を門を通らせて、十頭目毎に、赤繪具の付いた棒で觸つて記をつけ、記の付いた分を祭司の處に持つて來るのであるなどと敎へてゐた。

バウロは復た、死骸の側に居たり、嬰兒を産んだり、癩病を癒されたりした人達は、十四日前に神殿に來て祭司に其由を告げ、犧牲を捧げ、齋戒沐浴して、献物をなし、其によつて淨められたと言ふ宣告を受けて神庭の參詣人の群に加はる許可を得なければならぬ。誰でも利未記の律法に照して不淨な者は神殿に入ることは出來ないのだと言ふことも聞いた。エジプトで守られた最初の逾越節の昔話は再三再四聞かされた。敎法師の中には、春が來て芽が出たり花が咲いたり、神の雨と日光とが、黑い土から五穀を萠出させたり綠葉を樹の枝にゆら〳〵させたりする丈けでも、今は樂しい時であると說いた者も有つたであらう。子供達の中には、大昔エジプトでイスラエル人に起つた事件よりも一層此方が尤のやうに感じたのも有つたであらう。

祭禮は滿月の日に行はれた。其日の近づくに隨つて、バウロは非常な群衆が市に、市壁外の露營にオリブ山腹に溢れてくるのを見て、どうして此多の人間が神殿の中に皆入ることが出來るのだろうと怪んだ。其上に羊の群や牛群は數へることも不可能ほどであつた。

愈逾越節の前夜になると、バウロは父と共に神殿に行つて、自分達の捧げる小さな白い羔を祭司に檢査して貰つた。見ると、圓柱も壁も、數物毛氈さては極彩色の幔幕などを垂して美しく飾つてある。夕陽が西海に沒せんとする頃、バウロは四方の門を閉ぢた祭司の庭の中に大群衆と共に立つて、日入と暗夜との境の時の來るのを靜に待つてゐた。遂に銀の喇叭が鳴響いて、閃く刄が振上げられ、人々が肩にかけて持つて來た幾千の羔が屠られる、さうすると立列んでをる祭司達は、金銀の鉢に其血を掬取つて、甲から乙に手渡して、大祭壇の處まで運び其を赤い瀧の如く祭壇の根元に灌ぐ。我々から見れば恐ろしい厭ふべきことであるが、其時の人達は、是によつて神を悅ばすのだと思つてゐた。羔の悲鳴の音よりも聲高く、婦人の庭の白い石段に立つて歌ふレビ唱歌隊の讃詠が起り、句切り〳〵に會衆は聲を揃へて、「御神に榮譽あれ」と叫んだ。

羔は手早く皮を剝がれ、金の鈎に掛けられて切斷され、祭司は其一部を取つて是を祭壇の上で燒き、殘は捧げた者が貰つて家に持歸り、逾越節の晩餐に供するのであつた。庭を出ると、また數千の人が入らうとして群集してゐる。入替ると忽ちまた羔を携へた群衆で一杯になる。かくて殺すことと歌ふ

こととが、最後の人が羔を肩にして市に降り、其を燒いて妻子と共に食ふまで續くのであつた。其晩殺される羔の數は約二十五萬に上つたので、庭の大理石の床は、恐ろしく血に染つて、洗清めるには澤山の水の要つたことであらう。

バウロは屠殺を恐ろしい事とも、偶像教の神宮に似たことだとも思はず、却て喜んで、エルサレムに於ける初めての逾越節の晩餐を味つたであらう。彼の母も、息子が大逾越節の宵に神殿に詣でゝ、婦人には見られぬ處まで見て來たことを悅んだであらう。勿論かゝる光景は男子でなくば堪えられぬことで、祭司達でなくては守れぬことであつた。此祭事は、式を司る一萬の祭司及レビ人には大儲であつたのである。然し是は野蠻な惡事である。大祭壇に獸の肉を積上げるよりも、神の旨を忠實に行ふ謙遜な奉仕の生涯の方が、神に對する遙に善い獻物であると信じた人々も有つた。そしてイエスが此事を此神殿の庭で同じ祭禮のときに宣傳する日が將に來らんとしてゐたのである。

其晩バウロは、月の光に照された徇を神殿へと往復ふ人々の騷で眠れなかつた。庭の血が洗清められるや諸門再び開かれ燈火は點ぜられ、人々は再び來つて心に滿つる歡喜を以て祭司に贈物をした。其贈物は、感謝の獻物と呼ばれてゐたのである。

神殿は終夜群衆してゐた。星は、屠殺、血、屋根無き庭に燃ゆる火の上に瞬いた。黃色い曙がモアブの山々の端から覗く頃になつて、神殿の燈火は眠み、蠟燭の煙濃くなつても、まだ、殺すこと燒くこと食ふことは續いてゐた。其は、全體の人が犧牲をさゝげ贈物をする機會を得るやうに翌日も全日繼續されるのであつた。祭司達は其を短く切上げる積りは無かつたのである。

四〇　初穗一束

エルサレム・十五歲から三十歲

其樣に澤山の羔や牛が殺されたならば、神殿を如何して清めることが可能るかと審しまれやうが、其夜には、千を以て數ふる祭司、レビ人、下役の者達が其に從事してゐたのであるから人手は充分であつた。また洗水は、ヘブロンの遠い山間からソロモン王の水道を通つて澤山來たので、敷石は清潔に洗滌され、汚水はケドロンの小川に流落されたのである。

逾越節の次には無酵パンの節が七日間守られた。是はイスラエル人がエジプトを遁走する時に、パンを燒く時間が無かつたので酵の入らないパンを食べた例に習うたのである。敎法師の敎は仲々八ケ間敷くつて、酵が少しでも飛込んではならぬから、婦人達は粉を被をした臼で引き、水も被をした器に入れて運ばなければならぬ。愈燒く前には、鐵鍋を眞赤に熱して清めた上で用ゐなければならぬと言つた。出來た無酵パンは新しい皿に裝ひ其を喰ふ者は先づ散髮し爪を剪り沐浴しなければならぬ。敎法師の敎であるからバウロも其通にしたであらう。敎法師等はパンを燒いて其小さな薄い一片を喰

ふ仕方にまで關渉して隨分面倒な手數を人々の上に課したものである。然し人々が其教通り實行してゐたかどうかは疑問である。

其日パウロは麥の初穗の束が刈られるのを見た。其夕高等法院の議員達は、右の手に鎌を持ち、左の腕に柳籠を携へて、ケドロンの橋を渡り、對岸の黄色い麥畑に往つた。さうして赤い太陽が西に沈むのを待つた。彼等は人々を顧みて尋ねた。

「太陽は沒したか」

「沒した」と人々は答へる。

「此籠に……」と白い柳籠を揚げると、

「よし」と人々が叫ぶ。

「此安息日に……」

「よし」と再た聲高に應へる。

「刈入れて可いか」と鎌を上げる。

「よし」と更に高聲の叫が起る。

そこで老人達は、奇麗に束ねられた麥の三束ある處に進んで、是を刈り、三個の白い籠に入れる。

茲に於て一同歡の叫を擧げ歌を唱ひながら市に入り神殿に上つて穀粒を打ち、粉に磨き、油を加へて

金の皿で燒くのであつた。

翌日、奇態な式によつて其が獻げられる。先づ其聖いパンを金の皿に盛り、乳香が振りかけられる。そして一人の男が祭壇の側に立つて居る祭司の前に捧げる。祭司は其男の手を取つて、皿を四方に搖り動かし、而して皿を受取り一握のパンを火に投じる。是を搖祭と云つた。こんな事を爲る位なら麥穗を束のまゝで祭壇に投じて、暫く神庭を照す焔を上げさせた方が遙に奇麗であつたらう。然しパウロに執つては凡て壯嚴に見えた。教法師等が、此奇態な式によらなければならぬと教へたのであるから其で難有いのだと思つてゐた。尤も諸君が、パウロに、其樣なことが何の役に立つのだと訊いたらパウロも一寸返事に困つたかも知れぬ。兎に角此搖祭が濟む迄は新粉でパンを燒くことは許されなかつた。之が濟むと街は、パン屋の呼賣の景氣好い聲で賑はつた。パン屋達は其年の麥で作へたパンを用意して、神殿から合圖のあるのを待構へてゐたのである。

其から三日の間は、田舍から來た人達は、諸方の市で賣買した。各商店では一年中で一等多く賣買が有つて隨分儲けたものである。

四一　朝の犧牲

エルサレム・十五歳から三十歳

エルサレム市の内外に住んでゐる祭司の數は二萬、其に殆同數のレビ人、小使、神殿附の兵隊が有つた。レビ人は唱歌隊、音樂隊、門衛、雜役を務め、レビ人と祭司とを一緒にして二十四組に別ち、各組に一人の祭司長を載いてゐた。そして大祭の時は皆多忙であつたが其外の時は一組が一年に二週間宛受持つことになつてゐたので大して忙しくは無かつた。

毎夜、群衆が神殿を出て、外圍の諸門が閉ぢられると祭司達は集合して、其夜を守る人々に鍵が渡された。敷石や器具を洗ひ淨めて翌日の準備が整ふと、內部の諸門が閉ぢられ、諸の鍵は大理石の石板の下に陰され、一人の祭司が其石板に接吻して、其上に臥るのである。其時祭司、レビ人、及び市人から成る夜番が、高い石垣の上と、其下の陰れ場とに配置される。此廣大な場所に、一つの物音も靜肅を亂さなかつたと報告しなければならぬので、番人自身も終夜默つてゐなければならなかつた。

毎朝、丁度夜の明ける前、番兵の隊長と祭司達とは、鍵を執り、炬火をつけて各門を廻り、何も觸らなかつたか檢査をする。其間に、他の祭司等は、沐浴し衣裝をつけ、闕を引いて其日の祭司長を定める。でないと誰が頭に成るかで喧嘩が始まるのである。喇叭三聲の合圖と共に、唱歌隊、音樂隊、祭司等は各其任所に就く。石垣の上の夜番等は東の空を眺める。祭司の長は傾斜した敷石を上つて、周圍に美しい赤い線のついた白く洗はれた大祭壇に進み、常世に消えることの無い火の燻つてゐるのを攪き立てる。彼から遠からぬ所に、下役の手で水の滿された眞鍮の水盤が有る。

ほの暗い中から石垣の塔に居る番人の聲が聞えて來る。

「朝は既に輝き初めた」

「天空はヘブロンの邊までも照されたか」と云ふ問が下の庭から發せられる。

「天空はヘブロンの邊までも隅なく照された」と答へる。

一匹の羔が引出されて、祭壇の金の環に繫がれる。すると命令一下、外郭の諸門は開かれ、三聲の喇叭、市上に響き亘る。次に內郭の諸門開かれ、羔は殺されて、其血が白い祭壇の側面に洒ぎかけられる。そして屍體が壇上で燃されると、人々は神殿に入ることが出來るのであつた。

バウロも神殿に詣でゝ見て居ると、祭司達は白い大理石の石段を踏んで金光眩き聖所へと登り、美しい帳の後に陰れ、燈明臺の火を直し小祭壇の火を整へて再び後退りに出て來た。他の祭司等は燒香の銀皿と炭火の金皿とを捧げて上つて行つた。また大銅鑼が鳴つて、祭司等や人々を集めて居るのが聞えた。祭司長が合圖をすると會衆は手を差伸べたまゝ敷石の上に脆き、頭を垂れて祈禱の態度になる。そこに祭司等が幔の後に入つて、赤く熾つた炭火に香を投じ、好い薫の煙が雲の如く聖所一ぱいに充ちるのであつた。祭司達は再び後退りに楷段の上に現れ、手を擧げて幔幕が靜に垂れるのを待ち、

「神汝を祝福し、汝を保ち給へ」

と云ふ。さうすると下の庭から幾千の人々が小聲に、

「イスラエルの神に、永遠に榮光あれ」と唱ふる囁が上る。

次に祭司達は大祭壇に進んで、木の巨火に燒くべき肉の犧牲とパンとを備へる。また酒を持つて行つて、銀の漏斗に注ぐ。其は下の槽の中に流込むのであつた。其酒が如何なつたのかバウロは知らなかつた。然し若し酒を貯めて置く位なら、肉やパンを貯めて置いて、エルサレム市中の貧民に施したら、どんなに喜ばれたか知れなかつたであらう。

次に神殿の音樂、唱歌、行列、唱和が有る。祭司達は手に手に銀の喇叭を持つて大祭壇の側に立ちやがて其を一緒に吹きながら、鐃鈸を鳴す他の一隊の方に進んで行く。レビ人と好い聲の少年達との唱歌隊は會衆の方に背を向けて白い石段の上に列び、其日の讃詠を高唱する。其に連れて笛、横笛、竪琴、絃鼓、手鼓、鐘、太鼓其他の奇妙な樂器が鳴らされて左程好調とも思はれぬ高い音を立てる。銀の喇叭が三聲鳴るのが各部の終を告げる合圖で、其度に全會衆は、聖所の方に面を向けて頭を垂れ禮拜をする。彼等の唱つた歌の一節は次の如きものであつた。

われらの力なる神にむかひて高らかにうたひ
ヤコブの神にむかひてよろこびの聲をあけよ。
歌をうたひ鼓とよき音の琴と箏とを持ち來れ
新月と滿月とわれらの節會の日とにラッパを

吹き鳴らせ。これイスラエルの律法
ヤコブの神の格なり。

遂に喇叭の聲が尾を引いて長く響くと、曙光前一時間に始り、曙光後二時間にして終る朝の祭事の終が來るのであつた。

どんな少年でも、此樣な祭事や其に加はる斯ばかりの大群衆を見ては心を奪はれるであらう。神殿の物なら石までも禮拜するほどに訓育せられたバウロは、自分の周圍に行はれる此等のことを、胸を跳らせながら見てゐたに相違ない。そして靜かなる祈禱の時が來たときには、其處に脆いてゐる數千の人々の中にも、タルソから來た此無名の青年ほど深い熱心な祈禱を捧げた者は無かつたであらう。

四二　天幕を疊んで

エルサレム・十五歲から三十歲

バウロが神殿の夕の犧牲に行つて見ると、式は赤い太陽が樹木少きユダヤの山の彼方に沒する頃に終るのであつた。祭司達は汚れた白衣を脫ぎ、洗足に鞋を穿き、夕餉につく。と新手の祭司の一隊が、其代に任務に就いた。

祭司達は、燈火に輝く部屋で或は食ひ或は談つた。バウロが群衆した市街の暗い町に下りて見ると

其處には勞役、貧困、悲慘の影がさしてゐた。向ふの金の神殿に住んで如何にも神に近く在ると見えた祭司の其に較べて、普通の人の生活が甚だ小さく邪惡なものに思はれるのであつた。パウロは未だ色々經驗して、天父に眼を擧げる最悲慘な乞食も、かの大きな藍い幔幕の中に入つて、若し其處に禁を犯して入る者があれば其人を殺すやう命ずることも可能る祭司と同樣に、神に近づき得ることを學ばなければならなかつた。

パウロが寢て居る間も、靜な神殿は三十四個所に立つた武裝した不眠の番人に守られてゐた。隊長は四度巡邏して、各番人は其度毎に起上つて答を爲なければならなかつた。若し熟睡でもしてゐる處を見附かつたら大變であつた。薄いリンネルの着物に火を付けられて眼を覺すか、棍棒で打き起されるかするのであつた。

逾越節の第七日目は、嚴格な安息日として守られ、人々は何の仕事も仕ないやうに命ぜられた。たゞし神殿では左樣では無かつた。祭司等は、人民の爲に律法を立てたが、自分達の爲には違つた規定を拵らへてゐた。然し人民が是を看破して、祭司達の命令に從ふことを拒絶する日が近づきつゝあつた。

其安息日の晩、二人の祭司が。崇嚴な式で美麗な藍い幔幕の中に、新しい聖パンを携へて入り、其を更に內なる緞帳の前に据えられた金の机の上に供へる。そして古いパンを下げて來て、其を食く特權を擔ふ或祭司達に分與するのであつた。

その翌日、パウロがエルサレムで守つた最初の大祭が終を告げた。最後の日だから神殿に空手で詣つてはならぬと言ふので、更に賽錢を用意して行つて、祭事や祭司達への禮に、眞鍮の喇叭口の中に投入するのであつた。パウロは愈神殿の庭を辭去する時には、向ふの山にかゝつてゐる入日の黃金なす榮光も此神殿の榮光に比較したら物の數でも無い。此神殿の爲ならば喜んで我が生命でも捨てるとまで感激した。然も彼の前途には、天晴れ英雄心を振起すべき時は唯の一瞬間も來らず、却て徒に骨を折つて、やがては彼の足下に潰ゆべき砂の山を積上げる歲月のみが橫つてゐたのである。郊外に天幕を張つてゐた巡禮團が一つ〳〵、黑、茶、黃、綠に彩色られた天幕を疊んで往くにつれて、市中の群衆は漸次減じていつた。パウロが見てをると、巡禮等は、鍋や釜や食物袋衣類などを荷作りし、天幕の柱や覆を驢馬の背に括りつけて、オリブ山腹を長蛇の陣を作つて徐ろに上つて往く。歌ひながら枝を振りながら次々に見えなくなつて、バレスチナの村邑や、遠い小亞細亞地方の市町にと長い歸路に就くのであつた。パウロの父母も、タルソの巡禮隊に加はつてエルサレムを去るので、パウロは其を見送つて暫く往き、やがて母の涙ながらの接吻を受け、父の嚴かなる祝福を受けて、喉は塞がり眼は涙に曇りながらも振返つて、彼の夢の市へと歸つて行くのであつた。エルサレムは來る歲月彼の古鄕となつた。然し彼に執つて嚴酷な市であることが漸次解つて來たのは、是非もない。

パウロ等學生は毎日、朝夕の犧牲の式に參列しなければならなかつたので、彼は必ず毎朝、神殿の

門の開かれるのを待つてゐた。式が終るとパウロは若い友達と一緒に圓柱の間を急いで祭司の庭の隅にある迂曲した楷段の處に行き、其處を上つて石の部屋に入る。其列んだ窓からは下の庭を瞰すことができた。此部屋で彼はガマリエルの弟子達と共に座つた。彼より若い者もあり、また白髮の老人も有つた。パウロの學んだのは、今の大學などの學課とは違つてゐた。大抵は教法師ガマリエルが此部屋で教をする時、又は神殿の圓柱の間で一般の人々に話す折に傾聽する丈けのことであつた。若し說明がして欲しかつたら、話の終に質問する事が出來たのである。

時々はまた組で聖書を讀んで、各節に就て昔の教法師達が如何なる註解を施したかを尋ねられることも有つた。若しパウロが其問に正しい答の出來ぬ場合には、ガマリエルが直してくれた。パウロはまだ〳〵聖書の各所を學んで何處の部分にも精通し、また傳說をも習得しなければならなかつた。教法師達は、律法は綠の畑で、傳說は其を圍む刺ある籬であると稱つてゐた。彼はまた嚴格なパリサイ人として如何に身を處さなければならぬか、日常生活に於て大小無數の規則を自ら實行し又他人をも實行させなければならぬことなどを教へられた。その癖せ、教法師等自身ですら、凡の規則を記憶したり守つたりすることは不能いと云つてゐたのである。教法師等は既に盲人の手引きする盲人達と稱ばれてゐたのである。然しパウロはまだ彼等をさうは思はなかつた。たゞしガリラヤに住める一人の人物は、やがて其を世界に宣言する筈であつたのである。

四三　手を洗ふこと

エルサレム・十五歲から三十歲

我々は此若い學生に從いて混亂した彼の學課の迷路全體を行くことは能きない。モーセの五卷に含まれた凡ての律法を五十倍しても未だ〳〵パウロの前に横はる學問が奈何なものであるか明瞭り解らない位のものである。若しガマリエルが多少順序を立てゝ律法を教へたとすれば、彼は種々の教法師の教へたことを順次に教へ、優しい祖父ヒレル教法師の見解を辯護しサムマイ教法師及其一派の人々の冷い教を非難するに努めたのであらう。そしてパウロは彼の口から復た此世に於ける唯一の希望は宗教的な凡ての律法と傳說を知つて其を守ることであると教へられたであらう。

預言者達の諸書を解明す時には、ガマリエルはパウロ等に、昔の預言者達がユダヤ國民の爲に行つた善い働を教へ、預言書に就て教法師達の教へた無數の意味を說明したに相違ない。また文學物を教へる時には、幾世紀の間言傳へられて來た樣々の奇好な話を生徒等に教へたであらう。歷代の教法師等は、其等の書物にあるあらゆる人々の誕生、死、年齡、容貌、商賣などに關して色々の話を附會けたのである。

彼がパリサイ人の生涯の如何なものであるかを教へる時には、學者たる者は、辯護士でもあり裁判

官でもある。單に人殺しや盜人のやうな政治上の罪過と其罰法に就て知るばかりでなく、凡て律法や傳說に叛する宗教上の犯罪に就て知り、其に對する刑罰、祭司の赦を受けるには如何にすべきかと云ふことなども皆明めて置かなければならぬと敎へた。學者はまた諸例祭のことも知り、奈何云ふ風に神殿乃至會堂に於て其を行はねばならぬか、犧牲や捧物の種類なども辨へ、更に種々の淨めのことに就て澤山學んでをらなければならぬことを敎へた。バウロはまた嚴格なパリサイ人たる者は、町を歩いたり、寢たり食つたり洗つたり着たりするに奈何爲なければならぬか、經牌を奈何付け、晝夜樣々の時にどう祈るか、無數の行儀上の規則の孰れかを破つた場合には、どうして其過を正してよいか等のことに就てガマリエルの敎を聞くのが非常に面白かつた。

若い學生バウロが每日々々敎へられた通りを實行しやうと努力して居つた有樣は先づ此樣なもので彼は缺點の無いパリサイ人にならうとの決心を以て、ガマリエルの說明する傳說の紐に愈益絡付かれつゝあつたのである。彼は、今日の我々に執つては何でも無いことであるが、手を洗つたり皿を洗つたりすることさへ、行り方によつては善ともなり惡ともなると信じて、一々心配爲なければならなかつたのである。其一例を擧げると、

「床から起出る時、寢てゐた間に汚れた手や顏を奇麗に洗はない先に四歩以上動くのは規定に反く。また是を行ふ前に自分の體の何處にも觸つてはならぬ。洗ふには次の通にせよ。先づ水差を右手で持

上げ、左手に持代へよ。そして淸い冷い水を、地の方に向つて下げた右手の開いた指に二度注げ、次に左手に。而して顏を三度洗へ。然る後合掌し、十指を伸し、『世界の王なる神よ、汝は讃むべきかな。汝は汝の律法を以て我等を淨め、我等が我等の手を洗ふことを求め給ふ』と言へ。」バウロが每朝此を練習して、遂に嚴格なパリサイ人として正しく洗ふことの出來る迄一生懸命になつて居つた有樣は我等の眼前に浮んで來る。

バウロは食事の前後、家に入つて行く時、ある祈禱する前などには又其々の方法を以て手を洗はねばならなかつた。ヒレルやサムマイは他の事に就ては意見を異にしても、手、瓶、皿、小刀、卓子などを洗ふことはパリサイ人にとつて最大切なことであると云ふこと丈けは一致してゐた。洗ふに用ふる水の種類に就ても八ケ間敷い規則が有つて、池の水、井土の水、水溜の水、流の水によつて各違があり、或者は、氷の溶水、霜、雪、霰などの水でも可いと云い、其では不可ぬと云ふ者もあつた。それで、パリサイ人である者は、折角手を洗つても、後に其が禁ぜられてをる水であつたと氣が附いて、是は汚れた、正しくしなければならぬと云ふので隨分面倒を見ねばならなかつたのである。

諸君には何だ瑣ぬことだと思へるであらうが、バウロにして見れば仲々大切なことで、ある大敎法師は、食事の後に手を洗はぬ者は人殺しと同じ位惡いとまで言つたのである。

四四　パリサイ人と成るには

エルサレム・十五歳から三十歳

今日の教會の安息日には、働を止めて休み、教會に行き、聖書を讀むと云ふ點はユダヤ人の安息日の例に習うたものであるが、其が自由で美しいのは、イエスの教のお蔭である。ガマリエルがパウロ等學生に安息日に就て教へた時には、安息日に附隨した澤山の規則を授けたので、樂と休息の日どころか、反つて束縛の日となつたのである。

パウロは、其日には半哩以上歩いてはならぬ。ポケットにでも物を持つて歩いては可かぬ、靴上靴或は長靴などを穿いては駄目、履物は皮鞋に限る、其も一所しか結んではならぬ。火を點けも消しもならぬ。井土に落ちた驢馬は引出してやつても、傷を受けてゐる人を助けてはならぬ、穀物の穗を一本でも捻んで手で揉めば刈入れて投穀と同じだから其も出來ぬ等と教へられた。此等の安息日に關する規則を、パウロは正しく聖いものだと信じてゐた。たゞしイエスは、馬鹿な事である、そんなことは善惡に關の無いものだと教へ給ふのであつた。

何を食つて可い、何は觸る丈けでも惡いと言ふ問題になると、パウロは隨分奇態な面倒臭い多の規則を守るやうに教へられた。此規則では、後年彼が馬鹿氣たことだと氣付いて來た時、ユダヤ人の友

達からは其を破るは非常に惡いと非難されたりして甚く困つたのである。彼は或種の動物は全然食つてはならぬ。或種のものは特別な方法で殺さなければ食はれぬと教へられた。鳥や魚の中にも食はれぬものが有つた。たゞ彼のやうな暑い國で可いことには、果物や野菜は何を喰べてもよかつた。パウロは、我々の行つてゐるやうな仕方で殺した牛肉、羊肉、或は又豚肉は敢て喰はなかつた。喰つたら不淨な者となるのである。血の染んでゐる牛肉を食ふ者は死刑に處せられることになつてゐた。

パウロは復た、聖書の章句を暗誦したり昔の教法師達の爲た祈の文句を反覆して祈る教法師達に習つて長たらしい祈禱をする方法を教へられた。祈禱の時には如何云ふ風に立ち、手をどう置いて、體をどう屈げねばならぬかと言ふことも教はつた。祭日、斷食の日、新月の祭、新年、結婚、安息日、或は平日に祈る各種の祈禱も覺えさせられた。其を日夜習得して、正しく用ひることが出來、他人にも教へ得るやうに爲なければならなかつた。

こんな風にしてガマリエルの指導を受けつゝ、教法師達が教を受けに來る誰でも彼でも縛つた規則や傳說の果しない迷路の中に日々深入りして行つた。學んで反覆する丈けで、他人の思想を學ぶよりも遙に大切な、自分の言行に就て自ら考へて見ると言ふ隙もなしに過ぎた。後には間違つてゐたと氣が付くのであるが、其はイエスの教を受けた後のことであつた。

パウロはエルサレム生れのユダヤ人では無く、小亞細亞生れであつた。そして彼の服裝は、烈日に

燒かれ、風雨寒暑と闘はねばならぬ旅行者且勞働者の服裝であつた。平日には首から足の甲までの、長い、大きな縞のついた被服を纏ひ、腰の邊を幅廣い帶で二つ卷き、衣囊が無いので其帶の間に物を狹んで歩いた。寒い日や雨の時には、厚い鼠色の引廻を肩から引掛けて前で搔合せてゐた。其上に四隅に藍い房の付いた祈禱の肩掛を被てゐたが、其は頭から垂れ下つてをる頭巾の端に半ば蔭れてゐた。頭巾は矢張縞入りで頭から顏の上部、耳、後頸の邊まで垂れ、紐で鉢卷をして縛つてあつた。彼の黑い頭髮は全く蔭されてゐた。日光が照りつけると彼は頭巾を前に引いて、淺黑い顏に陰し、輝く黑眼の被にした。何でも善い思想は自分達が皆持つて居ると心高ぶつて世の中に何が行はれて居るか氣にも止めないエルサレムのバリサイ人達の暗い睡さうな眼と大違ひで、パウロの兩眼は頭巾の蔭から忙はしく敏く覗いてゐた。

エルサレムのバリサイ人等は何でも虛飾のが好きだつた。そこで町の子供達は、彼等に異名をつけてゐた。たとへば「轉倒バリサイ」と言ふ異名が有つたが、是は彼等が頭を垂れて歩く癖が有つて何處を歩いてをるか分らぬ爲に、よく物に衝突かつて轉倒つたからである。又「血染めのバリサイ」とも言はれた。其は彼等が女を見れば不淨だと言つて眼を閉ぢて歩くうち壁や棒杭に突當つて鼻を擦りむいて血を出すからであつた。「帽子バリサイ」と言ふも有つた。惡い物を見たらいかぬと言ふので帽子を引いて眼を被ふてゐた連中のことである。「此上爲る事は無いバリサイ」と言ふのも有つた。是は

律法は皆守つてゐた連中のことで、而も誰も彼等の公言を信じてはゐなかつた。

パウロは、こんな連中には入つてゐなかつたが、其でも種々馬鹿氣たことを行つたのである。街上で、他人と擦違ふ時には遠退くか、又は着物を反對の側に引いた。其は自分の着物が、自分程に律法を守つて居らぬ人に觸ると不淨だと言ふのであつた。も一層馬鹿氣てゐたのは、彼は婦人には律法を敎ゆべきもので無い。婦人はそんな高尙な事を敎はる價値が無いと思つてゐた。そして街で逢つても婦人は見もせず話し掛けも爲なかつた。パウロは後生涯に入つても、今日の我々から見れば愚な不正な婦人觀を持ち婦人の事について兎や角云つてをる。若いパウロは當時考へも付かなかつたことであるが、イエスは女は、男に比して遜色無いばかりか、男よりも可い處が有るとさへ敎へ給ふたのである。

四五　シオンの丘と市の諸門

エルサレム・十五歲から三十歲

パウロは、シオンの山の美しいことに就て、聖書の多くの章句で讀みもし、種々の歌や詩に歌つたりしたが、今は每日モリア山上の神殿の庭から見ることが能きた。シオンはモリア山よりも高い丘で深い狹いティロピアン谷を隔てゝ向ふに立つてゐた。此谷には高い橋が架つて、市の西側の交通に便

し、祭司達が神殿に行く道になつてゐた。富豪の住宅や大館は其シオンに建ち、其部分のことをダビデ王の市とも稱んだ。然しつい先年ヘロデ大王が、半は市を美くし、半は自分の安全を謀る爲に高塔や宮殿を建てたので、以前よりはずつと壯麗になつてゐた。パウロがシオンを仰いで眼についたのは三個の四角な分厚い大理石造の大塔であつた。其一個はヘロデの友の名を取つてヒピカスと云ひ、一つは兄弟の名を取つて、ファザエルと呼び。今一つはヘロデが殺した自分の妻の名を取つたマリアム塔であつたが、是は彼が妻を長い歳月虐待した悲しい記念となつたわけである。少し遠くの方にはヘロデ王の宮殿や廣い庭園が、高い塀に圍まれてゐた。宮殿の入口の圓柱は、磨上げた大理石其他の價高き石材より成り、床は色のついた敷石で、天井は金が張つて有つて、ユダヤの王が建てた中で最立派な宮殿であつたが、今は羅馬の代官が其處に住んでゐたのである。然しパウロは輕蔑の目で其壯麗な城を眺めたのである。ヘロデが羅馬人の歡心を買ふ爲に、庭園の中に種々な美しい像を置いたのがパウロには惡いこと、偶像を敬ふのだと思はれたからである。

却てパウロは本統のユダヤの王で一等終の王であつたアスモニアンの古ぼけた宮殿の方に心を惹かれた。シオンには又た祭司の長の館が有つた。新しい街には金工銀工の店が軒を列べて、近所に住んでゐる富祐な祭司、貴族達を顧客にして居つた。此後歳久しからずしてイエスが、パウロが今神聖なものだと思つてゐる律法及傳說の破壞者として引かれて行つたのは實に此諸王の丘の町から町、殿か

ら館へであつたのである。

パウロが神殿の高見から幾個かの丘の上に建つたエルサレムの市を見渡すと、羅馬の大將マーク・アントニイの名を取つた大きなアントニオ城が聳立つてゐた。其城には市を治めてをる羅馬代官の近衛兵が澤山居て、其から一條の拔穴が神殿に通じてゐて、何か人民の一揆でも起ると、忽ち兵士達が其穴を通つて神殿の庭に馳けつけたものである。パウロは外國人が、神殿にそんな拔穴を作つて居ることを憤慨したであらう。而も彼は後生涯に於て、此拔穴が有つたらこそ、自分の國人に殺される處を羅馬の兵隊に助けられやうとは些も知らなかつたのである。

アクラの丘の向ふには一つの谷合が有つた。其處は勸工場や市場が有つて商賣が盛に行はれ、且た市の長老達の集會所となつてゐた。パウロは貧書生で、自活の道を講ぜなければならなかつたので、天幕や天幕布を製へて賣りに始終其處に出入したから其谷の事は能く知つてゐた筈である。第四の丘は「新市街」と呼ばれ、パウロの眼が丘から丘、右から左へと動くと、向ふには澤山の屈りくねつて狹い日光も通らぬ町々が見えるのであつた。町中を歩いて見ると、街は小さな石を敷いて、兩側に小高く步道が有つたが、偉い人に逢ふ毎に其から下りなければならなかつた。町名には「水町」「魚町」「勘江場町」等が有つた。

一百の塔を載せた厚い高い石垣は市全體を取卷き內の家々と外の谷々とを區切り、僅數個の門が開

いてゐて、其も丸で隧道見たやうなものであるから、パウロはエルサレムの市城は難攻不落であると信じてゐた。實際世にも罕な防禦に強い市であつたのだが、其でも怖しい羅馬軍に奪られたのであつた。パウロは始終此厚い石垣の内にばかり居たのでは無い。時には近在の方に天幕布を賣りに出掛けたり友達を訪ねていつたりしたことであらう。北側から出て行くとすれば、ダマスコ門を通つたのである。此門から少し行くと丘の中腹に驚くべき墓が列んでゐた。其はダビテ王以來のユダヤの王達の埋められた處で、今日迄も殘つてゐる。若し西側から出て行けば、ヤファ門を通つたのである。是はエルサレムから三十哩先の地中海に行く途で、憎い羅馬軍が船から上つて來たのは此道であつた。南側から出るには獅子門を通る。其を出ると陰鬱なヒンノムの谷で、其處には地獄と呼ばれた厭な場所が有つて、神殿から集めて來た骨や屑物を燒く火が燃つてゐた。屑物を喰ひに來る蟲蛆は盡きず火は一時も消ゆること無く、ユダヤ人の所謂ゲエンナ卽ち焦熱地獄そのまゝの嫌惡な所であつた。

然しパウロがも一つの方向に顔を向けると、エルサレム中で一番麗しい場所が見えるのであつた。其はシロアムの池で、市の石垣の根元から湧出した水は、エホシャハットの谷間に有る王宮附の美しい花園を通つて靜に流れてゐた。其園には、銀色の柳、巴旦杏、金色の葫蘆、百合花などが有つて、鬱叢りした谷陰に、此泉から引いた小川に灌がれて、暑い夏にも生々してゐた。

第六　ケドロン橋とオリブ山

エルサレム・十五歳から三十歳

南の門から郊外に踏出すと、ユダヤ人には懷しいヘブロンの丘陵が有つた。かのアブラハム、イサク、ヤコブが牛や羊の群を牧ぶたのは此處であつた。エタムの谷にはソロモン王がエルサレムに水を引く爲に造つた三つの大きな泉が有つた。其からベツレヘムの方に進んで行くと道ばたから少し横に行つた處に白いラケルの墳墓が有つて信仰の篤いユダヤ人は途寄りして祈するのであつた。丘の上のベツレヘムは卽ちダビデ王の町であつた。いくら其狹い街を歩いて居ても、其誕生の時に天使達が平和と恩惠の歌をうたつた聖童の話は少しも聞かず、たゞ牧羊少年がダビデ王となり音樂唱歌を嗜み戰爭征略を好んでパウロが思つた程善い人では無かつた話を澤山聽いたであらう。

然しパウロは他の門よりも東の門から一番繁く出入したであらう。其を出ればエホシャハットの谷で、白いケドロンの急流は其間を走り、オリブ山は前方に立つてゐた。此側が市の最美しい處で、最愛されてゐた。神殿はそこの絕壁の頂に建てられ、白大理石の圓柱二列に並び西洋杉で屋根葺いた美麗な玄關が聳え、其處から、遊園や美しい墓地や曲つた流のある廣い谷間を瞰下し、對ふに樹木茂れるオリブ山を見渡すことが出來た。今日までも、其場所はユダヤ人に執つては、全世界ぢう最なつか

しい所で、毎年數千のユダヤ人等は、古い神殿の石垣が僅に殘つて居る所に來て涙ながらに祈禱を捧げるのである。

オリブ山腹は、香しい桃金孃、橄欖、樅、葉の黑い糸杉、無花果樹、巴旦杏、一ぱいにはびこつた蔓などで殆ど終年綠々としてゐた。そして全市の誇である二本の古い美しい西洋杉が山の頂上に冠さつてゐた。その谷合には富祐な市民の花園や果樹園が有つて、彼等は其處に逍遙して青草を踏み樹下に憩ふを樂んだ。太陽が低く西に傾くと聖き神殿の影が彼等を包み、上なる神庭からは祭司の吹く銀の喇叭の聲高く祈禱の時刻を告げるのであつた。

バウロも恐らく、とある園、そこには、そよ吹く風に銀色の葉を靡かせて鳴る小枝の伸びた幹の黑い橄欖樹——その樹の間を、明な洞察の眼を以てエルサレムの爲に喜ぶよりも、比市を中心として行はれてゐる惡事の故に悲まなければならなかつた其人の白衣を纏ふた姿が限無き月の光に照されて一段と白く眞夜中に動いた園に入つて、神殿や市の壯麗なことを仰ぎ想うたことであらう。

オリブ山の肩に通ずる道路を往くと刺ある籬や粗い石垣が兩側の果樹園を圍うてゐた。然し打開いた丘の上は自由であつた。そこは春が來る毎に、震へてをる白頭翁、大きな三色菫、黃色い毛莫、それから鬱金香、百合花、ラークスパー、其他眩きばかり映揃うた百花の黃白紫紅、綠葉の間を輝かしく染めて、芳香を放つ毛氈を擴げたやうであつた。

バウロがオリブ山の頂上に立つて再び市中を瞰下し遙の彼方を望むと、手近に樹る輝く峽、茶色の丘陵の盡くる處、卽ちヨルダン河岸の綠樹、死海を囘る裸岩あり、遠景にはモアブの赭山銅の垣の如くに閃めいてゐるのであつた。此オリブ山の嶺から擧げられる新月の報の烽は、丘から丘へと全國に光を傳へた。ユダヤ人と仲の惡いサマリア人が、伴りの烽をあげて人々を欺くこともあつた。然し宗敎の學生にとつては、神殿の「聖の聖なる所」の伸金で葺いた屋根が何より眼に入つて、深く心に喰入り、是から此市の爲此神殿の爲に大いに爲すところ有らんとの決心を固めさすのであつた。

四七　白柳の籠

エルサレム・十五歲から三十歲

金の神殿は大會堂などとは樣子が變つてゐて、單に禮拜する處であるばかりで無く、犧牲、祭司、喇叭、歌、行列などの場所でも有つた。而して祭司達は、是こそ神の住居し給ふ唯一の家であると敎へた。反之會堂はエルサレム市中の諸所に有つて今の敎會に比すべく、人々は其所に行つて禮拜したのである。何でも其數四百も有つたと云ふことである。ユダヤ以外の諸國から集つて來たユダヤ人等は各々自分の會堂を建てゝ知友相集ふことを好み、僅十人以上あれば會堂を設けることが出來たので確に澤山有つたに相違ない。彼等は其處に集つて各自の聞いてゐて隨て一等良く解る國語で敎を聞い

た。話す教法師も聖書朗讀者も彼等の知つてをる好きな人達であつた。

外國から來たユダヤ人等は各其國の名で稱呼れてゐた。卽ちエヂプトのアレキサンドリアから來たユダヤ人はアレキサンドリアン、ローマで自由の身となつて來たユダヤ人はリバータイン、アフリカから來たのがシレニアン・ジユー、或はグリーキ・ジユーと言つたやうなものであつた。パウロは自分のタルソの市が首府となつてゐるキリキヤの國から來たユダヤ人等の集るキリキヤ會堂に往つた。毎日金の神殿とガマリエルの學校には行かなければならず更に一週二回は會堂に出席し、夜は勉强が要る、其上に天幕屋にいつて働いて僅ながら自分の生活の費用を儲けねばならぬので、彼も隨分多忙しかつた。

百花咲く四月も過ぎて暑い五月となり、五月も何時しか燒付くやうな六月に移つてゆくと、エルサレムの市には巡禮はもう居なくなつて、睡さうな街は商人番頭行商祭司レビ人富める貴族羅馬の將校兵卒が、常の通に來往ふに過ぎなかつた。

そのうちには、パウロはサンヘドリムを見たであらう。サンヘドリムと云ふのはエルサレム市會のことで、祭司と市の有力者から成り、皆老年の端嚴な人達で、切石造の集會所に集つて會議したのである。彼等は新しい月の初の記號である新月の白い光が見えたと云ふ市の見張番の報告を待つて月次の會議を開くのであつた。其報告が來ると會議は會圓の烽火を點ずるやうに命令を發する。パウロは

炬火が波打つて、オリブ山上に烽火炎上するを見た。と下では神殿で、祭司が喇叭を吹き立てる。聖書に記されてをる。

新月と滿月とわれらの節會の日とに
ラッパをふきならせ。

神殿に上つて見ると、數百の祭司が星影小暗き庭で、牛羊を屠り大きな白い祭壇の上で其を燒いてゐた。パウロは、暗い空に一條の銀月が再び現れたばかりに、其程までに喜んだり感謝を捧げたりしてをるのを別して不思議とも思はなかつたであらう。然し我々にはユダヤ人が新月を其程有難がつた理由も解らず、また多の動物を燒き喇叭を吹いた處で左程人々の爲になつたらうとも思はれぬ。

諸國からユダヤ人の集つて來る年三度の大祭に就ては既に書いた。然し祭司達は其間の時日を何の祭も爲ないで空費することを好まなかつた。祭をやれば神殿や市に金が落ちるのである。逾越節が終つて六週間經つと再た巡禮隊がオリブ山を越えて諸門に流込み、市中は忽ち雜沓するのであつた。其は初穗節が始るからで、男も女も子供も美しい縞のついた衣服に着更へてゐた。パウロが見て居ると祝の初日に、人々は廣い谷間で組々に別れ花や綠葉の花環に身を飾り、無花果、安石榴、棗椰子を盛つた柳籠や、百合花で飾つた小麥束や、頸の虹の如く美しい鳩を携へ、薔薇花で飾つた牛羊を連れて市に練込み、喇叭吹奏手や旗持手を先頭に立てゝ、歌をうたひながら急な坂道を神殿へと上つて行く。

一方には市の住民は綠葉の枝や花を垂した家々に群つて、巡禮達を迎へるのであつた。神殿ではレビ人が献物を受取つてゐた。富裕な人達は献物を金銀の小さな籃に入れて來た。然し白く清らかな柳の籃に綠葉を敷いて盛られた赤い林檎や黃金色の棗椰子の貧しい人達の献物の方が美しく見えた。

此樂しい祭は六日間續いて其間、大きな白い祭壇は血を以て赤に染み、肉を燒く火は高く積上げられた。然し大群衆が、碧天井の下に靜肅に立つて、白衣のレビ唱歌隊が偉大な詩篇を合唱するのを待つてをる間、喧しい鐃鈸も鋭い喇叭も聲を潜めて、たゞ一種異樣の調子を以て吹奏される笛の嗚聲が柔に聞えるのみであつた。其に隨いて唱歌隊が歌詞を唱へ始める。

エホバをほめまつれ汝等エホバの僕よ
ほめまつれエホバの名をほめまつれ、
日のいづる處より日のいる處まで
エホバの名はほめらるべし。

詩誦が終ると再び元の森閑に返つて、終の笛の音が、數千の人々の耳に震へて來るのであつた。其時ケドロン川の彼岸から特選された小麥の最後の束を刈つて來た人々の行列が神殿指して上つて來た。

如斯して小麥收獲の終は神殿ばかりでなく到る處の會堂で感謝の祈を捧げて其記としたのである。

是が行はれて終ふまでは誰も新粉でパンを拵へてはならぬと言ふのが教法師達の教で、パウロも其を信じてゐた。逾越節の時と同じ樣に、大祭壇で新パンが捧げられるや否や下の市中では新しいパンを賣る人々の聲が耳も聾するばかりに起るのであつた。

間も無く地方から來た巡禮達は歸つて行き、パウロは再た、益六ヶ敷くなつてくる神殿の祭事、雜役、勉强等毎日の日課に頭を突込まなければならなかつた。

四八　新月と角笛

エルサレム・十五歳から三十歳

それから四ヶ月の間は祭と云ふほどのものは無かつた。たゞ赤い烽火が上り角笛の吹立てられる新月の祭丈けであつた。然しパウロは澤山斷食日を守らなければならなかつた。斷食日は嚴格なパリサイ人の爲には悲しい眞面目な時であつた。其が屢有つたので、而してパウロは今日の回教徒のやうに太陽が沒してから翌日夕の星が現れる迄飲食を許されず、屢穀袋の作られる粗い布の衣を膚身に直接に着、頭に灰を被つて、悲み泣き、長い祈禱を言はなければならなかつたので、暑い日などは、耐らなかつた。此等の斷食日と言ふのは、エルサレムがネブカドネザルに奪られたこと、最初の神殿が破壞されたこと、ゲダリヤの死、其他のイスラエルの歷史に起つた悲しい出來事を記念する爲であつた。

其他嚴格なパリサイ人はモーセとシナイ山を憶える爲に毎月曜日と木曜日に斷食をした。パウロは規則正しく斷食をすれば、夢の中に神の特別な啓示を受けるものと信じてゐた。斷食と言ふことは昔も今も世界の各所に行はれてをることで別に不思議ではない。

エルサレムのパリサイ人はその嚴格の程度によつて三段に分たれてゐたが、最嚴格なパリサイ人は聖別に關するあらゆる規則を守り、收入の十分の一を神殿に捧げてゐたからパウロの義務も隨分酷しいものであつたらうと思はれる。パウロはガマリエルから、什一の規則、卽ち神殿に十分の一を捧げることは金持であらうが貧乏であらうが凡のユダヤ人が守らねばならぬ。什一の捧物はモーセの始めたことで、後に敎法師達が、凡て第五の羊、牛、馬、山羊、鷄、或は穀物の束は祭司に與へられると言ふ規則を定めた等云ふことを敎へられた。此捧物を必ず自分の物にする爲に敎法師等は、此捧物は聖い物であるから藏して置いて自分の用にするのは非常に惡いことだと敎へたのである。此什一の他に、凡のユダヤ人は神殿稅半セケル卽ち我六十錢許を、特別に古い貨幣で納めねばならなかつた。此稅は毎年七十萬圓許集つたのである。

パウロは止む間も無く祭壇に捧げられる犧牲のことも澤山學ばねばならなかつた。タルソの會堂には無かつた事である。犧牲には種々の種類が有り、方法があり、時期が定つてゐたので、祭司でなければ正しく解つてゐる者は無かつた。燔祭と言ふが有つて毎朝毎夕その烟が蒼空に立登つた。酬恩祭

と言ふが有つて、何か善いことに逢ふと其を捧げた。素祭と云ふはパン餅を捧げ、灌祭と言ふは酒と油を捧げ、罪祭と云ふは律法を破つた償に捧げたものである。ガマリエルは罪祭を捧げなければならぬ四百の罪を數へあげることが出來たが、隨て其捧物の種類も雜多であつた。

燒付くばかりの七、八月は苦しかつた。其間は雨一滴降らず、慄く大空に雲一片現れず、草は赫く燒け、地は人の足が落込む程の罅が入ると云ふ有樣で、大河にこそ水が殘れ、小川は皆旱いて白い石の河床顯に、青や黃色の蜥蜴が日光に背を干してゐた。

元旦は今のやうに雪が積つて風の寒い冬の眞中でなく、畑は奇麗に刈上げられ、紫の葡萄は摘まれ、濃綠の橄欖の果が枝から振落された後の九月に守られた。種子播き、萠芽、生長、刈入れで舊年が終り、再た新しく始めると云ふ期に新年が始ることにして有つたのである。子供達にとつては雪や氷に閉された時よりも暖な日光の中に飛出すことの出來る新年の方が面白かつたに相違ない。

子供等は本統に喜んだ。新月が細い割目の如く天空に白く光ると祭司達は銀の喇叭や金の飾の付いた長い眞直ぐな鹿の角笛や太い洞聲を出す曲つた山羊の角笛を吹立てた。すると人民は是に和して、角笛の音は終夜市中に鳴響き、翌日も宵の明星の現れるまで鳴つゞけた。パウロは樂しいお正月の晩餐を食べながら市の四方に起る哀しい調子の角笛を聞くことが出來た。長い調子の音は喜の音とは取れぬけれども然し其が喜の記號とせられてゐたのである。

四九　紅の花、金の鈴

エルサレム・十五歳から三十歳

お正月の角笛吹奏や歡樂は僅二三日で終つた。今の十月山が朽葉色する頃になると、贖罪の日が來た。是は一年中で最悲しい嚴な祭であつた。パウロは其前一週間斷食をしたり準備を整へたりして、他の人々と一緒に悲の記である白布を纏ふて會堂の中に立つてゐなければならなかつた。

愈安息日が來ると其日は一年中最大切な日で、祭司の長は其日神殿の奥の緞帳を通つて「聖の聖なる所」に入つた。是は年に一度で、其時は神の臺前に立つものと信じてゐたから彼に執つては勿論、凡のユダヤ人にとつても非常に嚴な祭であつた。祭司長は汚れてはならぬと言ふので其前六日間は神殿の一室に閉込められてゐた。眠つて死人の如に見えては汚れだと言ふので終夜目を覺して居なければならなかつた。安息日の曉、祭司達は彼に純白のリンネルの裝束を着させ、其上に濃藍色の上衣を羽織らせた。此上衣の裾は刺繍の赤花其次に金の鈴、紫花其次に再た金の鈴、藍花次に金の鈴と全周に付けてあつて、鈴は美しい音を立てゝ祭司長の進み來ることを豫告せる爲であつた。次に神殿の緞帳と同じに藍白紫紅金の色糸で織つた高價な地で作つた厚い外衣を着せ、ユダヤの十二族の名を彫付けた寶石で肩の處を嵌合せた。一等奇妙なのは胸牌であつた。其には金の地に紅玉黄玉綠柱玉青玉金

剛石黄風信子石赤瑪瑙紫水晶薄青玉髓黑瑪瑙薔薇碧玉等が象眼して有つた。是を祭司長の胸に金鎖と青紐で飾付けたのである。最後に彼の頭に釣鐘形の帽子を青紐で括付けた。其帽子の前面には金の板が付いてゐて其に「聖は神に」と記してあつた。王や婦人の衣裝には隨分立派な奇妙なのが有るが此祭司長程高價で奇妙な裝束をした者は有るまい、彼は此衣冠束帶や金玉の重量で歩けない程であつた。ユダヤ人はまた此華麗な裝束を非常に貴んだもので、羅馬人は占領後、餘り見せては反逆の軍を起しでもしたら大變と言ふので、特別な場合を除く外大低藏に仕舞つて鍵をかけて置いた。

パウロが大神殿で聞いた色々の物音の中でも、祭司長の裾に付いてゐる金の鈴の音が最珍しくもまた美しかつた。朝の犧牲が終ると皆の前で沐浴すべく祭司長は其衣を脱いだが、もう其は再び着ないで、此度は輝く白衣に更へるのであつた。

そして彼は牡牛の頭に手を置いて自分並に祭司達の罪の赦されるやうに祈つた。彼が神の名を言ふ毎に、四方から彼の爲ることを見てゐる神殿内の全會衆は、敷石疊の方に頭を下げた。

やがて白衣姿の祭司長は上なる聖所から楷段を下つて下の群衆の居る庭に降りて來て二頭の白山羊の間に立ち金の壺から御鬮を引く。そして一頭の角に赤い布の片端を結付け今一頭の頸の周圍に他の端を卷付け、初の山羊を人民の方に向はせる、是を替罪羊と言つた。そこで祭司長は全ての人民の罪も赦されるやうに祈るのであつた。

一頭の牡牛を殺して其血を金の鉢に取り次に祭壇から赤い炭火を金の十能に取る。玆に一年中の最崇嚴な行事が行はれるのであつた。皆の目前で、白衣の祭司長は一人廣い楷段を踏んで靜々と聖所に上つて行く。そしてパウロや神殿内に滿つる群衆は、僅に内側に開かれた大緞帳の陰に彼の姿が消えるのを仰ぐ。水を打つた如く靜肅に會衆は待ち、祭司長は進み進んで内の緞帳をも一つ潜つて遂に「聖の聖なる所」に入る。神秘な奥の奥なる室は暗く、手に持つ炭火の弱い光に、金の床、壁、天井が閃めく中に祭司長は眼を擧げた。けれども金の部屋には金の床の眞中に置かれた粗末な石一個のほか何も無い。一歩進んで、彼は燒けた炭火の十能を其石の上に載せ、火の上に香をふりかけた。室内は美い香氣の煙に滿された。かやうにして神の好み給ふものと思はれた香を捧げたのである。それから彼は靜に後退りして立派な重い緞帳は自ら垂れ遂に外に立つと、其處で人民の爲に祈禱をした。其言葉數は少く定つてゐた。でないと下に居て脆き敷石に顔を伏せてゐる群衆は、畏多い「聖の聖なる所」で何事か起つたのではないかと氣遣ふからであつた。遂に祭司長が楷段の方に出て來るのを見ると神殿内にある一同の胸は深い喜に滿されるのであつた。なぜなら人々は今度も神が祭司長の祀を嘉納して全ての人々の罪を皆赦し給ふたと信じたからであつた。此儀式の中には我々の好まない點もあるが然し是によつて人々の心に信仰、從順、敬虔の念を神に向つて起させると言ふ中心思想は、今日の禮拜に於ても矢張中心思想となつてをる。

五〇 赤い頸巻

エルサレム・十五歳から三十歳

パウロが人々の群がる神殿の中に立つて猶も見てゐると、祭司長は赤いフランネルの布で頸を巻いた方の白山羊を殺し其血を金の鉢に取つて再び「聖の聖なる所」に其をふりかける爲に入つて行つた。其日四十三度、祭司長は己の指を以て血をふりかけたが、其血は罪に滿ちたものであると信じられてゐて、どんな事があつても一滴も彼の白衣にかゝつてはならなかつたのである。

其間まだ替罪山羊は角に赤いフランネルの布をつけつれたまゝ白い祭壇の前に立たされてゐた。此羊で何をするつもりであつたか。パウロが眼を瞠つてゐると祭司長は山羊の頭に手を按いて人々の罪の赦されることを祈る。其間人々は頭を低く垂れてをる。が軈て俄に人々の方に振向いた祭司長は下の人民に大聲で「汝等清められるぞ」と叫ぶ。けれども山羊は殺さない。一人の祭司が出て來て此山羊を白い祭壇の處から連出して、白い楷段を降り、下の庭なる人々の間を通つて行く。其時は人々は罪を一杯荷なつてをると思はれた此山羊に觸つては大變と廣い道を開けてやつた。祭司に連れられた山羊は、金と銀とのニカノル門を過ぎ、婦人庭を通り、磨かれた眞鍮のスサン門を過ぎ、異邦人の庭を通り、大理石柱の立つソロモンの玄關を過ぎて神殿の外へ、更に特設の狹い橋を渡つてケドロンを

越へ、オリブ山に登る。其處に一人の男がゐて全て人々の罪を皆運んでゐると思はれてゐる此小さな山羊の綱を取つて五哩往きユダの曠野に出る。其處で彼は赤いフランネルの布を半分引裂いて岩に打付け、綱を解いて山羊を突放し自由に驅去るに任せる。其時彼は手に持つ旗を振る。此合圖は速に人から人へと傳へられ遂にオリブ山上の番人が神殿の見張番に旗を振ると神殿の見張番は下の庭なる人々に向つてまた旗をふる。其を仰ぎ見た人々は異口同音に「山羊は凡て我等の罪を人無き處に運び去つた」と唱ぐのであつた。バウロは其は眞實だと思つてゐたに相違ない。

角に赤い布をつけられた山羊が放たれるまで祭司長はまだ忙しかつた。けれども金の大燈明臺に點火すれば其で仕事は終るのであつた。而して再び金光燦たる裝束と寶玉の胸牌を着けた彼は歡喜せる群衆に取卷かれて神殿を出で市中を過ぎシオン山上の自宅に歸つて行つたのである。

其時はもう夜になつて歡樂の宴が開かれるのであつた。バウロは前夜から何も食べなかつたのである。若しバウロが晩餐の後で月に照された葡萄畑に出て見ると、結婚を求める市の娘達が與へられた白い着物をきて踊つてゐた。白い衣を着たのは富めるも貧きも一樣に見せる爲であつた。娘達は手鼓に合せて舞踏したり流行唱を歌つてゐた。一例を擧げれば次のやうなものであつた。

白き環を畫いて娘等は踊る、

花嫁擇ぶは樂しき若者、
美しき色香は軈て失せなん、
神を畏れ神を愛する娘を求めよ。

若者達は晴衣を着て葡萄の黃色い葉の中に立ち暗い眼を据えて月明に流れてゆく美しい娘達の飛立つ姿を眺めてゐるのであつた。

五一　黃色い香櫞、青い桃金孃

エルサレム・十五歳から三十歳

そんなに幾日も贖罪の大祭の準備にかゝつた程ならば次の祭には間が有るであらうと思ふと、實際は左樣でなく、僅五日すると、タルソでも熟知の假茅屋住居の祭がやつて來るのであつた。但しバウロは金の神殿で守られるのを見るのは始てであつた。此は復た收獲の祝日でもあつたので、贖の祭が最悲しい祭とすれば、此は一年中で最樂しい祭であつた。

再た巡禮達が隊を組んで、中には數百里の彼方から旅立つて、オリブ山の肩を歌ひながら越えて來るのが見えた。然し此度は土色や黑色の小天幕に露營したり或は家々の客となるのでは無く、綠葉の

假茅屋に宿るのであつた。幾組も幾組も市壁外の露營地に集り、忽に谷と云ふ谷、丘と言ふ丘は悉く綠葉の小枝で造つた美しい小屋で一ぱいになるのであつた。同時に市中でも、假小屋が花園、廣い根屋の上、廣庭に隅無く建てられ、街々が花で飾られた樣は、タルソのユダヤ街であつたのと變はなかつた。

此祭は七日續いた。バウロも手に柳の小枝を持ち、ケドロンの谷の群衆の中に立つて、每朝、祭司が金の鉢にシロアム池の水を酌んで、巖壁に刻まれた石段を登つて神殿に行く時、その小枝を打振り歌をうたふた。神殿に行つて見ると、祭司が其水を、白い大祭壇の一方の金の喇叭口に注込み、他の喇叭口に葡萄酒を注込んだ。

七日の中の某日には、神殿內の凡の人々が一方の手に黃色い香櫞を持ち、他の手に棕梠や柳の束と桃金孃の小枝とを持つて、白衣の祭司達の列が白い祭壇を廻り、レビ人の樂隊が歌ひ、「オヽヱホバに感謝せよ」と叫ぶ每に、それを頭上に打振り、神殿の庭は恰も風に搖られる森かと見える程であつた。

其日神殿の賽錢箱が開かれ、光る金貨は、堅固な藏に運び納められた。夜が來て、祭司達の古衣で出來た巨な油燈が、神殿の諸方の壁に揭げられ、晃々たる光を庭一面に、街までも投ける時、バウロは不思議な光景を見た。その時、敎法師達や市の有力者等が、老も若も、琴、鐃鈸、太鼓を持つレビの樂隊が音の高い調子の早い樂を奏するにつれて、婦人の庭の大理石の石疊を踏んで、もう踊る力も

無くなるまで踊つた。其間白い衣服をきた婦人達は、上の暗い行廊から見物して居るのであつた。彼等は婿えらびに月夜の葡萄畑で踊ることは出來ても、神殿では踊の仲間入は許されなかつた。

また某日には、バウロは黃色の香櫞と綠の枝とそれから棒物とを持つて神殿に參詣し、祭司達がケドロンの川邊から集めて來た柳の枝で作つた大きな茅屋を眺めながら大祭壇を廻り歩いて、「ホザナよ、ホザナよ」と叫んだ。此には子供等も加はることを許されて聲の限に叫ぶのであつた。最後の日には、バウロは皆と一緒になつて綠の假小屋を引倒し、柳の枝を大理石の石疊に打付けて葉をたゝき落した。之を合圖に、人々は屋根の上や庭園に拵らへた小屋を取壞して、家に歸つたのである。

これから久しからずして、イエスが來つて變つた心を以て此奇態な光景を眺め、大群衆の中に立つて、世の爲に他の光あり、他に生命の水あることを敎へ給ふのであるが、其時は未だ來なかつたのである。

五二　誓と結婚

エルサレム・十五歲から三十歲

また田舍の人達の晴衣はエルサレムの町に見えなくなり。商店、バザー、市場などで市の雜貨を買ふ外國生れのユダヤ人等の聞き馴れぬ言語も聞えなくなつた。祭の群衆は散つた。バウロは再び天幕

製造とガマリエルの下に勉強することを、平常のごとく始めた。彼は教法師の規則を覺え、日常生活に其を實行し、正確に記憶して、一語も違はず他人に教へ得るやうにならねばならなかつた。

結婚の規則に就ては、パウロは、ユダヤ人はユダヤ人と結婚爲なければならぬ。結婚の時に父は其娘に何々を祝として與へねばならぬ、何曜日に結婚して可いか、結納の取替、結婚の儀式、會堂の許可を先づ得なければならぬこと、それから嫁婿の動作行儀に就ての澤山の規則慣例を、教法師から教へられた。更に花嫁は婚儀に際して如何なる花を身につけてはならぬ、髪は奈何結はなければならぬと言ふことまでも教はつた。離婚に就ても澤山の規則が出來てゐて、中には極めて子供らしく、婦人にとつて殘酷であつて、どうして眞面目な人達が其を正直に守つたのか分らぬ位のものも有つた。然もパウロは一人で數人の妻を持つても可いものと思つてゐた。そして髪を亂したまゝ外出したとか、食事の仕樣が惡かつたとか云ふ位の些少な理由で、妻を去つても可いと思つてゐた。教法師中には婦人と云ふものが無かつた爲に、婦人に利益な規則は絶て作られなかつたのである。

パウロは、教法師ガマリエルの言ふことであるから、凡て此等の規則は正しい適當なものであると信じて疑はなかつた。人は結婚爲ないならば、其が一等善い、妻女や子供等が有つては律法や傳說を學ぶ妨害になると云ふ教が有る。それで女の優しい顏、子供の愛らしい聲も、善い人は見聞することを避けた方が可いと教へられた。パウロは彼の生涯の終までも、此考から全くは脫れずじまひであつ

た。此點に於て教法師達はモーセの律法外のことを規定したもので、イエスは民に教へ給ふことになつた時、教法師達の無情で、妻女に冷酷なことを抗擊し給うたのである。

誓とか、眞の誓約、僞の誓約に就てガマリエルはパウロに、モーセが此事に就て教へたことは、其後教法師達の手で非常に改變られて、種々雜多の誓の目錄が出來てゐることを教へた。エルサレムの神殿により、大祭壇により、祭壇上の火により、太陽により、或は神御自身の聖き名によつて誓約をして可いと言ふことになつてゐた。多の誓約なるものは、大低神殿に何かを捧げると言ふ約束であつた。故に其を守ることについては祭司達は非常に嚴しい規則を設けてゐた。たとへ親又は子供が餓死しても約束の捧物は神殿に持つて來なければならぬと云ふ程嚴しかつた。パウロは其樣な誓でも正しいものだ、守らぬ者は罰せられるのが至當だと信じてゐた。

彼はまた祭司になる人のことを教はつた。祭司になれる家族は定つてゐた。パウロは若い祭司達が毎日神殿で、祭事を修業してゐるのを見た。祭司が間違をすると云ふことは恐しいことであつた。彼はまた學者になるには奈何するかと云ふことも習つた。學者はユダヤ人の居る會堂法庭の裁判官であつた。聖書の凡の書物の寫本を作るのも其役目であつた、而も祭司やレビ人と違つて、神殿の收入を分けて貰はなかつたので、眞に貧しい學者であつた。

五三　野花咲く頃

エルサレム・十五歳から三十歳

ケドロンの谷には小豆色の葉が落散つて、エルサレムの冬は近づいて來た。但し樹々は白い霜に被はれ丘は雪を載せ川は氷に鎖される冬とは違つてゐた。十一月には雨が有つて河川の石河原は忽ち泡沫立つ急流と變るのであつた。パウロはケドロン橋上に立つて、早川が兩側の黑い岩を深い波に浸し、神殿の石垣の根本で濁流を作し、市を取卷く凡の谷も溝も白い流となつて走るのを眺めたであらう。然し、夜は貫くばかり寒くても、日中は太陽が夏の如く暑いことも屢であつた。十二月になると、夜明には丘が所々雪を載せ、神殿の金の屋根は人工になつた金の伸金よりも一層純に煌く天の雲の白粉もて化粧せられてゐることも有つたが、朝日は忽ち雪を溶かして、その水は急な山々の幾百の小谷を走つて廣いヨルダン河に注込むのであつた。

此死んだやうな寒い月も一の祭で賑つた。其祭は殆ど全くエルサレムの住民丈けで守つて、冬の夜の陰欝を追拂ふに適したものであつた。祭の名を獻堂祭と言つた。是はモーセの時代に溯るのではなく、つい二百年許前、マカビイの獨立戰の時、穢された祭壇を打碎して神殿の外に投棄て、其代にパウロ當時にあつた立派な大自然石の祭壇を置き、暫く中絶してゐた犧牲を再び捧げることになつた紀

念の祭であつた。パウロは八晩續いて神殿に上り、一晩毎に四邊隅なく照してをる燈明や蠟燭の光が愈益輝を增加へるのを見た。市街を見下すと、どの町もこの町も輝き亘り家々に燈火のつけられてをる有樣はタルソで見たのと同樣であつた。

晝間は、人々は手に手に常綠樹の枝を携へ、仕事を休み、神殿に詣で、互に神殿で行はれてゐる祭のことを囁き合つた。パウロの姉の家でも毎晩一人に一個宛、新しい蠟燭に火がつけられた、其はガマリエルの敎に從つたのである。そして火をつけるには、一つ〳〵つけて行かなければならぬとパウロは思つてゐた。我々ならばそんな面倒を見るよりも一時に皆つけた方が早いと思ふがパウロは敎へられた通を信じてゐた。

一月には大した祭は無かつた。けれども我國のやうな寒い、枯死の有樣を呈しはしなかつた。其頃にはもう、オリブ山上には橄欖樹の纏綿れた小枝の下に靑草が芽生え、王の園には草菜が萠出で始めるのであつた。時には風寒く、一天鐵の如く、俄に大きな雹が降つて人々が物陰に逃げ込むやうな日はあつても、冬は既に過ぎたのである。翌日は、快晴で、パウロは靜な屋上に日當ぼつこをして書見に耽り、眼を擧ぐれば、エリコの邊、低い豐な野邊には、麥が綠々と萠出でたのを眺めることが出來た。

二月が來る。今迄靜な快晴をつゞけた天候は忽ち一變して、鉛のやうな雲が暴風に乘り、市上に鑾

つく雨を降らせ、暗い空には電光閃々と馳せ、雷、山々の上に轟き裂けると言ふ有様になる。けれども春はオリブ山を占領して、頂上も將た花園も、野花始めて開き、或は黄白の頭を叩頭かせ、或は眩きばかり鮮な緑の毛氈に、紅紫の外套を擴げてをる、軈て再び樹々の下なる緑草は、照り榮ふ種々の色糸で織られた敷物のやうになるのであつた。頸に虹を飾つて神殿の囘廊や圓柱の間を飛び交ふてゐる鼠色の鳩は、巣を作つたり、白い卵を產つけたりしてゐた。今でも寺院の軒端に巣喰ふやうにパウロの時代にも鳩は親切に取扱はれて平和に巣を作ることが出來たのである。

パウロの心には若くて美しい女王エステルの名と愉快な三月とが常も結付けられてゐた。三月には田畑は麥の穗綠に波打ち、樹々は新しい葉に繁つてゐた。ことに此月には子供が主となつてゐるプリム祭と言ふが有つた。タルソでも有るには有つたが、然しエルサレムには會堂の數が多い丈け全市が賑はつた。

昔、善き女王エステルが侍女達と共に斷食をした例にならつてパウロもプリム祭の前日には斷食をした。そして斷食の終る時刻を告げる三星が夕空に現れるや、街衢は會堂に急ぐ老幼男女で一ぱいになつた。タルソのやうに戸を閉して、他國人の妨害を恐れることは不用かつた。此大都は、みんなユダヤ人で、皆敵ハマンを憎み、善い女王を愛する人々であつたのである。

パウロは今や、モーセの律法や、これ迄知らなかつた教法師達の規則傳說を澤山學んだ。此等の規

則を破るものは如何なる罰をうけるかと云ふ事、會堂には、たとへ外國にある會堂でも、長老達の會議と云ふものが有つて、其中に一人や二人は必ず學者が居つて、規則や罰則を熟知して居ることも聞いた。人々は如何いふ風に其會議に訴へられ、如何に探偵の證言を恐れてをるかと云ふことも聞いた。此等の會堂法庭は人々に罰金を課したり何かの體刑を行つたりして、若し其を爲ない者があれば、また別に罰則を設けてゐた。其中で一番惡いのが破門であつて、今のボイコット見た樣なものであつた。卽ち其罪人をば會堂から除名する、さうするとユダヤ人たる者は誰も其人と言葉を交へず、其人には何も與へなくなる。其爲に其人は飢え、凍へて死んでもかまはぬのであつた。パウロは、命令を守らず言ひつけられた通を信じない者は、其樣に罰せられるのが當然だと思つてゐた。然し今日の我々は幸な時代に生れたもので、信仰の爲に罰せられると言ふことは無い。是もイエスがパウロがそんなに善いことだと信じてゐたユダヤの學者や裁判所會議などの間違つてをることを敎へて、信仰の自由を主張された御陰である。

五四　一年を經て

エルサレム・十五歲から三十歲

今一ツ、ガマリエルの敎へたことが有つた。其は美しい希望と自由に滿ちたもので、暗い雲の上の

美しい虹の如く輝けるものであつた。パウロはガマリエルから、ユダヤ人はこれまで幾度も征服せられて來たが、今に、偉大な人物が現れて、世界の到る處からユダヤ人を集め、羅馬人をユダヤから追出し、エルサレムで、永遠に王としてユダヤを治め給ふ日が來るのだと敎へられたのである。ユダヤの國民を救ふべき此大救主はメシヤと稱ばれた。今こそ其がイエスの尊稱となつてゐるが、パウロの時代には、今とは非常に違つた意味にとられてゐた。敎法師流によつてガマリエルが來らんとするメシヤに就てパウロに說明した意味は、イエスとは隨分違つたもので、パウロが容易にイエスは卽ちメシヤであると信じ得なかつたのも無理はない。

敎法師達は、毎日のやうにメシヤの來るのを待つてゐた時代であるから、他のことよりも餘計にメシヤのことに就て考へたり、談つたりしてゐた。パウロはメシヤの來ることは、千年も前から聖書中の古い預言者達によつて敎へられてをることを知つてゐた。ガマリエルも其等の各節を生徒に讀みきかせ、其はみなメシヤのことを言つたものであることを說明し、敎法師達のつけた解釋に從つて說明を與へたに相違ない。メシヤは如何なる御方であつて、愈來られた場合には人民は如何しなければならぬかと言ふことも敎へたであらう。

パウロは子供の時から、メシヤはユダの王族から生れエルサレム又はベテレヘムで生れるであらうと云ふことは知つてゐた。パウロは更に敎師から次のやうなことを敎へられた。メシヤは古の預言者

エリヤが再び現れて來るまで暫時、人には分らないであらう。エリヤが來てメシヤを王として膏を灌いで後始めてメシヤは己を現し、人民を召集し、敵を追うて、エルサレムへと人民を導き、永い間空位になつてゐた古いユダヤの王統を繼いで位に登るであらう。メシヤの王國はエルサレムから全世界に擴り、萬國の民は皆メシヤに臣從ふに至る。メシヤは人でありながら然も神の權威を持ち、永遠に生きるであらう。

そしてパウロは敎法師の間にメシヤに關する異說のあることも知つたであらう。たとへば或者はメシヤを「神の言」と言ひ、或者は「神の子」と稱び、或は昔の王樣のやうな强い君主で、たゞ昔のよりはもつと偉大な王だ位に思つてをる者もあつた。然しメシヤは戰の王であつてユダヤ國民を戰爭によつて救ひ、山々は敵の血を以て眞赤に染まると言ふ點に於ては皆一致してゐた。またメシヤは不思議を行ふであらう、而も其は主に敵を亡すために行ふであらう。メシヤの口から火を吹いて敵を燒き殺すであらうとさへ言つてゐた。

そしてパウロは、メシヤが凡の敵を平定した後は、想像も及ばぬほどエルサレムを立派な榮輝く市にし給ふであらう。家々は寶玉を以て飾られ、道路は金を以て敷きつめられるであらう。また全國を祝福して、收獲は最豐に、果物は最大きく、病氣は無くならしめ給ふであらうと信じてゐた。實際敎法師達は代々、來るべきメシヤの周圍に作話の蛛網をはるにかゝつてゐたもので、ある話などは子供

でも笑ふほど馬鹿氣たもの、誰も信じないほど慘酷で不正義なものであつた。然し主要點は、メシヤは大王、大戰士で、敵を追拂つてしまふと言ふことであつた。故にパウロは其點を天に太陽があるほど確實に信じ、虐げられたユダヤ國民の希望は、全く、大軍を引卒して羅馬人と戰ふ來るべき救主にかゝつて居ると思つてゐた。我々はパウロが其迄に信じた理かわかりかねるが、然しパウロは何でも教へられた通を信じたことを思はなければならぬ。

パウロは既にエルサレムに滿一年を過して、彼の子供時代の夢であつたシオンの丘、神殿、その祭事などにはもう毎日親を重ねてゐた。パウロはその美しい敷石の庭、圓柱の廊、白い石垣や塔、かの金の屋根の畏い聖所を何と思つてゐたであらうか。白衣の祭司の幾百の閃く刀、煙る犧牲、赤い血の鉢、響く鐃鈸きしる弦、うなる琴するどい角笛さはがしい太鼓白衣の歌隊の音にけさるゝ羊の叫聲を如何見聞したであらうか。時刻を告げる神殿の大銅鑼、群衆に合圖をする鋭い銀の喇叭を何ときいたであらうか。彼は教師に教へられたとほり、廣大な神殿の境内で行はれる犧牲、燒香、流血、祈禱、唱歌、脆拜、靜肅、喧騒は、大凡、人の考へ及ぶ限り最壯大な禮拜である。誰でも神殿又はその祭事に就て言を挿さむもの者は、神に言を反すと同じであつて死刑に處せらるべきものであると、少くともガマリエルの教へた通りを信じてゐたのである。

五五　イエス

エルサレム・十五歳から三十歳

イエスは未だ、ナザレで、働いて時の來るのを待つて居たが、彼も神殿や祭事を知つて居た。確に何年かは分らぬが數年前、美しい黑眼をした少年イエスは兩親と共に逾越節の群衆の中に立ち、上の庭で白衣の祭司達のすることを見てゐた。紅い入日が紫の空に變る不思議な時刻にイエスは父の側に立つて縛められて自由の利かない羔等の叫聲を聞いてゐた。やがて羔が殺されて其血が金の鉢で運ばれてゆくのを見た。太陽の光を浴びながらイエスは庭を取卷く弓狀門の下或は回廊の圓柱の間で白髮の教法師達の言つて居ることを聽いた。然しパウロのやうに何でも信じるのでは無かつた。

歳月は過ぎた、イエスは幾度も神殿の祭に詣で教法師達の話を聽いたが、其毎度に却て教法師達が斯樣なことを人々に教へ、其を信ずるやうに命じてをるのを悲んだのである。彼は祭司達が上の庭で輝かしい法衣を纏うてをるのを見る時には、白い祭壇の上で燒かれる犧牲の數、祭司達が祭壇に灌ぎ流す血の量の大なるに驚いた。イエスは其を見聞きすればするほど、犧牲は無用なこと、彼等の教の間違つてゐること、彼等の行ふ華麗な祭事は天に在す父を眞に禮拜する方法でないことなどをますます明に感じた。此樣な美しい儀式は人々を神に近く導かず、却て神と人との間にいつまでも白衣の祭

司が隔ての垣となつてゐるのであつた。眞の禮拜は人の内にある、眞の奉仕は人の外に表はす生涯にある。神殿の陰から遠い粗野で自由なガリラヤの靜な谷に住んでゐたイエスは、敎法師達は人々に神の眞理を敎へてゐない、間違つた敎師達である、盲目なの暗愚なの、賢く學深きもの種々あるが、しかも皆、人々を迷はすに過ぎず、人々は間違ひと眞實との區別さへつかなくなつてゐることを考へ、感じ、且つ視たのである。

敎法師達は、神を喜ばせ罪の宥を得るの道は、罪を悔ひ改め、他人の罪を赦すことには由らず、宥を祈つてくれる祭司達の處に罪祭や宥の供物を持つて來るにあると敎へて居るらしかつた。然し是は外見の行爲に過ぎぬ、イエスは、人は凡て求めらるゝ祈禱や犧牲は行つても、心は變らないでゐることを知つてゐた。金持は貧乏人の得られない祭司の宥恕も自由に得ることが出來た。イエスは、屠殺される牛や叫ぶ羔や、野の獸に過ぎないものを世界中最神聖なものであるかの如く祭司が好んで振撒く血の鉢を見ても何とも思はなかつた。間違つた敎師、僞の祭司、騙る商人たちで一ぱいの神殿は、神を拜む爲の宮と言ふよりは泥棒の巢窟であつた。燃ゆる火、血の鉢、香の煙、金の暗い神秘な室に入る毎に鈴音をたてる祭司の長も、人々が神の智識に暗いまゝであつては何の用があらうか。

爆裂彈一つの爲に忽ち五十の人の體が野に横はる戰爭の恐ろしさ慘酷さを思うては幾度男兒の胸は燃えたであらうか、鉛の先についた笞で死ぬまで擊たれる奴隷の話を讀んでは彼の心は幾度燃上つ

たであらうか。貧困の苦み、病氣の悲慘を思うては、幾度か女兒の胸は涙に溶け、前途の望も閉されたごとく感じたであらうか。然もイエスがユダヤ人の罪に繫がれた有樣を見て其心を燃やしたほどのことは未だ無かつたのである。けれどもイエスは失望しなかつた、神彼の内に在したからである。

五六　イエスとパウロ

エルサレム・十五歳から三十歳

パウロがエルサレムで敎法師の無終の規則傳說を習つてゐる間、イエスはナザレで木を削つたり釘を打つたりしてゐた。ヨセフは死んでゐたらしく、隨て長男のイエスは父に代つて田舍大工の家業に就き、さゝやかな家族の戶主となつた。彼は麗しい愛深き母マリアに事へ、弟妹の衣食の爲に働かなければならなかつた。

ヨセフが彼を敎へた如く、弟妹に聖書を敎へるのが彼の役になつた。材木や鉋屑の中なる大工の腰掛の側に立つか、又は平たい屋上の葡萄棚の下で、子供等に取卷かれ、星を戴きながら、最初の日課を始めたことであらう。イエスが弟妹を相手に、神殿で見たこと、聖書に學ぶことを談り、祈を小聲ぐ時之を聽き給ふ天の父について敎へ、善くあることによつて天の父に事へなければならぬことを敎へたほど、美しい敎訓が復と有つたであらうか。良き母マリアもイエスの言に耳を傾けて、イエスの

生れて以來の色々なことを追憶し、ヨセフのに比べてイエスの教が非常に違つてゐる、如何にも平易で、而も神に近きものであることを思つたであらう。ヨセフは他の人々の言ふまゝを反覆したのであるが、イエスは自ら考へたことを敎へたのである。

如斯世界を征服すべき敎は、葡萄棚に蔽はれた茅屋、でなければ鮑屑の散ばつた小屋から、子供と共に始つたのである。母の眼は其を見てゐた、そして若しイエスが其樣に公然人々に敎へたならば、エルサレムの敎法師達や、律法の信者達の迫害と所罰が彼の身に及ぶべきことを恐れ危んでゐた。然しイエスは敎法師等の言を信ぜず自ら神に敎へらるゝまゝを述べた。彼がナザレの谿に歩み、カルメルの紫の山の彼方に臼く紅の日を見、菫榮色の空に瞬き出づる星影を仰ぐ時、彼の胸は、彼に囁き給ふ天の父のことで一杯であつた。四邊に聞ゆるは樅の木に囀る夜鶯の歌か、欄の中にある羔の聲のみであつた。

晝は斧を揮つて森の木を切倒し、暑い仕事場で厚板に楔を打込んだり、大鋸を引いたりする時、彼の考へることは人々のこと、誤りたる敎師僞の祭司、彼等が人々に負はせる無數の規則や重荷、それから天父の人類に對する御旨などであつた。然し道は開けてなかつた、イエスの時は未だ來なかつた。彼の今の仕事は、朝から晩まで大工の働をして、母や弟妹の世話を見てナザレに留つて居ることであつた。そして彼が祭禮に詣づることは歳と共に罕になつた。野邊の花、空行く雲、葡萄園丁、牧羊者

等の方が市街の喧囂や神殿の群衆よりも面白かつたのである。如斯バウロが大きな市に住んで、天幕製造と限りのない勉學に辛苦して居る間に、イエスは田舍の村で働き、神と共に歩みつゝあつた。バウロは市に生れ、街衢や群衆や、人間の爲ることが好きであつた。書物や昔の金言やらは彼にとつて親しいものであつた、エルサレムにゐて斷食をしたり長い祈禱をする貧書生生活を好み、良いも惡いも敎へられたまゝに信じた。やがてイエスが彼に自ら考へることを敎へる日が來るのであるが、其はバウロがもつと〳〵横道に迷ふて後のことであつた。

またエルサレムの街は、逾越節の群衆で充たされた。バウロはまた神殿の境内に立ち、燦く星の下に白祭壇の根に注がれて三途の河の如く神殿の排水渠を流れ焦熱地獄を一層恐しくする血を見て、渴仰の念に滿たされてゐた。

よし其處にイエスが其群衆の中にゐても、バウロは其を知らなかつた。バウロの父親は確に再た上つてゐたであらう。そして家庭からのお土產を携へて來たであらう。中には母の愛の黃金に涙の眞珠が鏤められた安い品でも價ぶみの出來ぬほど貴い賜物も有つたに相違ない。バウロは父に、六ヶ敷い勉學や先生のガマリエルが、パリサイ人として斯うしなければならぬと敎へた通りを守つてゆく峻嚴な生活に就て話したであらう。父は市を出て冢路につく時、バウロが込入つた律法に精通してゆくのを喜しく思つたであらう。元より彼は、他日敎師達に反抗して揮ふべき鋭い刃を、息子が身につけつゝあ

るものとは夢にも知らなかつたのである。

五七　エルサレムの學生時代

エルサレム・十五歳から三十歳

バウロが學生としてエルサレムに過した歳月は、隨分單調な苦しいもので、彼の仕事に熱心な氣質でも仲々愉快と言ふ理にゆかなかつたであらう。他人の敎を暗記し盲目に信ずる力を養成する長い仕事、其は實に心重く氣澁る業である。我々の學校では生徒に考へることを奬勵し創作の才をつけて、彼等の前に横はる生涯の爲に準備をさせるのであるが、バウロは自分で考へてはならぬ、創作の力を持つべからず。それは惡いことだと敎はつた。神學校などで、未だこんな氣風が殘つてゐるが、バウロやガマリエル時代の悲むべき遺物であると云はなければならぬ。

信仰箇條や敎理問答は、善い少年少女を養成する最良のものではない。然もバウロが、恰も海綿が水を吸取るやうに、何の疑問も無しに鵜呑にしなければならなかつた無終の規則傳說の量に比べれば瑣々いなものである。彼が神殿の側のガマリエル學校に通ふ途中、日光を遮る高い家屋兩側に列ぶ市の同じ狹い街路を往復する日々、バウロの生命は益狹くなつた。敎法師、學生、老若の祭司、老若の學者、あらゆる種類のパリサイ人等が彼の友であつた。夜晝絶えぬ犧牲、神殿の儀式洗條祈禱が彼の

單調な行事で、彼の生活の行爲一々、他人の定めた型にはめられ規則づめにせられ、それが皆彼を善良にする爲で、而も律法を守る丈けでは善良になることは出來ぬと敎へられたのだから、眞に堪らない。

バウロの生命は狹くなつたばかりではない、更に日一日と人間の規則學問の迷園に一歩々々深入りし、既に、かの森の交錯する枝葉がやがて晝なほ暗き全くの闇を作るやうに、彼の四周は暗くなりかゝつてゐた。そして彼は、自分で他人を敎へる時が來たならば、自分の敎へられた事ばかり、そして何一つ殘さず變へず其儘全體を敎へなければならぬと告げられたのである。

勿論學生時代中始終エルサレムの市に居て、少しも他に出てはならぬと云ふのではなかつたから、時には休暇を得てタルソの家に歸ることもあつた。母の愛は强い磁石である。愛する息子が左程遠からぬ處に居れば、息子を時々側に引寄せることを遮る力は何物も無かつた。子供の眼を見て、青年期から成人期に變つてゆく徵を讀み、而も彼の心が未だ母親から離れてゐないことを示す深い輝を認めさへすれば母は滿足なのである。

バウロは船や帆のことは良く解つてゐた。それでタルソ行の便船の有る時期を外さずカイザリヤの港に往き、容易に乘船することを得た。風さへ追手ならば遲ひ船でも三百哩を十日許で帆走ることが出來る、祭の後にはいつでも澤山の路連が同じ航路をとるのであつた、多くの學生と同じやうに、暫